

愛知学院大学

教養部紀要

第60巻 第2号

論文

- 尾崎 孝之：「若き日の希望」から「生の幸福」へ——中原中也の魂の行方——……………（1）
- 清水 義和：トマス・ピンチョンと寺山修司——メディア映像論——……………（13）
- 小村 賢二：Rによる Global Warming 予測……………（47）
- 川口 高風：慈雲尊者の五条衣について……………（122）

資料

- 川口 高風：「能仁新報」よりみた名古屋の仏教(一)
——明治二十三年五月～明治二十三年十二月——……………（110）

2012

愛知学院大学教養部

「若き日の希望」から「生の幸福」へ

——中原中也の魂の行方——

尾 崎 孝 之

中原中也の『山羊の歌』に「無題」と題された作品がある。¹⁾その中の「V 幸福」は「幸福は既の中にゐる/藁の上に」という一行で始まっている。これに関して、河上徹太郎はポール・ヴェルレーヌの詩の一節〈L'espoir luit comme un brin de paille dans l'étable〉（「希望は既の中の一本の藁のように光っている」）²⁾のパロディーであるという。³⁾ヴェルレーヌの詩句でうたわれているのは、しかし、「幸福」ではなく「希望」なのである。

また、同じ詩集の「羊の歌」の「III」でエピグラムとして引用されているシャルル・ボードレーールの詩句の内、〈Ma jeunesse〉（「私の若き日」）⁴⁾を中原は「我が生」と訳している。

何故中原中也は「希望」を「幸福」に変え、また「若き日」を「生」に変えたのであろうか。あるいはそこに何を読み取ることができるのであろうか。こうした問いに答えようと試みるのが本稿の目的である。

I

まず、「希望」から「幸福」への変換について考察しよう。そもそも中原中也にとって、希望と幸福とはどんな関係にあるのであろうか。

希望とは、本来、ここと今という現実の時空のあり方に満足できない、少なくとも、それを受け入れることができない人が、ここでもなく今でもない時空、特に未来の時空において、その不満足の原因である欲求や夢が充足されるように願うことであろう。

換言すれば、希望という動きが人の心に出現するのは、ある欲求や夢にその人が囚われているからである。希望には「～になりたい」「～を手に入れたい」という心の動きをどうしても

欠かすことができない。

もし、そうした欲求や夢というものがなければ、希望というものは存在しない。そのとき人は、何も求めず、何も夢みることのない時間に対面することになる。

中原中也は、実際、希望や夢ではなく希望や夢の消失-欠如を、あるいはその結果としての無為や倦怠を数多くうたっている。例えば「汚れつちまつた悲しみに……」における「汚れつちまつた悲しきは/なにのぞむなくねがふなく/汚れつちまつた悲しきは/倦怠のうちに死を夢む//汚れつちまつた悲しみに/いたいたしくも怖気づき/汚れつちまつた悲しみに/なすところもなく日は暮れる……」とか、「朝の歌」の「鄙びたる 軍楽の憶ひ/手にてなす なにごともなし。//小鳥らの うたはきこえず/空は今日 はなだ色らし、/倦んじてし 人のこころを/諫めする なにものもなし。//樹脂の香に 朝は悩まし/うしなひし さまざまのゆめ、〔……〕/土手づたひ きえてゆくかな/うつくしき さまざまの夢。」とかが、すぐに思い浮かぶ。

しかし人は、このような何も求めず、何も夢みることのない時空を詩作品の外で、つまり現実世界において実際に生きることができ得るであろうか。さらに言えば、詩作品の内と外を切り離すことができると仮定した場合、そして、詩作品の外という現実世界において、何も求めず何も夢みることのない人がいるとした場合、その人は生きていけると言えるのであろうか。

ところで、生きるということが表現しようとする事象には実に様々な様態がある。いろいろな生き方、生きる姿勢、生きる形があることを忘れることはできない。一人ひとり顔が違うように生きることに對する考え方も違っている。何もしないで時間をやり過ごすことが生きることであると言う人がいる一方で、逆に、ある目標に向かってそれに一步でも近付くように努力することが生きる道であると考え人もいる。またある人は、何も考えることなく目の前に提示される事柄に没頭して一生を送るかもしれない。さらには、赤ん坊の生き方、幼児の生き方、小学生、中学生、高校生の生き方、働く人の生き方、あるいは年金だけで暮らす人の生き方、病気に苦しむ人の生き方、同じ一人の人でも年齢によって生き方は変化するであろう。ましてや、この地球上に存在する何十億人のそれぞれの生き方は正に千差万別であると言わなければならない。従って、この生き方こそが本当の生き方であると決め付けることはできないし、また、決め付けてはならないのかもしれない。

それでも、あるいはそれと同時に、人には「生きるとは何か」という問いを発せざるを得ない側面もあることは否定できない。様々な生の形があるのに、あるいはあるからこそ、「生とは何か」という問いを、人は自らに課するのである。

同様に、生を中断するもの、あるいは生を完成させるものとしての死を考えることができるかもしれない。そしてその死にも実に様々な形がある。病気による死、事故による死、戦争での死、自らに与える死、人に殺される死、といった多くの死の形があり、さらにその中で

もいろいろな形の死があるであろう。そしてここでも奇妙なのは、人が「死とは何か」という問いを自らに課することである。

たとえそうした問いを自らに課したとしても、その答えは、現実はその人が体験した、体験しつつある、あるいは体験するかもしれない生き方（や他者の死に方）を反映したものになる。即ち、そこでも無数の答えが想定されるのだ。

ここでは、先ほどの「何も求めず、何も夢みることのない人がいるとした場合、その人は生きていると言えるのであろうか」という問いに立ち戻れば、それも生の形の一つであると答えることができるように思われる。

実際、中原中也は「少年時」の最終詩節で「私は希望を唇に噛みつぶして/私はゴロゴロする目で諦めてみた……/噫、生きてみた、私は生きてみた！」とうたっていて、希望や夢の消失-欠如が彼においては生の形の一つであることを読者に教えてくれるかのようである。

とりあえず、ここでは、中原中也の詩作品の中でうたわれている希望や夢の消失-欠如あるいはその結果としての倦怠や無為に立ち戻って、倦怠や無為がどのように生の形の一つになり、さらにはそれが幸福につながり得るのかを考えてみよう。

中原中也の『山羊の歌』の中に正に「失せし希望」と題された作品がある。その中で中原は「暗き空へと消え行きぬ/わが若き日を燃えし希望は。[……] //暗き空へと消えゆきぬ/わが若き日の夢は希望は。[……] //あはれわが若き日を燃えし希望の/今ははや暗き空へと消え行きぬ。」とうたっている。

この作品に対して中村稔は「中原中也にとって、『少年時』とはその生涯の黄金時代であった。あるいは、黄金時代と夢想することが、その詩想の原型をなした。この原型が時に烈しく、時に繊細に、さまざまなイメージをとって、その詩をもたらししたのである。[……] この作品では、失われたものを希望とよび、夢とよんでいるだけで、イメージの具体性を欠いている。格調の暗鬱な力強さ、詠嘆的な表現の重畳的な訴えに比し、その核心をなすべきものが抽象的で弱々しい」⁵⁾と言っている。

中村稔とは違って、「失われたもの」が「希望」や「夢」なのではなく、中原は正に希望や夢を失ってしまったと考える方がいいかもしれない。そして、中原にとって、中村稔の言う「少年時」の希望や夢を失ってしまったところにしか真実の詩は生まれないと極言することが許されるかもしれない。

何故中原中也は、希望や夢があると、歌をうたうことができないのか。あるいは、希望や夢をうたうことはできないのか。

希望（や夢）とは先述したように、ここと今という現実の時空を受け入れない心の動きである。ここと今という時空にないもの、あるいはそうした時空ではない時空を求めることであ

る。逆に、ここと今という時空をそのまま受け入れるところに存在するのが、中原中也にとっての幸福であり、それが中原中也の歌になるのだ。

だからこそ、本稿の冒頭に引用した「無題」の詩行に続いて中原は次のようにうたっている。「幸福は/和める心には一挙にして分る。//頑なの心は、不幸でいらいらして、/せめてめまぐるしいものや/数々のものに心を紛らす。/そして益々不幸だ。//幸福は、休んでゐる/そして明らかにすべきことを/少しづつ持ち、/幸福は、理解に富んでゐる。[……] //されば人よ、つねにまづ従はんとせよ。」

また『山羊の歌』の「秋」と題された作品の「2」には「星をみても、星が僕になるんだなんて笑つてたわよ」という詩句があり、「少年時」では「翔びゆく雲の落とす影のやうに、/田の面を過ぎる、昔の巨人の姿——」とうたわれている。多くの人は、「僕が星になる」と表現するだろうし、「昔の巨人の姿のような、雲の落とす影」と表現するであろう。これらの詩句では、所謂主体と客体とが逆転されている。この逆転現象の内に、ここと今という現実の時空をそのまま受け入れることで、自分を言わば虚あるいは無にしようとしている詩人の心の動きを読み取ることができるかもしれない。

これは、自分から出発しないことである。

しかし、自分から出発しないといっても、それは人が生きている限り、一時なりとも詩作品の外で生きざるを得ない限り、不可能なことではないだろうか。そもそも自分というものは他者から切り離されてあるものではない、つまり自分だけが存在するものとしてあるものではない。他者との関係があつて始めて存在するものである。そして、他者との関係が存在するためには、他者と出会うことが必要であるし、その出会いが成立するためには、自分という力の根拠、他者を受け入れるだけの力の根拠がなければならない。つまり自分から出発して他者に向かわなければならない。少なくとも、出会いが成立するためには、その出会いを構成するものとしての自分がなければならない。たとえ、他者との出会いの内に最終的に融合してしまうとしても、その出発点には（そして恐らくはその到達点においても）自分がなければならない。

とすれば、中原中也がその詩作品の内であつたおうとした、自分を虚しくするとか自分を無にするとは何を意味するのであろうか。

宮澤賢治の「雨ニモマケズ」という詩の一節に「アラユルコトヲ/ジブンヲカンジョウニ入レズニ/ヨクミキキシワカリ」⁶⁾というのがある。この動きがどこかで自分を虚しくする、自分を無にすることにつながっているように思われる。中原中也の詩「無題」の「III」では「私は身を棄ててお前に尽さうと思ふよ。//またさうすることのほかには、私にはもはや/希望も目的も見出せないのだから/さうすることは、私に幸福なんだ。//幸福なんだ、世の煩ひのすべてを忘れて、/いかなることとも知らないで、私は/おまへに尽せるんだから幸福だ！」とう

たわれていて、幸福という単語が3度も繰り返されている。希望や目的が背景に退いて、幸福が前景で強調されていることが理解されるであろう。

こうして、二人の詩人とも「ジブンヲカンジョウニ入レズニ」とか「身を棄てて」とかうたっている。ここには、自分だけの利益、自分だけの損得勘定を考えるという動きとは対極の心が観察できるように思われる。自分よりも自分の傍にいる他者の方を大切にすると心の動きをそこに感じることができる。「おまへに尽せる」という幸福がそこにはある。それはしかし、詩作品の世界では存在可能なものかもしれないが、現実世界でそれが常にできるとは限らない。そしてそれができないとき詩人は、自分が不幸であるように感じてしまう。未発表詩篇の中の「死別の翌日」で中原は次のようにうたっている。「生きのこるものはづうしく、/死にゆくものはその清純を漂はせ/物云ひたげな瞳を床にさまよはすだけで、/親を離れ、兄弟を離れ、/最初から独りであつたもののやうに死んでゆく。[……] /歩いてゆく私はもはや此の世のことを考へず、/さりとて死んでいつたものものことも考へてはゐないのです。/みたばかりの死に茫然として、/卑怯にも似た感情を抱いて私は歩いてゐたと告白せねばなりません。」

ただ、自分を虚しくする、自分を無にするという動きをうたおうとする詩人の心の底には、しかし、虚しくされるべき自分、無にされるべき自分があることを忘れることはできない。

そしてもう一度言えば、自分を虚しくし、自分を無にしようとすることは、少なくとも詩作品の内においては可能なことかもしれないが、詩作品の外での現実生活を生きている限り、それを常に実現することは不可能なもののようと思われる。つまり、詩作品の内ではそれを願うことはできるとしても、現実生活でそれを常に生きることができるとは限らないのだ。

ともあれ、中原中也が詩作品のことばとの対面を通して追求するのは、虚しくし無にしようとしても残り続ける自分を、それでも虚しくし無にしようとする限りにおいて受け入れることで到達する、「おまへに尽せる」「和める心」の幸福なのである。それは、現実生活において壊滅した希望が、詩作品において幸福として甦るかのようである。

II

今度は、「若き日」と「生」との違いについて観察しよう。

中原中也は、何故シャルル・ボードレールの「私の若き日」を「我が生」と訳したのであるうか。それは、中原にとっては、「若き日」こそが「生」であるからなのか、中村稔の言う「生涯の黄金時代」としての「生」であるからなのか。

ボードレールは、「敵」と題されたこの詩作品の中で「私の若き日は、そこここに輝く光が差したとはいえ、/黒々とした嵐でしかなかった。/雷と雨とが多くのを壊してしまい/私

の庭には真赤な実もわずかに残るだけ。//こうして私は想念の秋にたどりつくのだ」とうたっている。

これに対して、中原中也は「生ひ立ちの歌」の「I」で「幼年時/私の上に降る雪は/真綿のやうでありました//少年時/私の上に降る雪は/霰のやうでありました//十七—十九/私の上に降る雪は/霰のやうに散りました//二十一—二十二/私の上に降る雪は/雪であるかと思はれた//二十三/私の上に降る雪は/ひどい吹雪とみえました//二十四/私の上に降る雪は/いとしめやかになりました……」とうたう。

ボードレールは、また、「秋の歌」で、「短すぎた私たちの夏の強烈な明るさ」が終って、「寒々とした暗さ」の秋がやってくるとうたっている。⁷⁾ボードレールがうたう若き日や夏とは、一生や四季という全体の中の部分としての期間である。事実、若き日や夏の後で秋がうたわれていて、若き日や夏が一生や四季の一部であることを窺わせてくれる。

一方で、中原においては、「二十四」になり、すべてが終わってしまったかのように、あるいは、「幼年期」に回帰するかのように、雪がおだやかなものになっている。これは、若き日や夏という生命の限られた部分ではなく、生命の全体が決定的に終ってしまったかのような『在りし日の歌』という中原中也自身のもう一つの詩集の題名もこの考えを強く後押ししてくれるであろう。

こうして、中原中也は、若き日という限られた期間としての部分が終わったときに自分の生の全体も既に終ってしまったかのように見做していることが理解される。実際、そうしたことを窺わせる作品が幾つかある。『在りし日の歌』に収められた「骨」という詩でも「ホラホラ、これが僕の骨だ、/生きてゐた時の苦勞にみちた/あのけがらはしい肉を破つて、/しらじらと雨に洗はれ/ヌックと出た、骨の尖。[……] //ホラホラ、これが僕の骨——/見てゐるのは僕？可笑しなことだ。/靈魂はあとに残つて、/また骨の処にやつて来て、/見てゐるのかしら？」とうたっている。あるいは「わが半生」には「外では今宵、木の葉がそよぐ。/はるかな気持の、春の宵だ。/そして私は、静かに死ぬる、/坐つたまんまで、死んでゆくのだ」とあるし、『山羊の歌』の「秋」には「僕は倦怠を観念して生きてゐるのだよ、[……] /死ももう、とほくはないのかもしれない……//2//『それではさようならといつて、/めうに真鍮の光沢かなんどのやうな笑を湛へて彼奴は、/あのドアの所を立去つたのだつたあね。/あの笑ひがどうも、生きてる者のやうぢやあなかつたあね。[……] //『ええさうよ。——死ぬつてことが分つてゐたのだわ？[……]』」とある。さらには、Iで引用した「少年時」の最終詩節「噫、生きてゐた、私は生きてゐた！」をもう一度ここで思い起こしてもいい。さらには、未発表詩篇の「早春散歩」の一節「私はもう、まるで過去がなかつたかのやうに[……] /風のなかを吹き過ぎる/異国人のやうな眼眸をして、/確固たるものの如く、/また隙間風にも消え去るものの如く」を思う

こともできる。

しかし、中原の生は現実生活においては終っていなかった。とすれば、自分の生が終ってしまったとうたう中原に、何を読み取ることができるのであろうか。

Iで引用した詩の中で、中原中也は「生きのこるものはづうづうしく、/死にゆくものはその清純を漂はせ」とうたっていた。これは例えば、死んでしまった弟恰三の後に残って生き続ける負い目の感情がいつまでも中原の心の中で消えなかったことを意味するのであろう。その負い目の感情が生き続けたいという意欲を「卑怯にも似た感情」に思わせると同時に、死にたいという欲求を詩人に齎しているのもあろう。

実際、『在りし日の歌』の「春日狂想」で詩人は次のようにうたっている。「愛するものが死んだ時には、/自殺しなけあなりません。//愛するものが死んだ時には、/それより他に、方法がない。//けれどもそれでも、業(?)が深くて、/なほもながらふことともなつたら、//奉仕の気持ちに、なることなんです。/奉仕の気持ちに、なることなんです。」もし詩人が神を信じる者であったとしたら、十字架の聖ヨハネのように「死ねないので死にそうだ」⁸⁾という叫びを発していたのかもしれない。中原はしかしスペインの神秘宗教者ではなかった。彼には宗教者のように永遠の救いを求めようとする強い欲求はなかったように思われる。自分の生が終ってしまったとうたう中原中也が詩作品に求めたのは、永遠の救いではなく、終ってしまった生とは別のもう一つの生なのであろうか。

では、そのもう一つの生とはどんな形をしているのであろうか。

この問いに答える手掛りとして、フランスの一人の詩人イヴ・ボヌフォワの、詩についての考察を取り上げてみよう。ボヌフォワは、詩と希望を結び付けることを願っている、さらには詩と希望をほとんど同じものと見做したいと述べている。⁹⁾そのとき詩は、ボヌフォワにとって、どんなあり方をしているのであろうか。希望とは先述したように、実現されるべき事柄が、ここと今にないこと、従って、ここでもない今でもない時空を目指す動きをその内に秘めていることを意味していた。それでいて、ボヌフォワはここと今が象徴する限定性や現前を詩の本質の一つとしている。¹⁰⁾この矛盾は何だろうか。希望である限りにおいてここと今にはないものを求める、しかし限定性や現前である限りにおいてここと今という時空にこだわり続ける。これは、ボヌフォワが望む詩作品のことばには、ここと今を離れる遠心的な動きと同時に、手前や彼方でもなく、過去や未来でもなく正にここと今という限定性や現前を人に齎してくれる求心的な動きがあることを意味する。換言すれば、限定性や現前、あるいはここと今とは常に既に、ここでもなく今でもないもの、つまり手前や彼方、過去や未来という思い出や希望に、ことばを通して、ことばの場で、強く結び付いているのだ。つまり、過去や未来という不在がなければ、思い出や希望という不在がなければ、ここと今という現前もないのだ。

こうして、イヴ・ボヌフォワが詩を希望と結び付けることで実現しようとする現前が、即ち、過去や未来、思い出や希望という不在を通して垣間見ようとすることと今という現前が、中原中也が詩作品を通して到達しようとするもう一つの生に、つまり、終ってしまったものとしての生という不在を通して垣間見ようとする一筋の光としてのもう一つの生に重なる。

あるいは、中原中也が「芸術論覚え書」に記している文章「『これが手だ』と、『手』といふ名辞を口にする前に感じてゐる手、その手が深く感じられてゐればよい」¹¹⁾を想起するとき、イヴ・ボヌフォワが言うことと今という現前とは、正に、名辞以前の手を深く感じるところに出現すると考えられる。そして、中原中也が目指すもう一つの生もこの名辞以前の手の世界につながるものであろう。

しかし、そのときでも「手」という名辞がなければ、その名辞以前の手も深く感じることはできないことを忘れてはいけない。

ところで、中原中也は30歳になって、東京や鎌倉での生活を切り上げ、山口県の田舎に帰ることを決意する。このときも、田舎に帰って何か新しいことをしようという具体的な希望は中原にはない。先のことを考えると「茫洋」だと言う。『在りし日の歌』の「後記」に次のような文がある。「別に新しい計画があるのでもないが、いよいよ詩生活に沈潜しようと思つてゐる。／扨、此の後どうなることか……それを思へば茫洋とする。／さらば東京！ おゝわが青春！」。そして小林秀雄の「中原中也の思ひ出」という文章の中でも中原は「茫洋」ということばを小林に向けて発している。その箇所を引用しておこう。「彼は、ビールを一口飲んで、『あゝ、ボーヨー、ボーヨー』と喚いた。『ボーヨーつて何だ』『前途茫洋さ、あゝ、ボーヨー、ボーヨー』と彼は眼を据ゑ、悲し氣な節を付けた。私は辛かつた。詩人を理解するといふ事は、詩ではなく、生れ乍らの詩人の肉體を理解するといふ事は、何と辛い想ひだらう。」¹²⁾

足が踏みつけて立つべき大地の堅固さにつながる過去も、仰ぎ見る空の彼方の未来も、はっきりと存在しているとは思われない現在、それは現在ともいえない現在なのだ。その頼りなさが「茫洋」ということばに結び付くのであろう。

東京を離れても中原中也は詩を離れようとはしなかった。ここでも、一人のフランスの詩人のことを、想起してもいいかもしれない。それは、20歳そこそこで詩を離れたアルチュール・ランボーである。何故ランボーは詩のことばの支配を離れようとしたのか。それは、詩のことばが作り上げる華麗で壮大な世界が、遂には嘘の世界であるということが分かってしまったからだ。¹³⁾ランボーは詩を棄ててヨーロッパを放浪し、やがてアフリカにまで足を伸ばすことになる。それでも、家族に宛てて手紙を書くことを止めなかった。その手紙の中で綴られることばは、彼が詩のことばと別れて抱きしめようとした現実が、いかに「ざらざらした」¹⁴⁾ものであるのかの確認でしかなかった。しかし、嘘である詩の世界よりも、「ざらざらした現実」の

方が真実であると感得したランボーは、その潔癖さのために、そうした「ざらざらした現実」を前にしても、あるいは現実に取り囲まれても、そこから逃げ出して、再び詩のことばの嘘の世界の中に逆戻りしようとはしなかった。

詩のことばが嘘であると納得するためには、ランボーにおいて、誰よりも深く詩のことばの内への沈潜があった。それ以上は深く行けないところまで詩のことばとの対面があった。

これに対して中原中也はどうであったのだろうか。

中原は関東地方を離れて中国地方の田舎に帰ることを決意したとき、先に引用したように「いよいよ詩生活に沈潜しようと思つてゐる」と記している。中原にはランボーのように詩を止める気持ちはなかった。それどころか、ますます深く詩のことばとの対面を通してもう一つの生を究めようとしているかのようである。

中原中也にとって、詩のことばと付き合うことは嘘とは思われなかった。むしろ、詩のことばとの対面にこそ、嘘とは対極にある真実が潜んでいると彼は考えていたのかもしれない。

中原中也には大岡昇平に宛てた詩の中で、詩はおもちゃであるかもしれないが、月給取りの大岡昇平には、そのおもちゃで遊ぶことはできないであろう、自分はそのおもちゃで遊ぶんだと息巻いている。その一部を引用しておこう。「俺にはおもちゃが要るんだ/おもちゃで遊ばなくちやならないんだ/利得と幸福とは大体は混る/だが究極では混りはしない〔……〕/俺にはおもちゃがよく分つてるんだ/おもちゃのつまらないことも/おもちゃがつまらなくもそれを弄べことはつまらなくはないことも〔……〕/おれはおもちゃで遊ぶぞ/おまへは月給で遊び給へだ」

中原中也も、詩がどこかでおもちゃに通じる側面を持っていることが分かっていた。そのときのおもちゃとは何であろうか。おもちゃとは、元来、社会生活を実際に営む前の子供にとって大きな遊びを齎してくれるものであろう。無垢で無邪気な子供の純粋な遊びの対象となるもの、あるいは遊びそのもののことであろう。また、大人でも、例えばスポーツに熱中しているとき、誰もが無我夢中でプレーに没頭するであろう。

子供にとってのおもちゃにしても、大人にとってのスポーツにしても、それは所謂社会生活の営みから見たら無駄で無意味なことかもしれない。そのおもちゃやスポーツに子供や大人は熱中する、情熱を燃え上がらせる、それこそが生きることであるかのよう。

中原中也にとって、詩は正にこのおもちゃでありスポーツなのだ。ただ、現実生活においてそれだけでは生活することはできない。実際、中原はその晩年まで母親からの仕送りにより生活していた。

現実生活は現実生活、詩生活は詩生活と切り離して考えることができればよいのだが、そのことが中原にはできたのであろうか。ランボーはその潔癖さのために、詩の世界が嘘だと思っ

た時点を境にして詩を棄て去った。一方で、中原中也は、詩の嘘性、おもちゃ性は分かっていた。それでも、この嘘であるかもしれないおもちゃとしての詩のことばと付き合うことは、嘘ではないという思いがあった。それに、生が終ってしまったと感じた中原には詩を通してもう一つの生を探究することしかなかった。この意味では正に中原は、マラルメの言うように、生きている内に自らを詩から切り離すランボー¹⁵⁾とは対照的な詩人なのである。詩こそが中原にとっての生なのだ。詩こそが中原にとっての真実なのである。

そのとき中原にとっての詩とはどんな姿を提示するのであろうか。小林秀雄は中原中也の詩作品の特徴はそれが「歌」であることだと述べている。¹⁶⁾そのときの「歌」とは何であろうか。一般に歌というとき、そこでのことばは、何かを伝えようとする直接的な伝達を主な目的として使われてはいない。むしろ、その直接的ないきなりの伝達を中断させる、あるいは停止させるかのようなことばの用法が歌にはある。

それは何のための中断であり停止なのであろうか。ことばが一時立ち止まって動かない、それでいて、あるいはそのことを通して、ことばの本来持っているコミュニケーションの流れが中断、停止されるとして、果たして何がそこに出現するのであろうか。

日常生活の多くの場面で使われることばのつらなりを散文であるとすれば、その散文は、ことばを展開することを通して論理のつながりを明確に打ち立てることに、その存在理由を見出す。一方で詩作品を構成する韻文は、それとは逆に、直接的な論理のつながりを断ち切ってしまう。ポール・ヴァレリーは散文と韻文とをそれぞれ歩くことと踊ることとに喩えている。¹⁷⁾

歩くことは多くの場合、A地点からB地点への移動を目的としている。一方で、踊ることは、どこへも導かない。そこにはいかなる移動もない。従って、移動に伴う意味の生成もない。踊ることは、一つところに留まっていて、どこか別のところへと行こうとしない。場所の移動を否認して、踊るという動きそれ自体で満足するのだ。

だからこそ、散文を読む者は作者の言いたいことが分かるのだ。何が言いたいのか理解できるのである。一方で、韻文を読む者は詩人が何を言いたいのかははっきりとは分からないことが多い。

具体的に観察してみよう。

例えば、ボードレールの『悪の華』(*Les Fleurs du mal*)に(「旅への誘い」)«*Invitation au voyage*»¹⁸⁾という作品がある。そこには「*Les soleils mouillés/ De ces ciels brouillés/ Pour mon esprit ont les charmes/ Si mystérieux/ De tes traîtres yeux/ Brillant à travers leurs larmes*」(「その霧の空で濡れる太陽は/涙のむこうで光る/お前のまどわしの眼の/そんなにも神秘的な/魅力を私の精神にもたらすのだ」)という詩句がある。

散文では「*Pour mon esprit*」(「私の精神」)がこの位置に来ることはない。そのために、この

詩句では、ことばのつながりが齎す論理の流れ、つまり歩行の一方向の流れが断ち切れ、宙吊りにされてしまう。そして、引用された詩句の最後に置かれた〈Brillant〉（「光る」）にしても、直前のコンマのために、それが〈soleils〉（「太陽」）に関係するのか、〈yeux〉（「眼」）に関係するのか一義的に決定することができない。そのために、〈Pour mon esprit〉（「私の精神」）によって生じた中断、宙吊りの状態がここでも出現することになる。この中断、宙吊りが、歌の立ち止まり性を形成することになる。

そして、この歌の立ち止まり性によって、詩作品を構成する単語が、単語として残り続けることになる。つまり、詩作品を構成する単語やその組み合わせを、別の単語や別の組み合わせによって置き換えることはできないのだ。この単語の立ち止まりに、イヴ・ボヌフォワのここと今という現前を結び付けてもいいし、中原中也のもう一つの生を結び付けてもいいかもしれない。さらには、先ほども言及した名辞以前の手を想起してもいいだろう。

このことをよく感得させてくれる中原中也の詩句を引用して本稿を終えよう。

それは、『山羊の歌』の最後の詩篇「いのちの声」の最後のパート「III」にある「ゆふがた、空の下で、身一点に感じられれば、万事に於て文句はないのだ。」という一行である。

「ゆふがた」と「空の下」が表現する今とこの現在は、しかし、一回限りに出現し消滅する現在だけに限定されない。過去や未来に取り囲まれた現在だけに限定されない。それは同時に幾度となく出現し、繰り返される現在でもある。その事で、一方向に流れるしかない時間の流れが、この詩句においては、中断され、宙吊りにされている。

また、「身一点に感じられ」ることが出現するには、詩人の自己が、自己という殻に閉じこもっているのではなく、そこから抜け出して正に宇宙全体とも言うべき空間に彷徨い、宙吊りになることを通して、「ゆふがた」と「空の下」という時空と一つになることが必要である。このとき始めて詩人はもう一つの生という裸形のいのちとしての魂になるのだ。

注

1) 本文で引用する中原中也の詩句の内、『山羊の歌』と『在りし日の歌』所収の作品は、『新編中原中也全集』第1巻詩I（本文篇）、角川書店、2000年、そして未発表詩篇の作品は同全集第2巻詩II（本文篇）、角川書店、2001年から引用した。なお、ルビは削除した。また〔……〕は中略を示す。そして/は改行を、//は新しい詩節への移行を表す。

2) Paul Verlaine, *Sagesse dans Œuvres poétiques complètes*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1962, p. 278.

3) 河上徹太郎篇、『中原中也詩集』所収の「解説」、角川文庫、1968年、275頁。なお、『河上徹太郎著作集』第2巻、新潮社、1981年、219頁所収の「中也とヴェルレーヌ」において河上は、二人の詩句について「私はこれを中原が先のヴェルレーヌの詩を読んで書いたかどうか知らない。もし知つてゐて書いたのなら、いきなり「幸福」を「希望」に置き換へて藁の上へ据ゑた所は、私と同じ解釈で、しかも私よりも積極的であ

る。然しこれは中原がベツレヘムのことだけ考へて歌つたのかも知れない」と記している。「私と同じ解釈」と河上が言うのは、河上の参照した註釈書が「希望が一筋の藁のやうだといふのは、その脆さを意味する」という解釈を提示しているのに対して、河上が「この詩全体に漲る淨福を否定出来ないのである。隙洩る光を浴びて金色に輝く一筋の藁は、これ程確かな希望の保証はない筈だ」と述べる箇所（218頁）に関連している。

- 4) Charles Baudelaire, *Les Fleurs du mal* dans *Œuvres complètes I*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1975, p. 16.
- 5) 中村稔、『中也を読む 詩と鑑賞』、青土社、2001年、73頁。
- 6) 『校本宮澤賢治全集』第12巻（上）、筑摩書房、1981年、44頁。
- 7) Charles Baudelaire, *Les Fleurs du mal* dans *Œuvres complètes I*, *op.cit.*, p. 56.
- 8) Yvonne Pellé-Douël, *St Jean de la Croix et la nuit mystique*, Seuil, 1960, p. 79 からの引用。
- 9) Yves Bonnefoy, *L'Improbable*, Mercure de France, 1959, p. 149.
- 10) *Ibid.*, p. 162.
- 11) 『新編中原中也全集』第4巻 評論・小説（本文篇）、角川書店、2003年、139頁。
- 12) 小林秀雄、「中原中也の思ひ出」『新訂小林秀雄全集』第2巻、新潮社、1978年、123頁。
- 13) Arthur Rimbaud, *Une saison en enfer* dans *Œuvres complètes*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1972, p. 116.
- 14) *Idem.*
- 15) Stéphane Mallarmé, *Divagations* dans *Œuvres complètes II*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 2003, p. 125.
- 16) 小林秀雄、「中原中也の『山羊の歌』」『新訂小林秀雄全集』第2巻、112頁。
- 17) Paul Valéry, *Variété* dans *Œuvres I*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1965, pp. 1329-30.
- 18) Charles Baudelaire, *Les Fleurs du mal* dans *Œuvres complètes I*, *op.cit.*, 53.

トマス・ピンチョンと寺山修司

——メディア映像論——

清水 義和

01. まえおき

トマス・ピンチョンが1963年に『V.』を書いて出版してから17年後、スティーヴン・スピルバーグは映画『E.T.』(1980)を公開した。その時代でさえも、まだ、インターネットも携帯電話もなかった。だから映画の中で宇宙人のE.T.が地球から銀河系宇宙の両親に電話でしか会話はできなかった。いっぽう、松本零士氏が『宇宙戦艦ヤマト』『銀河鉄道999』(1978)を発表したときも、未だインターネットや携帯電話はなかった。けれども、2008年6月、星出彰彦宇宙飛行士が、国際宇宙ステーション(ISS)・日本実験棟「きぼう」船内実験室を搭載したスペースシャトル「ディスカバリー号」で宇宙飛行したとき、宇宙から地球の今を体感しつつ松本零士氏に電話した。たしかに、現在われわれが入手できる最新の宇宙の知識からすると、松本零士氏の『宇宙戦艦ヤマト』(1974)や『銀河鉄道999』(1978)のアニメの世界は絵空事のように見える。ところが、トマス・ピンチョンも松本零士氏もある意味でSF的要素が強い作家であるが、トマス・ピンチョンの難解な小説を解読するとき、松本零士氏の『宇宙戦艦ヤマト』や『銀河鉄道999』のアニメを思い浮かべながらイメージすると分かり易くて案外手の届くところにある小説である事が分かってくる。

ところで、映像作家の安藤紘平氏はアナログからデジタル時代の両側に股がって、実験映画『オー・マイ・マザー』『フェルメールの囁き』『アインシュタインは黄昏の向こうからやってくる』などを制作してきた。安藤紘平氏は2007年、寺山修司の実験映画『田園に死す』『書を捨てよ、町へ出よう』『さらば箱舟』をアナログからデジタルに転換してスクリーンに映し再上演した。¹⁾VHSからDVDの変換が可能になった時代からふりかえって見ると、安藤氏の業

績は目立たないかもしれない。しかし見落としてはならないのは実験映画をアナログからデジタルに転換する際の技術である。しばしば、CGによって手描きの絵コンテが持っている固有の優れた側面を洗い流してしまう場合が多々ある。安藤氏は寺山の実験映画の映像をアナログからデジタルに転換する際に技術的にも芸術的にも腐心したという。ところが、安藤氏が監修した寺山修司の実験映画『田園に死す』『書を捨てよ、町へ出よう』『さらば箱舟』のデジタル映像を見ても特別な新鮮さもないので味気ないと感じてしまう。だが、同時に、CGによる機械操作の味気なさを感じないで済んだことを見落としてしまったことも事実なのである。

トマス・ピンチョンが小説の中で種々のカメラの機能について詳細に描写するくだりがある。だが、デジタル映画が一般的になった時代から見るとピンチョンの小説構造は古色蒼然とした過去の作品のように見えてしまう。だが、もしも、ピンチョンの小説が持つ映像感覚をデジタル映像で再現するとすればどうなるだろうか。このような仮定をするのは、安藤氏が寺山の映像感覚をその作品を通して継承し自らアナログからデジタルに転換してきた事実があるからである。しかも、安藤氏自身も自主制作の映画をアナログの時代を経て、現在、デジタル映像を制作して批評しているのである。

さて、寺山が、かつて、1970年代から80年代にかけてピンチョンの小説『V.』に示した好奇心は批評として残っており、²⁾しかもそれが詩人で劇作家で映像作家でもあった寺山の批評だから、なおのこと、関心を懷かざるを得ないのである。寺山はピンチョンの『V.』の次回作『競売ナンバー49の叫び』³⁾の翻訳に取り組んでいた。

ところで、トマス・ピンチョンが現代小説に切り拓いた新機軸のひとつは、解けない謎をリーマン予想などを頻繁に引用しながら数学に求めている事であろう。しかもピンチョンは斬新な小説の地平を切り拓くにあたり、解けない課題を「幽霊」として言い換えて示したことだ。これまで、リーマン予想やポアンカレ予想などの難問解明で、幾多の理系の学者がその謎に魅入られ、翻弄され、まるで悪霊に取りつかれるようにして、一生を賭けてきた。例えば、2002年から2003年にかけてロシア人数学者 グリゴリー・ペレルマンは、100年間解けなかったポアンカレ予想の謎を解いて証明してしまった。だが、その後、ペレルマンは、きのこ狩りに出かけて数学の世界から遠のいたと言われる。ペレルマンの奇行は、ちょうど亡霊に唆された『嵐が丘』のヒースクリフや『ねじの回転』の女家庭教師や『エミリーに薔薇を』のエミリーが悪霊に翻弄される様子を思い浮べてしまう。

ところで、デイドロが著した『盲人書簡』は百科全書派として科学の世界を幾分啓蒙的に描いた作品である。いっぽう、トマス・ピンチョンが小説の中で次々と科学、占星術、地理、歴史、映画に展開していく有様は、万華鏡で世界を見つめているようで、百科全書派的な裾野を越えて、心理学、文化人類学、ポストモダニズムの領域にまで踏み込んでいる。

トマス・ピンチョンの『スロー・ラーナー』『V.』『競売ナンバー49の叫び』『重力の虹』『メイスン&ディクソン』『ヴィーランド』『逆光』『LA ヴァイス』を一望すると寺山の作品との類似性にしばしば遭遇する。ともかく、ピンチョンは寺山と殆ど同じ世代である。寺山が、1983年に没してから30年になるが、もしも仮に寺山が死なないで現在も生きていたらピンチョンと同等の素晴らしい作品を残しただろうと思わざるを得ない。二人が同時代人で時代の影響を受けたとはいっても、それほど、二人は似ている。

本稿では、トマス・ピンチョンの『V.』と寺山修司の『壁抜け男—レミング』を比較しながら、これまで説明されてこなかった『壁抜け男—レミング』の闇と謎の世界をピンチョンの技法を視野にして説明する試みである。

02. トマス・ピンチョンの『V.』

ピンチョンが小説『V.』に中で現わしたV.とステンシルは殆ど同一人物であり、しかも、V.はステンシルの父と同一人物であるらしい。それでいながら、ステンシルの母でもある。殊に、謎めいているのは、ステンシルがV.を追い求めてマルタへ行き、ドイツ空軍の爆撃で神父の死を知るのであるが、実は、この神父は男でありしかも女でもある両性具有を現わしている。イエスの誕生はマリアへの受胎告知によって知らされるが、マリアはヨセフがいながら一人でイエスを妊娠するのであるから象徴的に描かれたV.に似ているし、マルタ島で死ぬ神父にも似ている。神父は男ではなく女性であったのであり、身体各部分は義眼であり義歯であったりする。

それに、『V.』の冒頭でプロフェインがワニを退治するところが出てくるが、ステンシルは、マルタへ、このプロフェインを伴ってくる。このようにして小説『V.』全体を一望していると、プロフェインが殺すワニは人類の罪を背負った象徴にも見えてくる。或いは、ステンシルはプロフェインを何故マルタへ連れて来たのかと自問するのであるが、実は、ステンシルがマルタへ行く手続きをしている間、プロフェインはニューヨークのナショナルシアターにあるダリの描いた『最後の晩餐』を観に行くのである。ピンチョンは“偶然の一致”を使う。例えば、ステンシルとプロフェインがマルタへ行くのはダリの『最後の晩餐』と全く関係ないが極めて重要な暗示を現わしている。もともと、偶然の一致を芸術にしたのはジョン・ケージのチャンス・オペレーションである。

第1章で、ベニー・プロフェインは、『V.』の中で重要な役割を果たしている人物の一人であるが、木偶のヨーヨーと同じような生活をニューヨークでしている。

So in January 1956 Benny Profane showed up again in New York. He came into town at the tag-end of a spell of false spring, found a mattress at a downtown flophouse called Our Home, and a newspaper at an uptown kiosk; roamed around the streets late that night studying the classified by streetlight. As usual nobody wanted him in particular.⁴⁾

プロフェインは、一種のアウトサイダーに属するのだけれども、むしろ人生の落ちこぼれであると言っていだろう。

One morning Profane woke up early, couldn't get back to sleep and decided on a whim to spend the day like a yo-yo, shuttling on the subway back and forth underneath 42nd Street, from Times Square to Grand Central and vice versa. He made his way to the washroom of Our Home, tripping over two empty mattresses on route. Cut himself shaving, had trouble extracting the blade and gashed a finger. He took a shower to get rid of the blood. The handles wouldn't turn. When he finally found a shower that worked, the water came out hot and cold in random patterns. He danced around, yowling and shivering, slipped on a bar of soap and nearly broke his neck. (p. 37)

こんな駄目男プロフェインに、「ワニ狩りやれよ」という仕事が舞い込む。というのはプロフェインがニューヨークに来てから、ワニをペットにするのが、その頃、一年から二年にわたって流行して、ニューヨーク中の子供達が珍しがって飼っていたのである。だが、子供達は直ぐに飽きてしまってトイレに捨てたからである。

Geronimo stopped singing and told Profane how it was. Did he remember the baby alligators? Last year, or maybe the year before, kids all over New York bought these little alligators for pets. Macy's was selling them fifty cents, every child, it seemed, had to have one. But soon the children grew bored with them. Some set them loose in the streets, but most flushed them down the toilets. And these had grown and reproduced, had fed off rats and sewage, so that now they moved big, blind albino, all over the sewer system. Down there, God knew many there were. Some had turned cannibal because in their neighborhood the rats had all been eaten, or had fled in terror. (pp. 42-43)

このワニの話は、何かの喩を表わしているように思える。寺山は処女作『血は立ったまま眠っている』の中で、トイレの中に何かいるという寓意的な場面を描いているのを思い出させる。寺山はその正体がある何かを具体的に形に表して示さなかった。だが、ピンチョンは具体的に

「ワニ」として形にして表したのである。けれども、ワニは子供の玩具として一時的に持て囃されたが直ぐに飽きて破棄されたのである。このアウトローとしてのワニの存在は同じような人生の落ちこぼれであるプロフェインの生活と、まるで鏡に反射した虚像となって重なる。

第2章の「ヤンデルレン」で、レイチェルが登場しリアルな時間にヴァーチャルな虚像時間をプラスすると結果はゼロになるのかと思案している。レイチェルはプロフェインらがガール・ウォッチングしていた女性である。

Rachel was looking into the mirror at an angle of 45°, and so had a view of the face turned toward the room and the face on the other side, reflected in the mirror; here were time and reverse-time, co-existing, cancelling one another exactly out. Were there many such reference points, scattered through the world, perhaps only at nodes like the room which housed a transient population of the imperfect, the dissatisfied; did real time plus virtual or mirror-time equal zero and thus serve some half-understood moral purpose? (p. 46)

レイチェルは、リアルな時間も鏡に映せば、ヴァーチャルな仮想現実となり、時間も何もいないことになると考え始める。しかし、レイチェルは、何も無くなる時間とは、幻の世界を表わしている事になるのだろうかと思いにふけり、ここから先は鏡の時間とリアルな時間の針の動きと、鏡の中の時間がくりかえすのかと思いつめながら、リアルな時間とは何かと考えるのである。

But soon the hand passed twelve and began its course down the other side of the face; as if it had passed through the surface of mirror, and had now to repeat in mirror-time what it had done on the side of real-time. (pp. 51-52)

こうして、レイチェルはリアルとヴァーチャルによって生み出される無数の仕掛けを感じるのであるが、次第に、背後では、もくもくと霊体が立ち上るのを感じるのである。

このリアルな時間と鏡の時間を合わせた狭間の中にいる間に、ステンシルが現れ、レイチェルとは全く異なった霊体を V. が象徴しているらしいと考えるのである。

さて、ステンシルは1901年に生まれたと記してある。ところが、父が1919年に謎の死を遂げる。そして、1946年ステンシルが45歳の時に、マジュウルカ島西海岸にある別荘で、ヒアーヴェ・ローヴェンシュタイン辺境伯爵夫人とステンシルの父が残した日誌に書かれた V. について話し合う。

“There is more behind and inside V. than any of us had suspected. Not who, but what: what is she. God grant that I may never be called upon to write the answer, either here or in any official report.” (p. 53)

ステンシルは、V. の背後と内奥には、人の想像を超えたものが潜んでいるらしいと感じている。しかし、その問題は、V. とは誰かという課題ではない。むしろ、ステンシルは、V. とは何者なのか。その問いに答えるのは恐ろしすぎると直感するのである。ともかく、ステンシルは、V. が固有名詞ではなくて、イニシャルの V. だけで記されているに過ぎないので、V. が一体何者なのか分からないのである。

Marc: A woman.

Sten: Another woman.

Marc: It is she you are pursuing? Seeking?

Sten: You'll ask next if he believes her to be his mother. The question is ridiculous. (pp. 53-54)

前述の伯爵夫人は「あなたが追っかけているのは彼女ですか？」と尋ねているが、ハーバート・ステンシルは、「彼（父のシドニー・ステンシル）が彼女を彼（父）の母だと信じているとお尋ねになるのですか？」その質問はばかげている」と答えるのである。さて、直ぐ後で、「ステンシルは常に自分を三人称で言い表している」と描いてある。すると、「彼」というのは、ハーバート・ステンシルであるとも、父のシドニー・ステンシルであるとも考えられる。肝心なのは、伯爵夫人が、「彼ではなく」、「あなたが追っかけているのは彼女ですか？」と尋ねていることである。そうだとすれば、ステンシルは父ではなく、自分自身が、V. を母親として追い求めていることになる。しかもステンシルはそのことを予見できたと思って、その後では、もう、自分と V. と二人だけだと堅く信じ、自分と V. のどちらも社会の絆を失った者同士として、孤独の中で向かい合う事になっていくのである。

Stencil could see a day when he would only be tolerated. It would then be he and V. all alone, in a world that somehow had lost sight of them both. (p. 55)

第3章の「早変わり芸人ステンシル、八つの人格憑依をおこなう」では、魔術が働きはじめる。それで、ステンシルが V. の追跡を始まると幾分『金枝篇』のような魔術的要素が入り混じり始めてくる。ステンシルが、V. の追跡する姿は狩猟動物を追いかけるようなものであり、

牡鹿や牝鹿や野兎を追いかけるように、奇矯でしかも禁断的で古代の性的快楽を追いまわしているのであり、その姿は道化じみてさえみえてくる。

さて、ヴィクトリア女王やアリスが姿を現わし、同じ名前のヴィクトリアが、アナキストやフェビアンや自由党さえも嫌悪するという。また、ヴィクトリアは、世界市民を自称し、プライドは、運動選手が強さや技術を誇るのと同様のものだとも称する。

やがて、生霊が姿を現わして、四つの出来事、つまり、内的で、霊的な恩寵が外的でもあり、しかも可視的に現れ出てくる。また、亡霊が出現し、次いで、機械人形が現れ出たり、自分の幽霊を見たりする経験をする。また、幻が見えてきて、ありもしない声が聞こえてきたりする。

第4章では、「エスター嬢が鉤鼻を付け替える」場面が詳細に描かれる。死後の生活があふれだしてきて、魂の輪廻が現れ出てくる。ところで、登場人物の一人シェーンメイカーには同性愛的傾向があったようだ。また、幽霊の身体を通り抜けるようにして歩いていく場面が描かれている。

第5章の、「ワニと一緒にステンシル、すんでのところでお陀仏」では、プロフェインがワニ退治の為にトンネルに潜り始める。だが、その場面に入る前に、既に、プロフェインの女友達のレイチェルが、鏡を見つめながら、リアルと鏡の虚像であるヴァーチャルの関係に関心を示す場面がある。更にまた、その後で、ステンシルがV.という謎を追いつめ始める事になるのである。そうすると、プロフェインが目前で撃退させようとしているワニは、一体、リアルなワニなのか、それとも、プロフェインの単なる虚像にすぎないのではないかという思いが浮かんでくるのである。

This alligator was pinto: pale white, seaweed black. It moved fast but clumsy. It could have been lazy, or old or stupid. Profane thought maybe it was tired of living.

The chase had been going on since nightfall. They were in a section of 48-inch pipe, his back was killing him. (p. 111)

このような摩訶不思議な世界の中で、ワニは、次第に擬人化されてゆき、悲しげに、プロフェインの方に振り向く。そもそも、プロフェイン自身が、最初にアマーバーのようにぶよぶよしている様子でいるのが紹介されたのである。しかも、アマーバーの生息地としてふさわしい場所こそ下水道であるのも明白である。

From time to time his quarry would half-turn, coy, enticing. A little sad. Up above it must have been

raining. A continual this drool sounded behind them at the last sewer opening. Ahead was darkness. The sewer turned here was tortuous, and built decades darkness. (pp. 111-2)

プロフェインは既に4頭の水ニと一匹の鼠を始末したと述べる。アリゲーター撲滅隊本部によれば、この職場に戻ってくれば1日8時間、人間の糞と水ニの血にまみれる仕事が続いている。それに、プロフェインは他の仕事にありつけないのであるが、水ニ退治の仕事には採用された事も暗示的である。こうして、プロフェインや仲間のアンヘルらが、マンホールの下に出てくる。やがて、二人の上のマンホールのふたが開く瞬間、地界から地上にでた有様が他の惑星に降り立った異様な雰囲気如実に描かれている。

さて、また再び地下の世界に戻ると、そこにはフェアリングの教区がある。かつて神父フェアリングはニューヨークが死滅した後は鼠の天下になると確信し、そこで、鼠をローマカトリックに改宗しようと思いついたに至った場所である。

The water began to get a little deeper. They were entering Fairing's Parish, named after a priest who'd lived topside years ago. During the Depression of the '30's, in an hour of apocalyptic well-being, he had decided that the rats were going to take over after New York died. Lasting eighteen hours a day, his beat had covered the breadlines and missions, where he gave comfort, stitched up raggedy souls. He foresaw nothing but a city of starved corpses, covering the sidewalks and the grass of the parks, lying belly up in the fountains, hanging wrynecked from the streetlamps. The city—maybe America, his horizons didn't extend that far—would belong to the rats before the year was out. This being the case, Father Fairing thought it best for the rats to be given a head start—which meant conversion to the Roman Church. (pp. 118-9)

神父フェアリングは、不条理にも鼠を改宗しようと活動するのであるが、しかも、鼠を食べ生活している。このエピソードの喩は、かつてヨーロッパ人がアメリカを植民地化し、原住民を支配し、キリスト教に改宗し、その後に原住民をヴェトナム戦争の最前線に送って敵兵と死闘を演じた歴史を比喩的に述べているのであろうか。

After a breakfast of roast rat ("The livers," he wrote, "are particularly succulent") (p. 118)

さて、この地下下水道には、フェアリングの教区があるのだから、神父フェアリングが、同期に誕生した鼠集団を丸ごと一つに改宗させたことは間違いないらしい。ところが、鼠のイグ

ナチウスはマルクス主義を唱え、神父フェアリングのキリスト教儀を混ぜ返して困らせるのである。

Rat meat didn't agree with the Father, in the long run. Perhaps there was infection. Perhaps, too, the Marxist tendencies of his flock reminded him too much of what he had seen and heard above ground, on the breadlines, by sick and maternity beds, even in the confessional; and thus the cheerful heart reflected by his late entries was really only a necessary delusion to protect himself from the bleak truth that his pale and sinuous parishioners might turn out no better than the animals whose estate they were succeeding to. (p. 119)

その結果、遂には、神父フェアリングは、鼠の肉が不味くなったと自戒を込めて告白する。ピンチョンは、神父フェアリングが、アメリカの病根を、鼠の肉が美味いと感じながら、次第に不味くなる箇所をブラックユーモアたっぷりに描いている箇所であるにちがいない。

次いで、神父フェアリングが、関心を懷いた雌ネズミが現れる。名前をヴェロニカと言うが、神父の日誌にはイニシャルの V. で記されている。

第6章の「プロフェインが路上の暮らしに戻る」では、プロフェインが初めて8時間アリゲーター・ハンティングを貫徹した夜明けのことが描写されている。プロフェインは、女性に法螺を吹くときには決まって「ワニを殺す」というのである。ところが不条理なことに、プロフェインは、「下水道のワニも残りわずかとなり」と困った様子をする始末で、この場面は、ヴォードビル風でドタバタ喜劇風に描かれている。

第7章の「彼女は西の壁にかかっている」では、義歯が何かを象徴的に現わしているらしい。ところで、義歯は V. を象徴しているらしいのである。だが、一体、その V. とは何者なのか分からないのである。しかも、肝心のステンシル自身は、彼女が誰なのか、何者なのかさえも知らないのである。

そうこうするうちに、ヴィクトリアが忽然と現れ、ゴドルフィンが、ヴィクトリアに向かって「世界がいきなり総崩れを起こして、混沌たる無秩序と化してしまう」と物語る。

次いで、マキャベリの『君主論』が語られ、マキャベリと悪の根源であるメデイチ家との攻防が示される。

続いて、『ヴィーナスの誕生』が述べられ V. との関連が暗示される。また、ヴィシューという名の土地は、ヴェネズエラのことであると言い争いが始まる。そのあとで、或る人が、ヴィシューはヴェネズエラの暗号名だと思いついたと言いだすのである。それから、ゴドルフィンが登場し、技師が不治の廃人になって精神病院にいる事を思い出しながら、鏡に映った自分の

顔のリアリティーを見つめている。

また、更に別の登場人物の一人、エヴァンがガウチョに火山の中に都市があって、その火山は百年ごとに噴火して炎熱の地獄になると語る。それにもかかわらず、人はそこに住みつづけるという。

やがて、霊的交換が働き始め、汚れた惑星の地球に人間が住んでいると語り始めるのである。

また、ヴィクトリアは、「この街は表面の下で何かが震えながら、どっと噴き出す時を待っているようです」と語る。すると、エヴァンは「亡霊が人々を取り囲んでいる」という。ヴィクトリアとエヴァンはツーリストの姿が「死の舞踏」のように思われたようだ。

ゴドルフィン「ヴィシューは、夢で、世界消滅の夢でもある」という。さて、「世界消滅の夢」は寺山修司の『壁抜け男—レミング』のラストシーンにも出てくる。

第8章の、「レイチェルにヨーヨーが戻り、ルーニーは歌を歌い、ステンシルはチクリツを訪ねる」で、プロフェインは、当時流行のレディメイドが醸す軟派の夢が彼を包んでいるが、同時に、ワニ狩りで得たお金も底をはたいてきて女遊びもままならぬと感じている。

いっぽう、ステンシルはV.の輪郭も形もぼけて来て、追跡の理由が分からなくなっている。或いはV.がステンシルの正体ではないと思っている。またステンシルはアイゲンヴァリューやヤンデルノの正体がV.でないと同様だと考えるのである。更に、ステンシルが見つけ出した相手のV.がある種の「魂の女装」した自分自身であるとしたら、ファルスだとも思っている。ステンシルはV.の性別も、如何なる「種」や「属」に入る生き物なのか知らない。

さてヴィクトリアも鼠のヴェロニカが同一の存在だと仮定しても、輪廻転生とはならないと考えるのである。

第9章の「モンダウゲンの物語」の中で、モンダウゲンは、ファン・ヴェイクが「振り子」(リアルな時間)のおかげで「混沌」に落ち込まないでいるといった独白にやけっぱちになっている。モンダウゲンは夢の中で黒いマスクが顔全体を覆っているという幻に付き纏われている。また相手がヴェラ・メロヴィングだと分かるのは何故かと自問自答している。更に、モンダウゲンは、夢の中に出てくる眼前の光景の能力について独白し始める。更に、モンダウゲンは、夢の中ヴェラ・メロヴィングの企みが関与して、共謀関係の輪郭がつかめてきたとつぶやくのである。

そしてモンダウゲンは、朦朧とした意識の中で、壁画『死の舞踏』とアフリカ版鎖でつながった土人の行進を思い浮べている。やがて、静止画の壁画とは対照的にアフリカ人の死の舞踏が動画的に展開していく。白人の植民地支配は、冒頭のプロフェインのワニ退治に似ている。プロフェインは女性に欲情を懷くときにワニを殺すのである。モンダウゲンは、夢から目

覚めると、ヴァイスマンが謎めいた暗号を見せる。

“The world is all that the case is,” Mondaugen said. “I’ve heard that somewhere before.” A smile began to spread. (p. 278)

この一種の言葉のジグソーパズルズは、ヴィトゲンシュタインが『論理哲学論考』の中で次のように述べている「世界は、成立している事柄の全体である」を思い出させる。

第10章の「様々な若者集団が寄り集まる」で、プロフェインは「破滅の方向へ進むだけだ」と叫ぶ。だが相手から「ヒロイックな愛のために男が必要」と言われてしまう。その間にも、外部では惨事が起こっている。プロフェインは、ビールを飲みながら、マフィアに「生命ある世界は、その間、生命無き死界と通常以上の激しさで擦れ合う」と言われて騒ぎだす。

同じころ、素面のステンシルは緊張型表現主義の画家が「死の舞踏」について話すのに耳を傾けている。

第11章の「マルタ詩人ファウストの告解」では、ファウストが手記の中で、自我が幾つにも分裂して告解を書いている。先ず、自身が消えた跡に残る心的遺産について語っている。ところで、フランソワ・グレゴワールは『死後の世界』で人間だけが死を考えているという。また、ファストが「歴史という大蛇は一つの身体なのだ」とも言っている。更に、「神殿や下水道や地下墓地の闇の中でひとつなのだ」と述べ、「島全体が融合する霊的交換」へと進むのであった。

次いで、ファウストⅡが「世界壊滅のスローな進行」の話をする。更に、ファウストは「岩の子宮」というフレーズが大切だと答える。続いて、ファウストは「夢の中には二つの世界がある。街路と、その下だ」という。

マルタにドイツ空軍の13の爆撃があり、ファウストが生まれて告白録を書くことになった。

ここで、唐突に、ステンシルが登場し、ステンシルは、ファウストが生まれて書いた告白録の手記を読みながら、父の死とV.の死は無関係だったと思ったかったと回想する。そして、ステンシルは、父の死とV.の死は、「この二者は一つの物の違った面にすぎないのか」と思いにふける。つまり、言い換えるなら、ステンシルは、ファウストが書いた告白録の手記を読みながら、ファストとステンシルの父の死を同一視しているようなのだ。

第12章の「楽しみも尽きはてる」では、ドイツ空軍が飛行機でマルタを爆撃して町を一網打尽に破壊するのとは違って、いっぽう、プロフェインが住むニューヨークでは、茶番が横行して、住民は何も起こらないニューヨークに飽き飽きしている。

第13章の「ヨーヨーの紐とは心のあり様だったと分かる」では、ステンシルはニースで泊っ

た売春宿の天井の鏡に V. が映ったのを見る。やがて、ステンシルにとって、V. はもはや、手のつけられないほど取り散らかった概念になったと認識する。

第14章の「恋する」では、パリのモンマルトルで、女はマネキン人形のような姿勢を常に保っている。だから、その女は「あなたは本物の人間ではない」ということになる。これは、ノーバート・ウィーナーの『人間機械論—人間の人間的な利用』を想起させる個所である。恋に落ちた V. は、機械仕掛けのヘルプを求め、このようにして、V. は33歳になって、放浪の末、恋を見つけたのである。更に、レディ V. はイタリア人の熱狂的な領土奪還運動家と駆け落ちしてしまうことになる。そこで、モンマルトルの人の眼には、二人は、この地上からも掻き消えたように見えた。

Rumor had it that a week or so later lady V. ran off with one Sgherraccio, a mad Irredentist. At least they both disappeared from Paris at the same time; from Paris and as far as anyone on the Butte could say, from the face of the earth. (p. 414)

V. が死んだというのが噂なので、果たして、V. が死んだのかどうか分からない。そこで、ステンシルは V. の遺品を捜しに V. の死の事実を追い求め始める。

第15章の「いざ、サッハ」の中で、プロフェインは、アメリカワシントン DC のナショナル・ギャラリーで、ダリの『最後の晚餐』で偶然の出会いを求める。いっぽう、ステンシルは、V. の亡霊に会うのに備えての肝試しを試みる。

第16章の「ヴァレッタ」の中で、ステンシルは V. の全史を素描し、結局、V. というイニシャルと幾つかの命なき物体が、繰り返し現れるというだけの話ではないかと疑念を強める。だが、V. が死んだが、「形見がある筈」で、例えば、ガラスの義眼がある。このようにして、ステンシルは次第に V. が死んだ筈はないと思う。マルタのヴァレッタにいと、ステンシルは V. を感じるという。V. の国は“偶然の一致”が支配する国である。プロフェインがステンシルからフェアリング神父の名前を二度聞くというのも“偶然の一致”であろう。プロフェインがアリゲーター・パトロールの話を始めだすと、ステンシルが堅くなる。プロフェインが覚えているのは、ワニを追いかけてフェアリング神父の教区に入り、銃をワニに向かってぶっ放すと行き止まりの部屋は薄気味悪く光っていたことだ。

V. を追いかけて世界を回るステンシルには仲間がいる。不思議な事にステンシルはフェアリング神父の教区で、ステンシルは自分が撃たれたと話す。さて、ステンシルはプロフェインをマルタへ連れてきたのは無駄だと考えている。そうでないとする、もしかしたら、ステンシルは本当に身の破滅を考えていたのかもしれない。

エピローグの「1919」で、船長が、ステンシルの死を予言的に「世界もわしらも、生まれた時から死に始める」という。実際、ステンシルは、自分の姿が消える譬えとして、顕微鏡で、ステンシル自身が、見えない大きさになって人間の脳に入り込む夢を何度も見たと語る。また、ステンシルは、何らかの魔法によって V. の中で溶けあつたと自覚するのである。当然、ステンシルは V. の中で溶け合った時、自らも掻き消えてしまう事になる。

さて、運転手は、小説の結末で、何か英語で叫んでいたが、その場に居合わせた誰にも分からなかった。しかも運転手は泣いていた。しかし何故運転手が泣いているのか、これは『V.』全体が包んでいる謎の一つでもある。

Astarte's throat naked to the cloudless weather, and slam it down again into a piece of the Mediterranean whose subsequent surface phenomena—whitecaps, kelp islands, any of a million flatnesses which should catch thereafter part of the brute sun's spectrum—showed nothing at all of what came to lie beneath, that quiet June day. (p. 492)

つまり、「下に沈んだ者の面影さえ残っていなかった」のである。この結末は、ガルシア・マルケスが描いた『百年の孤独』のラストシーンで、百年続いた一族が忽然として姿を消す場面と似ているのを思い浮べてしまう。

03. 寺山修司のトマス・ピンチョン作『V.』批評

寺山修司はトマス・ピンチョンの『V.』に出てくるワニ狩りに詩人固有の感覚で強烈な関心を示していた。寺山は『國文學 解釈と教材の研究』第27巻11号（學燈社、1982.8）所収の「聖鼠のエントロピー—トマス・ピンチョン」の中で、『V.』の冒頭に出てくるワニを引用しながらピンチョンの『V.』について批評を次のように書いている。

トマス・ピンチョンの『V.』の中に描かれるこのワニは、一体何の喩なのだろうか。（70頁）

寺山は「ワニ」の喩を「大資本の商業主義の犠牲」「ヴェトコン・ゲリラの幻影」「アングラと称される抵抗文化の活動家」「パワリー—界限の浮浪者」などを挙げる。だが、寺山は「ワニ」よりも「それを「狩り」に志願する人の方がもっとグロテスクなものとして扱えられる」と批評し、しかも、その男がプロフェインで「鉄砲をもってワニを退治にゆくボランティア」に応募して「孤立無援の戦いに挑むことになる」と説く。更に、寺山はプロフェインを次のように

性格描写する。

プロフェインは、太ってブヨブヨした感じのアメーバーのような男で、髪はでこぼこのトラ刈り、豚のような小さな眼は、間が離れすぎている。彼は道路工事夫なのだが、それに必要な道具の一つとして満足に扱えない、というダメ男である」(71頁)

寺山は、プロフェインをアンチヒーローとして論じ、いっぽう、ヒーローはメルヴィルの『白鯨』エイハブ船長であると主張する。

このダメ男プロフェインと下水道に追いつめられた老いぼれワニとの「死闘」は、そのまま、アメリカン・ヒーロー、エイハブ船長と、白鯨（モービー・ディック）との「死闘」を思わせる。(72頁)

寺山はピンチョンのエントロピーに関心があったので、「エイハブ船長と、白鯨（モービー・ディック）」の叙事詩が、後に、「ダメ男プロフェインと下水道に追いつめられた老いぼれワニ」に「エントロピー化」した」と解釈して以下のように批評した。

そして、ピンチョンが描いているのは、ニューヨーク文明という巨大な死によって、地下水道にまで押しやられてしまったエイハブと白鯨との対決のエントロピー化ということだ。かつてのヒーロー、片足のエイハブ船長は、現代ではヨーヨー人間プロフェインでしかありえない。まして、モービー・ディックはシラコワニである。(72頁)

更に、寺山はこのプロフェインとワニとの笑劇風死闘（ファルスの叙事詩）について、次のように論じている。

彼らの叙事詩（＝ダメ男プロフェインと下水道に追いつめられた老いぼれワニの死闘）は、たかだか地下水道の泥水のドタバタ喜劇でしかありえないだろう。（中略）死と死のあいだを行ったりきたりするヨーヨー人間プロフェインのおかしさの中に、私は自分を見出して思わず、背筋がつめたくなるのを覚える。(72-74頁)

更に、寺山はもう一人の主人公としてハーバート・ステンシルの性格について論を展開し続ける。寺山はステンシルとその名前の由来について次のように述べている。

ステンシルとは「謄写原紙とか文字抜き板」のことであり、そこに何か書きこまなければ、無であるにすぎない。無であるが、どのようにでも（書き手によって変わってゆく）という点に特色がある。(72頁)

ステンシルは、寺山が説明するように、何かを物を印刷するときに、謄写原紙と文字抜き板が両方向に拡がるわけである。そして、その瞬間に自然と形はV字型になる。いわば、ステンシルは、V字型に反りかえりながら、絶えずVを探し求める様子を示しているとも解釈出来るのである。これは言い換えれば、ステンシルは、自ら、V字型になりながら、絶えず、Vを探し求めるのであるけれども、他方で、ステンシルがどのようにでも（書き手によって変わってゆく）わけだから、そのような点からみていくと、自分というものが絶えず白紙であるのだから、自分というものが如何なる時も無いことになる。この特徴に、寺山は目を付け、ステンシルは、無から、絶え間なく、他我に変化することを見抜いたのである。

ハーバート・ステンシルは自分のことを「私」と言わず、「彼」と称する。彼もまたプロフェインとべつの角度から、V.という謎の女をさがしつづける。従来の小説作法に見られた人称の問題、すなわち私＝主体といった図式は、ピンチョンによって、やすやすと乗り越えられてしまい。そこには限りないエントロピー現象が氾濫する。「物語」は中断し組み替えられる。主人公は、たびたび入れ替わる。(72頁)

Herbert Stencil, like small children at a certain stage and Henry Adams in the *Education*, as well as assorted autocrats since time out of mind always referred to himself in the third person. (p. 62)

寺山は、ステンシルが無であり、しかも誰にでもなるところに、ピンチョンが書く小説『V.』の新機軸を読み取った。つまり、寺山は、ステンシルが誰でもないところに一種のコペルニクスの転換を見たのである。デュシャンが「死ぬのは他人ばかり」と言い、ラカンが「あなたが見ている私の姿は私には見えない」と言ったりしたが、ピンチョンはデュシャンの美術論やラカンの哲学にある一種の謎を小説として表わしたのである。従って、この観点からみていくと、ステンシルもワニも、プロフェインも、ネズミも主人公にはなりえないようだ。寺山はピンチョンのエントロピーを次のように解釈する。

すなわち、熱力学でいうエントロピーというのは、閉ざされたシステム内では、熱エネルギーは高きから低きへと移り、徐々に平均化する現象であり、情報理論では蒐集、整理された

情報秩序が、情報量の増大によって「洩れあふれて」、混沌とし、何も伝えなくなる現象なのだ。(73-74頁)

寺山は、デュシャンの美術論やラカンの心理学を解読していたが、ピンチョンの小説からもエントロピーの理論を読み取って自家薬籠中の物にしていったプロセスが読み取れる。⁵⁾ピンチョンは混沌を子宮回帰の中に求めていたようであるが、寺山はより一層明確に小説『V.』の中に子宮回帰を読み取っていたようである。殊に、寺山が謎の女性 V. について論じる時にはっきりとそのコンセプトが現れる。以下に、寺山の謎の女性 V. の性格描写を紹介しよう。

『V.』において、登場人物たちは不在の中心であるヒロイン V. を探しつづける。だが、V. は母であり、妻であり、情婦であり、そしてエントロピー現象の中で、複数化した人格である。

ステンシルは V. を母だと思いつづけているが、しかしヴェロニカの V、ヴィクトリアの V、義歯、ガラスの義眼、象牙のクシ、サファイアのヘソをもった人造女 V、聖鼠 V、ヴァージンの V、ヴィクトリー（勝利）の V、ヴァギナ（膣）の V と、V は限りなく混沌の原因となってゆくのである。(74頁)

寺山の『V.』解釈は次の論述からより一層明らかになってくる。

私＝個の内面の神話は、ピンチョンによって否定される。好むと好まざるとにかかわらず、それが現代なのだ。エントロピー的宇宙観、謎とき、失われたロマンとその中断、幻想とグロテスクに象徴される日常の現実の描写は、ピンチョンが今日最大のサイエンス・フィクション作家であることを物語っている。(74頁)

確かに、私というものがなくなれば、全てが無であり、寺山が指摘するように「たしかに「行手は、まっ暗闇」であり、そこに感傷的な未来図を描くことなど不可能である」かもしれない。更に、私というものがなくなれば、当然、私と他人の区分もなくなってしまう。寺山はピンチョンのエントロピーについて次のように指摘する。

ピンチョンは、エントロピーの増大と共に、「区分の消失」(de-differentiation)が始めると書いている。(72頁)

寺山修司は自作『壁抜け男—レミング』で壁の消失を描いているが、この「壁の消失」は、

ピンチョンのいう「区分の消失」の影響かもしれない。だが、はたして『壁抜け男—レミング』の崩壊感覚からブラックユーモアを読み取ることはできるのだろうか。だが、その反面で、見落としていた寺山の喜劇感覚をピンチョンのブラックユーモアから読み取ることはできるかもしれないのである。例えば、『V.』のなかで、鼠に宣教する神父フェアリングはニューヨークが死滅した後で、鼠が人間にとって代わると思い、「アメリカのために思って鼠をローマ・カトリックに改宗させようと思ったつ」とあるが、寺山はこの一節を引用した後で次のように言う。

神父とネズミがマルクス共産主義について議論（ネズミたちに広まったマルクス主義的傾向が、神父に人間社会の貧困などを思い出させて、ネズミの肉がまずくなってゆく過程）は、抱腹絶倒のおかしさだ。（73頁）

ともかく、ニューヨークの死滅という悲劇を読み進むと、現世を生きる個々人にとって一時的に苦痛を伴うかもしれないが、他方で、改宗しようとしたネズミの肉がまずくなってゆく過程を読んでいると、一種の笑劇の効用によって、現世の無意味さとか残酷さとかそういった現実世界の本性を笑いで吹き飛ばして暴き出してくれる。

読みつづけているうちに、おかしさがこみあげて泣きたくなる。やるせないブラックユーモアの詩人トマス・ピンチョンにとっては、物質は詩の寓意なのである。（74頁）

この寺山の批評は、ピンチョンの小説『V.』のなかに出てくる「死の舞踏」を思い出させる。少なくとも、寺山は『V.』のなかに、悲劇性ばかりでなく笑劇性も嗅ぎとったのだろうか。さて、寺山修司の処女作『血は立ったまま眠っている』を劇団四季によって初演されたのが1960年であるが、『血は立ったまま眠っている』にはトイレの中に何かいると描写している。殆ど同時代にピンチョンが小説『V.』のなかに寓意としてワニを表わし「死の舞踏」として読み取ったのかもしれない。

04. 寺山修司の『壁抜け男—レミング』

寺山修司がトマス・ピンチョン作『V.』を批評した「聖鼠のエントロピー—トマス・ピンチョン」を読むと眼から鱗が落ちるように『壁抜け男—レミング』の謎に満ちた世界が解けてしまうような錯覚に陥る。むろんのこと、ピンチョン作『V.』を読めば、否が応でも『壁抜け

男—レミング』との類似に気がつかざるを得ない。寺山がピンチョンの『V.』や『エントロピー』を読んでいたのが『壁抜け男—レミング』の初演と殆ど同じ時期なので当然ピンチョンの作風から影響があってもおかしくない。もちろん、寺山がピンチョンの作品を単に模倣したというだけではない。つまり、寺山もピンチョンも同時代人であり、同時代精神の息吹を受け感化されて創作活動をしてきたようだ。二人がシュルレアリスムやポスト・モダンなど現代の最新芸術思想を次々と吸収し自作に取り込んでいった事も容易に読みとれる。けれども、彼らは類似点があっても相違点があったことも事実である。寺山は詩人でありながら自らの劇団をもち演劇や映画を制作した。いっぽう、ピンチョンは理系の出身であり軍事体験もあり、大部な小説を次々と発表した。

恐らく、寺山は『壁抜け男—レミング』を上演したとき、ピンチョンには無いもの、即ち、劇の中に幾つもの劇を挿入したり、映画の撮影シーンを次々と持ち込んだりしたところに出色の出来栄えがみられた。或いはまた、寺山の劇には東北の暗い雰囲気や濃厚であると見られがちであった。ところが一方で、寺山の関係者から、稽古中、笑いが絶えなかったと言い伝えもある。その矛盾した批評は「聖鼠のエントロピー—トマス・ピンチョン」を読むと氷解する。しかも、寺山がピンチョン批評でブラックユーモアとして引用する箇所はそのままにも見られるのである。

寺山は『V.』を読みながらペイソスを感じると同時に大笑いせざるを得なくなると書いている。同様のブラックユーモアが『壁抜け男—レミング』にも見られるのである。

『壁抜け男—レミング』の中で主人公王の相手は母親である。他方『V.』の中でV.は正体をあからさまに見せないなので曖昧な女性のままである。V.は謎に満ち、影のような存在なので、ある意味では、『壁抜け男—レミング』の中の影山影子を思わせる。事実、影子はスクリーンの中だけで生きている。

さて、王が終幕で穴から出てくるところは、王の母親そっくりである。寺山の芝居には穴がしばしば出てくる。穴は異界を指しているが、『壁抜け男—レミング』の場合、穴やマンホールは『V.』に出てくる地下と同じ世界を象徴している。

マンホールの数は112個、そのうち正式に記載されていないものが4個あって、その1個が「地下世界に通じている」と信じている中学生が今日もマンホール巡りをしている。⁶⁾

さて、『V.』の世界は、ニューヨークであったりイタリアであったり、南米のヴェネズエラであったりする。他方、『壁抜け男—レミング』の世界は、地理的には、横軸は東京の五反田とそれに王の畳の下は田舎の青森が広がっている、そして、空間的には、縦軸は地球と宇宙を

表わしている。

観客が入ってくると、そこは広大な闇黒のドームである。遠くに不時着した惑星のような物体が青白く浮かびあがって見える。(99頁)

寺山が『V.』批評で指摘しているように、『V.』の世界では、ステンシルには私というものなくて全くの他人である。だから、ステンシルは私ではなく他の誰でもない。いっぽう、寺山は、私を失くした世界を壁がなくなって、私もなくなり、主人公の王は誰でもなくなっていく。

王、しばらく信じられないという表情で、二つの部屋の仕切を、壁の形でなぞっている。見えない壁があるつもりで、たしかめるように撫でているが、思いきってにぎりこぶしを突きだすと、何の抵抗もなく手はつき抜ける。(100頁)

寺山の劇では、大抵の場合、主人公は少しうすのろであることが多い。王の性格にも幾分そういう傾向がある。寺山は『V.』の中の二人の主人公プロフェインとステンシルは共にはぐれ者の性格があるとみている。特に、プロフェインがニューヨークの下水道でワニ狩りをすると、寺山は、王が畳の下の穴に母が住んでいる場所とし、しかも、ワニ狩りをモグラ叩きに変えている。そして、また、ステンシルは私が無いところから、私を失うが、寺山は、そのところを壁の消失で表わしたようだ。

王 壁がなくなっちゃったんですよ。(102頁)

ピンチョンはステンシルが絶えず私を失うところを詳しく描いているが、寺山は、王が私を失うところを、王の人格が分裂している状態として表わし、その例として、王の眼には、大家が4人に分裂してみえてしまうように変えて表した。

大家は4人になる。(103頁)

寺山は、王には、私がないから、当然、住民票もない筈である。しかも、寺山は、更に、極端にして、王はキャラクターとして精神分裂症患者でもあると規定している。

王 じゃ、ぼくはどこに住んでるって言うんです？ 実在していない場所に住んで、下宿代を払ってるって言うんですか？

大家2 下宿代？

王 毎月、きちんと振り込んでいますよ。

大家1 (大家2に) この男、一寸おかしくないか？

大家2 おかしい。一メートル四方もない狭い碁盤の上に、こんな大きな男が住んでいると主張すること自体、常識外れだ。(105頁)

寺山には独特な地理感があって、高層ビルの屋上から王の部屋を見たら、王の部屋は小さく見えると考えているようで、だから、高所からみたら豆粒ほどの小さな部屋に王が住めるだろうかという単純な疑問をこの会話で使い現わしている。次いで、畳の下に穴があるという設定になる。穴は『V.』ではニューヨークの下水道を表わしていた。しかし王の部屋の穴にはワニやネズミではなくて、王の母親が住んでいる。

四畳半の畳の方形の穴から、ヌーッと白髪の母親の首が出てキョロキョロと部屋の中を見まわす。(111頁)

四畳半の畳の方形の穴は、伸縮自在のようで、隙間は紙一重の幅から無限大の地下にも通じているようだ。『身毒丸』でも穴が出てくるが、穴はボール紙の厚さであるが、しかも、その穴は無限の地下に通じている。寺山は、この伸縮自在の穴を魔法の穴のように表わしている。

母親 あたしを畳の下にとじこめて、頭の上を十六文キックで歩きまわろうとする。(112頁)

さて、ニューヨークの下水道は網の目のように拡がっているようであるが、寺山は市街劇で実際に東京阿佐が谷にあるマンホールに入って下水道巡りの冒険をした。実は、その市街劇のドキュメンタリーを映像作家のかわなかのぶひろ氏が映像として撮っている。ところで、『壁抜け男—レミング』に出てくる五反田の畳の下の穴は、実はミクロの小宇宙を表わしているようにも思えてくる。

母親 母さん、大分カビがはえてきたよ。下宿の四畳半の畳の下に年老いた母親を一人飼って、朝から晩まで田を耕させ、こっちから言わなきゃ一週間でも放ったらかしておく。(113

頁)

先に述べたように、寺山は、『壁抜け男—レミング』に出てくる穴をモグラたたきゲームのような穴に譬えている。

いきなり、王、もぐら叩きで母親の脳天に一撃、叩きつける。(114頁)

寺山が、魔法の穴が、モグラたたきゲームの一種の茶番の穴に変わっても、時代や文化を共有している人達には理解できると考えているようだ。

ボルヘス「あらゆる言語は、伝達者と被伝達者とが同じ過去を共有していることを前提にして使用される、記号の集合体である」(116頁)

さて、寺山は、ボルヘスを自作の劇や映画にしばしば引用している。殊に、寺山が『壁抜け男—レミング』にボルヘスを引用しているのは、ピンチョンの『V.』の魔術的な世界を想定していたことの表れのようなのである。或いはまた、寺山は、初期の作品『白夜』の中で「何も起こらないことの恐怖」を描きその後も『青ひげ公の城』にも繰り返し描いてきた。もしかしたら、寺山がピンチョンのエントロピーに共感したのは、エントロピーによって、宇宙や世界が消滅してゆく様を、寺山自身の根源的な孤独感と殆ど同一視して見たからかもしれない。

舞台では何も起こらない。ただ、空室だけが灯りのなかにくっきり浮かびあがっている。(116頁)

ところで、ピンチョンは『V.』の中でV.を通してエロスとタナトスを見ているようである。寺山も『壁抜け男—レミング』の中で類似した表現をコラージュしている。

(2) の噂 マンホールの蓋を見るとムラムラッとなるらしいんですね。(116頁)

更に、寺山は、江戸川乱歩『屋根裏の散歩者』をコラージュしてピンチョンのエロスとタナトスとは異なる視点を作りだしているようだ。つまり、屋根裏の散歩者とその声は、人間の二重化によって、私性を取り去ろうとしているようなのである。

屋根裏の散歩者 こんばんわ。屋根裏の散歩者、郷田三郎です。

その声 わたしは、その声です。(120頁)

屋根裏の散歩者はその声に分離し、遂に「とてつもない屋根裏の散歩者が数百万」へと拡散し、私が無くなって無数の他人になっていく過程を描いているようだ。

屋根裏の散歩者 信じられない。

その声 兄妹だと言っているが。

屋根裏の散歩者 それは世間をごまかすための方便で、

その声 実は、夫婦か。

屋根裏の散歩者 駆け落ちしてきたバーテンと、その情婦。

その声 案外、誘拐された女の子と犯人かも知れん。(122頁)

さて、『V.』には、ワニと鼠が頻繁に登場するが、『壁抜け男—レミング』では、ワニはト書きにしかも極めて少なくしか現われず、また鼠も台詞として「一匹」としか登場しない。

仮面の似合う大佐と鰐が

応接間で私を待っている。(123頁)

ところで、『V.』では、ステンシルが謎の女性 V. を追跡するが、『壁抜け男—レミング』では、王が影山影子の夢の中で追い求め、夢の映画のシーンで殺害されることを強く望んでいるようだ。

監督 ヒロインはいつも物語をほしがっている。ところが、物語ってやつは、大抵、行き止まりなんだ。鏡のように見えるが、実は壁だ。そこにヒロインは自分の顔をうつす。うつっていない顔だ！ …だが、その美しい顔が、だんだんほんとうに見えはじめてくる。(124頁)

さて、『壁抜け男—レミング』に出てくる女優、影山影子は、いわば、鏡でなく、どちらかといえば、壁のようである。何故なら、彼女は壁というスクリーンに影として映る幻にすぎないからだ。

影子 あたしは、うっとりとまた映画の中へ戻ってゆく。(126頁)

寺山は、しばしばボルヘスを引用するが、『円環の廃墟』の結末で、私ではなく固有名詞もない「彼」は幻であり他人が彼を夢見ていると書いている。

With relief, with humiliation, with terror, he understood that he also was an illusion, that someone else was dreaming him.⁷⁾ Borges, Jorge Luis, The Circular Ruins Translated by Anthony Bonner (p. 63)

寺山は、「聖鼠のエントロピー—トマス・ピンチョン」論で、『V.』に出てくるステンシルが「私」ではなく「彼」だと批評している。ボルヘスは『円環の廃墟』の中で「彼」を「私」ではないと書いている。しかも、「彼」は、幻であり、他人の夢に出てくると述べている。他方、寺山は『壁抜け男—レミング』で、ボルヘスの『不死の人』を引用するが、ボルヘスの異界をコラージュしているらしいことは確かだ。⁸⁾

「内部からこちらが何か目のようなものに見つめられていることがわかった」(128頁)

前述にある「目のようなもの」とは、ボルヘスの『不死の人』の眼差しのようなものである。寺山は『壁抜け男—レミング』で、「目のようなもの」を女監視員の眼差しとして表わしている。

女監視員 1 マンホールから潜望鏡が出て来てあなたのうしろ姿を狙う。(128頁)

ボルヘスは『不死の人』の中で、不死の人が固有の「眼差し」を失うと、不死の人は全ての人間と同じ生の人間となってしまう、早晚死ぬと述べている。いっぽう、寺山は死ぬ時に「墓は建てて欲しくない。言葉があれば十分」⁹⁾と書き遺した。もしかしたら、寺山は、自分の言葉は不死の人になると考えていたのかもしれない。

五反田の他人同士、全員うしろ手をかくし、箱の中、壁のうしろ、ドアの影に逃げ込む。

女監視員 2 アリバイのない鰐を切り抜く。(129頁)

さて、前述にある「アリバイのない鰐」とは、「五反田の他人同士」のことでもあるらしい。また、「他人」とは「私」が無くなった時の存在であるので、やがて、生の人間として死ぬことを意味しているらしい。

見まわせば、もはや舞台は下宿屋の一室ではない。五反田精神病院入院病棟の中である。

(134頁)

『V.』は、小説特有の無限の時空間を展開し、パラノイアに悩まされているステンシルが、特定の時や場所を越えて思考し行動する。けれども『壁抜け男—レミング』では、時空間が極限の狭い舞台に限定される。そこで、舞台設定が虚構なのか事実なのか分からないところはあっても、王の四畳半の下宿が、ロケ現場になったり、精神病院の入院病棟になったりする。そこへ、穴の底で生活している王の母親が、穴の中から、首を出す。明らかに、母親は王と異なる次元の住民として登場する。ある意味では、死滅したニューヨークの人間に代わって、新たな支配者住民となる鼠を象徴しているらしい。

穴の中から、王の母親ヌーと首を出す。(134頁)

だが、王の母親は、息子が精神病患者になったことを心配する。母親は息子が解放治療を受けている事に不安になり、一種の呪文を唱える。

母親 とび出すネズミがたった一匹！(137頁)

この「とび出すネズミがたった一匹」は、ある意味では、母親を指している。母親は、ちょうど鼠のように、畳の穴の下から飛び出してくるからである。この鼠の穴からの脱走シーンが、夢の中の現象のように、一種の牢獄から囚人の脱走にシーンに変わる。

囚人1、片足で立とうとして描いた出口のドアの把手につかまる。力が入って、その把手を引くと描いた筈のドアがほんとに開く。(141頁)

牢獄の壁に扉を描いてそこから脱走しようとするのは、一種のだまし絵で、エッシャーやダリやマルグリッドのシュルレアリスティックな絵画を連想させてくれる。

影子 「行き過ぎよ、影！ 古い都に、雨は降る…」(142頁)

だまし絵は、一種の迷路に繋がっており、壁は、下宿の壁から病院や牢獄の壁を経て、壁に映写機からフィルムのない光だけが投影される。何故か、王が支那服を着せられ、往年の映画スターという設定の影子と対面している。影子は「人生は映画」(145頁)という。隣の部屋

の兄が王に向かって影子を指さし映画ごっこを取り入れた「遊戯療法」を施しているのだと言って、「この人は自分が往年の大スターだという妄想にとりつかれちゃって」という。影子は『サンセット大通り』の元女優のノーマ・デズモンドや、『欲望という名の電車』の精神病患者のランチを思い出させる。やがて、影子が王を銃で殺害する。

影子 ほうら、事実が死んだ (148頁)

影子が、事実としての王が死んだという。さて『V.』では、以下のように述べている箇所がある。

“The world is all that the case is,” (p. 278)

そして、ヴィトゲンシュタインは『論理哲学論考』の中で次のように述べている。

世界は、成立している事柄の全体である。

世界は事実の寄せ集めであって、物の寄せ集めではない。¹⁰⁾

いずれにせよ、王は、本当に殺されたわけじゃないのであり、ただの映画であり、しかも、影子は狂人であり、狂った彼女を救うための、治療法として前提されている。従って、王は、影子の夢の中にいる。次の場面では王は自分の部屋で倒れている。畳の下から母が出て来て心配になりワッと驚かす。すると王はハッと目をさまして、「死人に話しかけないでくれ」と言って悲劇的な場面を忽ち笑劇的な場面に変えてしまう。

ぼくはね、母さん。いま映画の中にいるんだ。他人の夢の中で撃たれて、うっとりと死んでいるのだ。(150頁)

王の台詞は、直ぐ前の場面でエキストラたちがコーラスで歌う「地球を今すぐとめてくれ。私はゆっくり映画を観たい」のエピグラムであることが分かる。

王 それが母さん。とってもきれいな人なんだよ。母さんと同じ年だって言うけど、とてもそうは見えないんだ。(150-1頁)

この王の台詞も『サンセット大通り』の元女優のノーマ・デズモンドや、『欲望という名の電車』の精神病患者のブランチの魔性の女の色香をエピグラムとして言い換えたようにも思われる。王の母親は王が寝言で素性も分からぬ女性に気持ちを奪われ魂を引き抜かれているのを知り、部屋の畳を鉤で引き剥がし始める。王の母親は、寺山がV.が母親であると述べている箇所を思い出させる場面である。但し、王は影山影子が母親に似ていると言っている。

王は影山影子の夢の映画の世界にいる。王をステンシルと同等のキャラクターに解釈すれば、この場面で、『V.』の小説は終わっている事になる。ところが、寺山は、一步踏み込んで影子の夢から息子の王をひきずり出し、穴の底に突き落とす。

母親 落ちて行け！（152頁）

ここで、王と母親の役割が逆転する。しかし、王は母親でもある事をこの場面は表わしている。ピンチョンもV.とステンシルが同一人物で両性具有を表わしている箇所として暗示的に描いている。前に述べたように、寺山は、『V.』の中で、V.は母親であると解釈している。そのところに寺山の新機軸が見られる。つまり、ステンシルはV.を追いかけるが、V.を追いかけているのが父のステンシルか息子のステンシルか分からない。しかし、寺山は、影子が母親と同年輩だと規定し、しかも王の母親が同時に存在するのである。

しかし、この場面のところで、『壁抜け男—レミング』は、急展開する。フロイトの夢からの覚醒では、現実に戻るのであるが、寺山のキャラクターたちは夢から他人の夢に目覚める。ピンチョンの『V.』でも、ステンシルは私というものがないので、他人の中で増殖し、しかも、その他人の夢の中で次々と夢を見つづける。ところが、『壁抜け男—レミング』の終幕では、母親と王が入れ替わった後で、消失した壁が再び現れる。

壁がゆっくりと夢を区切る。（153頁）

母親は、息子の王と役割交換した結果、夢も役割交換してしまうようだ。この場面展開は、寺山が『田園に死す』などでもよく使う夢の中断である。

母親 これは、あたしの夢じゃない。（153頁）

母親は、息子の王と役割交換した途端に、母親の夢に他人の夢が入り込む。しかも、この他人は無数の他人でもある。

母親 他人さまだ！（153頁）

フランスの作家マルセル・エイメの小説をもとに、1997年パリで幕をあげたミュージカル『壁抜け男』では、男は壁に挟まって外へ出て来られなくなってしまう。また、レミングは異常に繁殖して膨大な数に膨れ上がると、レミングの無数の群れは一斉に列を成して海に向かって泳ぎだし、遂には、全て溺れ死ぬ。寺山の『壁抜け男—レミング』では、無数の壁抜け男たちは人間の姿をしたままでレミングに変わって、やがて、消滅する。他方、『V.』では、ニューヨークで人類が減びると、代わって鼠が支配者になる。これに対して、寺山は、『壁抜け男—レミング』で人間ばかりでなく鼠の消滅をも寓意的にレミングとして描いたのかもしれない。

なぜかゆっくりと倒れている人達が立ちあがる。そして同じ方向にむかってゆっくりと歩きはじめるのだ。（155頁）

エントロピーを念頭にして人類の消滅を考えると、人間が私を失い、結局、個が消滅して他人ばかりになったとき、人類は死滅する。

おれはあんたの事実。 おれはあんた自身だ。百万人のあんた全部だった。（155頁）

ピンチョンが死の舞踏と述べたように、寺山は、私を失った他人たちが死の舞踏であるワルツを踊って消えていく姿を、王の夢を通して描いたのである。

はるか地平で、やがて蒸気となって消えてゆく他人たちが、手を取りあってワルツを踊っている。王、まるで突き刺さった一本の杭のように立ちつくし、ゆっくりと暗黒を待ちうける。（155頁）

夢は私を失って他人の見る夢の状態を指している。その夢のゆく着く先は世界の果てであり、暗黒であろう。『壁抜け男—レミング』のラストシーンは『V.』のラストシーンとの類似性を思い浮べさせてくれる。ただ違うところは、王は母親でもあるのだから、V.とステンシルの消滅とは幾分異なっている。もっとも、寺山の『V.』解釈では、V.は母親でもあるのだから『壁抜け男—レミング』のラストシーンは『V.』のラストシーンがなくては片手落ちのように思われるのである。

寺山修司の『壁抜け男—レミング』には大まかにいって二種類の台本がある。1979年5月

25日～28日東京国際貿易センター新館で上演した天井桟敷第28回公演台本『レミング―世界の涯てまで連れてって―』と、1982年12月9日～15日紀伊國屋ホールで上演した天井桟敷第30回公演台本『「レミング」82年改訂版壁抜け男』である。他に、『レミング』2000年公演の台本がある。なお、『壁抜け男―レミング』の講演記録は「特集レミング天井桟敷新聞」（『寺山修司記念館』2、テラヤマ・ワールド、2000）に掲載されている。¹¹⁾

05. 詩集『田園に死す』の映像化と小説『LA ヴァイス』の映像化問題を巡って

ピンチョンの小説『LA ヴァイス』の映像化の企画が進められているという。さて、寺山修司が詩集『田園に死す』を映像化したのは、言葉で母殺しを書いたが、現実の母は生きているという矛盾を、映像を使ってヴァーチャルな世界に再構成したかったからだと思われる。そこで、寺山は母殺しをヴァーチャルな世界としてスクリーンで表わしたのであろう。他方、ピンチョンの小説は映画的小説であるが、ピンチョン自身は映像作家ではない。恐らく、ピンチョンの映画的小説を映像化してみようとする可能性は多くの映像作家たちの間であった筈である。寺山の映画にしても、山本達夫氏がカメラマンとして寺山のアイディアを集約したうえで映像化した。恐らく、ピンチョンも映画監督やカメラマンに独自のアイディアを出して映像化するのではないかとと思われる。

06. まとめ

トマス・ピンチョンの作品を読むと、アメリカの政治問題にコミットし政府の対応の仕方が鮮明にあぶりだされてくる。

高取英氏によると、寺山も日本の政治にコミットしていると主張しているという。確かに、寺山は「森恒夫論」や「岡本公三論」を書いている。¹²⁾だが、寺山は芸術創造活動を重視したようで、あまり政治活動に深入りしなかった。トマス・ピンチョンの小説『ヴァインランド』の政治性と比べると、寺山は創作活動にあまり詳しく政治問題を描かなかった傾向があったことが明らかである。しかしながら、トマス・ピンチョンは多くの民衆を描きながら必ずしも全ての民衆の生活を網羅して描いていないことを認めざるを得ない。トルーマン・カポーティはトマス・ピンチョンの小説を批判した文化人の一人であるが、カポーティは、ドキュメンタリー小説『冷血』を書き、モデルとなった死刑囚の刑執行に立ち会った。また、カポーティはブルーストの『失われた時を求めて』のアメリカ版をライフワークとしながら果たせなかった。軽々に比較することは慎まなければならないが、ある意味で、カポーティのトマス・ピン

チョン批判には傾聴すべき論点があった。或いは、トマス・ピンチョンの戦争経験は、ウィリアム・フォークナーが戦争体験を小説に表したのと比せられる。だが、戦争体験といえば、ネルソン・オルグレンの小説『朝はもう来ない』や『黄金の腕』には、戦争で受けた怪我の治療でモルヒネが原因で社会の更生に失敗する人のペシニズムが濃厚に描かれている。従って、カポーティやオルグレンの観点から、トマス・ピンチョンの政治問題を見ていくと、ピンチョンの斬新なアメリカの政治構造の分析は目を見張るものがあるけれども、やはり、政治的なリアリティーよりも寓意性の方が勝っているように思われるのである。

確かに、ピンチョンの小説は、スイフトの『ガリバー旅行記』は3D映画『アバター』宮崎駿のアニメ『天空の城ラピュタ』と比べると古色蒼然とした神話の時代を思わせる。だが、その寓意性においては『アバター』や『天空の城ラピュタ』と比較できないほどの奥行きを感じさせてくれる。

それゆえ、ある意味で、トマス・ピンチョンの『ヴァインランド』はリアルなアメリカよりも神話的な宇宙を思わせる。例えば、ジョイスの『ユリシーズ』はダブリンの一日を扱った作品であるが、壮大な古代ヨーロッパの神話の世界がゆるぎない寓意性を表わしているのと似ている。

寺山修司がピンチョンの「エントロピー」や小説の翻訳を試みようとしたエピソードなどは如何にも唐突な感じが禁じえないが、寺山の死後30年を経るに従って、驚くべき発想の類似性を見出すのである。なかでも、メディア映像論は、『グーテンベルグの銀河系宇宙』が発表されて以来、トマス・ピンチョンや寺山修司や多くの芸術家が感化され彼らの創作活動に実践した。トマス・ピンチョンは小説を映画制作のように書いた。映画の観点からピンチョンを見ると、カメラマン、プロデューサー、俳優、時代考察など数々の映画制作協力者を総動員したかのように、ピンチョンは、小説を書いた。けれども、トマス・ピンチョンが描写するカメラの時代考証はデジタル映画からみれば既に時代遅れになってしまった。だが、興味深いのは、ピンチョンの小説がそのまま映画制作の歴史にもなっていることである。ピンチョンが描いた小説は、専ら、映画関係者が現場で行った作業を、記録する側面が濃密に描かれており、ピンチョンが難解なのは、ほとんど誰も踏み入れたことのない映画制作のプロセスを描いているからである。しかも、ピンチョンは、複数の協力者が制作する映画を独りで束ね、しかもドキュメンタリーだけでなく、寓意性の高い小説にしている。寺山修司や高取英氏は、カメラマン、プロデューサー、俳優、時代考察など数々の映画制作協力者を総動員して映画やドラマを制作している。例えば、寺山は歌集『田園に死す』で、文字で母を殺し現実では母は生きているという矛盾に直面した。そこで寺山は、虚構の世界を構築し現実との乖離を埋めるために映画『田園に死す』を撮った。これに対して、ピンチョンのばあいは、映画をあくまでも小

説で書いたと言ってもいいのではないだろうか。しばしばいわれることであるが、小説は、ドラマや映画の最も詳細な台本でありシナリオであると。だから、しばしば体験することであるが、オリジナルの小説に勝った文芸ドラマや映画は少ない。

さて、安藤紘平氏は、寺山の映画に影響された映像作家であるが、安藤氏の実験映画を見て、更に、安藤氏のメディア映像論を研究していると、ある意味で、ピンチョンの難解な小説の世界がメディア映像を通して見えて来てその地平の一端を垣間見る事が出来る。安藤氏は、アナログとデジタルの世界を跨いで体験して映画を制作してきたので、殊に、ピンチョンが描く数々のカメラ描写は、安藤氏がアナログのカメラで撮った『オー・マイ・マザー』や『アインシュタインは黄昏の向こうからやってくる』の映像と比べるとピンチョンが描くカメラの描写を臨場感を持って彷彿と思ひ描くことができる。むしろ、安藤氏は映像作家であり、ピンチョンは小説家である。従ってその違いは歴然としているが、メディア映像論から見ると、安藤氏が撮った『オー・マイ・マザー』や『アインシュタインは黄昏の向こうからやってくる』の映像は、ピンチョンが描くアイディアと重なって見える。例えば、ピンチョンが小説で描く「幽霊」は、数学の難問題はともかくとして、安藤氏が制作した実験映画の動画に「幻」となって現われるのである。

安藤氏はアナログで生み出した「幻」の映像は近年クリストファー・ノーランが映画『インセプション』をデジタルで制作したとき、産み出したと述べている。ノーランの映画『インセプション』はエッシャーのだまし絵や鏡を使った虚像現象を映像で表わしている。特に、ノーランが映画『インセプション』で鏡を多用しているのは、映画そのものが鏡であり虚像であり幻であることを映像表現で明らかにしているところである。

野島直子氏は『ラカンで読む寺山修司の世界』でラカンの虚像論を鮮明に明確に現わしたが、寺山はラカンやダリやブニュエルの虚像、だまし絵に強い関心を懐いていた。まさに、寺山がピンチョンの小説『V.』に強い共感を示したのは、エントロピー論もさることながら鏡の虚像描写から始まり、V.を搜索しているうちに迷路に落ち込んでしまうところにひかれたからではないだろうか。固有名詞であっても不明なのに、イニシャルのV.しか分からない謎の存在の搜索は、ある意味では自分探しであるのかもしれない。『V.』とよく比較されるのであるが、フロベールの『マダム・ボバリー』である。『マダム・ボバリー』は、オリジナルは、フロベールがエジプトで現地人が「ボバリー」という呼び名が耳に残り、遂に『マダム・ボバリー』の誕生につながったと言われる。また、フロベールが「マダム・ボバリーは私だ」と告白した言葉も暗示的である。ピンチョンが、小説の中で、男性の中に女性的なものを見いだすと述べているが、ある意味で、フロベールの自分探しはピンチョンの小説『V.』の中のV.の搜索という迷路を示唆しているようにも思われる。しかし、明晰な美文で知られるフランス文

学の代表作品『マダム・ボバリー』は、難解なピンチョンの小説『V.』の対極にあることも事実である。それはともかくとして、寺山の「自分探し」も有名であり、殊に、「職業は寺山修司」は、ピンチョンの世界を考えるうえで示唆に富んでいる。なかでも、寺山が、ピンチョンの初期の作品『V.』を読んで、ある意味で、その後ピンチョンの30年近くの創作活動を前以って言い当てたのは、単なる偶然の一致とはいえない深い要因があるように思われるのである。

例えば、寺山は、ダリとブニュエルの映画『アンダルシアの犬』から影響を受けた。一人の人間が二人に分裂して共存するというコンセプトは寺山にもピンチョンにもしばしばあらわれる。或いは、寺山が没後30年になり、殆ど忘れ去られている現在、寺山から無意識に影響を受けた安藤氏が、改めて寺山の映像作品を探求してメディア映像論を展開し、また、安藤氏の教え子らが寺山や安藤氏の映像論に影響を受けた映像作家が映画やテレビで新しい映像を創作している。これらのバックボーンに基づいてピンチョンの小説を解読すると鮮明に見えてくるものがある。かつて、筆者は安藤氏から「あなたは、カメラで映像作品を作ったことがありますか」と尋ねられたことがある。これは、そのままピンチョンの小説を読むときに紙媒体の向こう側から声なき声で問われている質問であるようにも思える。また、ピンチョンは、小説に一見アットランダムに数学の公式を提示する。これらの公式は、ちょうど、デジタル映画の画像制作で、数学や微分解析機が必要であるのと同じであるようにみえる。

注

- 1) 参考『早稲田と映画 寺山修司の全て』（早稲田大学創立120年、現代GPマスターズ・オブ・シネマ特別講座、早稲田大学小講堂、2007年11月16日-17日）
- 2) 寺山修司「聖鼠のエントロピー—トマス・ピンチョン」『國文學 解釈と教材の研究』學燈社、第27巻11号、1982.8）、70-74頁。同書からの引用は以下頁数のみを記す。
- 3) 志村正雄「あとがき」（『競売ナンバー49の叫び』志村正雄訳、（サンリオ文庫、1985）291頁。
- 4) Pynchon, Thomas, *V.* (Picador, 1981), p. 36. 同書からの引用は以下頁数のみを記す。
- 5) 参考：Tanner, Tony, *City of Words American Fiction 1950-1970* (Harper & Row, 1971). ウィーナー、ノーバート『人間機械論—人間の人間的な利用』鎮目恭夫、池原正彦訳（みすず書房、1979）
- 6) 『寺山修司の戯曲』5（思潮社、1986）、98頁。同書からの引用は以下頁数のみを記す。
- 7) Borges, Jorge Luis, *The Circular Ruins* Translated by Anthony Bonner p. 63.
- 8) ボルヘス『不死の人』（『エル・アレフ』木村栄一訳、平凡社ライブラリー、2005）、28頁参照。
- 9) 寺山修司『墓場まで何マイル?』（角川春樹事務所、2000）、61頁。
- 10) ヴィトゲンシュタイン、L.『論理哲学論考』藤本隆志、坂井秀寿訳（法政大学出版局、1968）、61頁。
- 11) 参照「特集レミング天井数新聞」（『寺山修司記念館』2、テラヤマ・ワールド、2000）、3頁。
『レミング』公演記録—『レミング—世界の涯てまで連れてって—』
『レミング—世界の涯てまで連れてって—』、晴海東京国際貿易センター新館2階演劇実験室天井数第28回公演、1979年5月25日～28日

『レミングー'82年改定版●壁抜け男一』、紀伊國屋ホール演劇実験室天井桟敷第30回公演、1982年12月9日～15日

『レミングー壁抜け男一』、スペース・ゼロ演劇実験室万有引力第18回公演、1992年8月14日～23日

『レミングー世界の涯てまで連れてって一』、グリーンホール相模大野、主催：財団法人相模市民文化財団2000年10月6日

『レミングー世界の涯てまで連れてって一』、ルネこだいら、主催：財団法人小平市民文化振興財団2000年10月11日

『レミングー世界の涯てまで連れてって一』、かめありリリオホール、主催：財団法人葛飾区文化振興財団2000年10月13日

『レミングー世界の涯てまで連れてって一』、シアター・ドラマシティ（大阪梅田）主催：関西テレビ放送／シアター・ドラマシティ／キョードー大阪梅田、2000年10月18日

『レミングー世界の涯てまで連れてって一』、サンシャイン劇場主催：ニッポン放送、2000年10月20日

『レミングー世界の涯てまで連れてって一』、川西フレンドリープラザ、主催：川西フレンドリープラザ、2000年10月26日

『レミングー世界の涯てまで連れてって一』、りゅーとびあ（新潟市民芸術文化会館）、主催：財団法人新潟市民芸術文化振興財団2000年10月23日

『レミングー世界の涯てまで連れてって一』、愛知県厚生年金会館、主催：名古屋テレビ放送／キョードー東海、2000年10月30日

『レミングー世界の涯てまで連れてって一』、滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール、主催：財団法人びわ湖ホール2000年10月31日

『レミングー世界の涯てまで連れてって一』、イズミティ21、主催：仙台放送／財団法人仙台市民文化事業団2000年11月2日

『レミングー壁抜け男一』、天野天街共同脚本、パルコ劇場（東京：渋谷）大阪ほか2013年5月予定

12) 寺山修司「森恒夫論」、「岡本公三論」（『歴史の上のサーカス』文集文庫、1976）、205-219頁。233-247頁参照。

参考文献

Pynchon, Thomas, *Slow Learner* (Little, Brown and Company, 1998)

Pynchon, Thomas, *V.* (Picador, 1981)

Pynchon, Thomas, *The Crying of Lot 49* (Picador, 1966)

Pynchon, Thomas, *Vineland* (Secker & Warburg, 1988)

Pynchon, Thomas, *Gravity's Rainbow* (Vintage Books, 2000)

Pynchon, Thomas, *Mason & Dixon* (Jonathan Cape, 1997)

Ridgely, Steven C., *Japanese Counterculture* (Minnesota U.P., 2010)

Tanner, Tony, *City of Words American Fiction 1950-1970* (Harper & Row, 1971)

Mcluhan, Marshall, *The Gutenberg Galaxy* (Tronto U.P., 1962)

Borges, Jorge, Luis, *Ficciones* (Grove Press, 1962)

Marquez, Gabriel, Garcias, *One Hundred of Solitude* Translated by Gregoy Rabassa (Perennial Classics, 1998)

- Swift Jonathan, *Gulliver's Travels* (Penguin Books, 2003)
- Lacan, Jacques, *Ecrits I* (Edition du Seuil, 1966)
- Stoltzfus, Ben, *Lacan & Literature* (Stage University of New York Press, 1996)
- Foucault, Michel, *Histoire de la folie a l'age classique* (Gallimard, 1972)
- Leary, Timothy, *Flashbacks An Autobiography A Personal and Cultural History of an Era* (A Jeremy P. Tarcher/Putnam Book, 1990)
- Derrida, Jacques, *Writing and Difference* Translated by Alan Bass (Routledge Classics, 1978)
- Cage, John, *Silence* (Wesleyan U.P., 1973)
- Cage, John, *Empty Words* (Wesleyan U.P., 1979)
- Escher, M.C., *Escher on Escher* (Harry B. Abrams, Inc., Publishers, 1989)
- 『文学とアメリカ』Ⅰ (南雲堂、1980)
- 「特集ピンチョン」(『ユリイカ』、青土社、1989.2)
- 「特集トマス・ピンチョン SF 的想像力」(『海』1978.6)
- トマス・ピンチョン、『秘密のインテグレーション』志村正雄訳(『海』1980.5)
- トマス・ピンチョン、「ラッドライトをやってもいいのか？」宮本陽一郎訳(『夜想』25、1989.4)
- 佐藤義明「トマス・ピンチョン V. 世紀を吹き抜けるエントロピーの嵐」(『国文学』1988.3)
- 波戸岡景太『ピンチョンの動物園』(水声社、2011)
- 木原善彦『ピンチョンの『逆光』を読む』(世界思想社、2011)
- 『身体を読む 寺山修司対談集』(国文社、1983)
- 『寺山修司の戯曲』5 (思潮社、1986)
- 『寺山修司戯曲集3—幻想劇篇』(劇書房、1995)
- 『寺山修司著作集3』(クインテッセンス出版株式会社、2009)
- 寺山修司『さらば箱舟』(新書館、1984)
- 『レミング—世界の涯てまで連れてって—』(1979年5月25日～28日東京国際貿易センター新館上演天井桟敷第28回公演台本)
- 『「レミング」82年改訂版壁抜け男』(1982年12月9日～15日紀伊國屋ホール上演天井桟敷第30回公演台本)
- 「特集 寺山修司の言語宇宙」(『国文学』1994.2)
- 寺山修司『私という謎』(講談社文芸文庫、2002)
- 野島直子『ラカンで読む寺山修司の世界』(株式会社トランスビュー、2007)
- アダムス、ヘンリー・ブルックス、『ヘンリー・アダムズの教育』刈田元司訳(教育書林 1955年、新版〈アメリカの文学13〉八潮出版社、1971年)
- ウィーナー、ノーバート『人間機械論—人間の人間的な利用』鎮目恭夫、池原正弼訳(みすず書房、1994)
- リアリー、ティモシー『神経政治学』山形浩生訳(株式会社リプロホート、1989)
- リオタール、ジャン＝フランソワ『ポスト・モダンの条件』小林康夫訳(水声社、1994)
- 池澤夏樹『世界文学を読みほどく スタンダールからピンチョンまで』(新潮選書、2005)
- 『レミング—壁抜け男』DVD 寺山修司・J・A・シーザー (共同演出)、新高けい子 (出演)、天井桟敷1983年公演『レミング』の収録映像(テラヤマワールド、2005)
- 『壁抜け男～恋するモンマルトル』VHS 劇団四季 (2000年福岡シティ劇場で収録)(四季株式会社、2000)

R による Global Warming 予測

小 村 賢 二

要約;NASA GISS(Global Warming)データについて時系列解析によって短期予測値を求めた。NASA のdata.giss の GISS Surface Temperature では大気気温の変化や5ヶ年移動平均が公表されていて、時系列解析としての予測値が与えられていなかった。時系列データは非定常時系列であるから非定常時系列モデル ARIMA モデルによって分析する。分析結果は偏差(Deviation)の傾向は増大してゆく。1980 年以降偏差のグラフの上昇は急激である。用いたソフトは Global Standard であり、多くの人達に支持されている R-2.15.1 と RStudio である。ここでは長期予測についてデータがないので分析しない。

キーワード; Global Warming, R-2.15.1, ARIMA, auto.arima , state space, 予測値、AIC, BIC

序 Global Warming データのプロットについて

R の時系列のプロットのスク립ト, auto.arima と予測値の要約統計量である。

```
plot(gtemp, type=" o" , main= " Global Temperature Deviation")
```

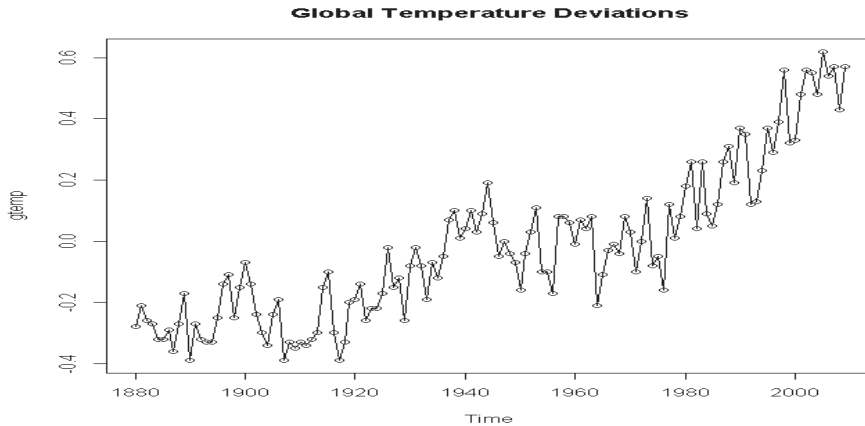
```
fit <- auto.arima(gtemp2)
```

```
plot(forecast(fit , h=12))
```

```
summary(forecast(fit, h=12))
```

```
ts.plot(gtemp2, type=" o" , main="Global Temperature Deviation")
```

以下は Global Temperature Deviation の時系列プロットのグラフである。



§-1 Global Warming データの予測

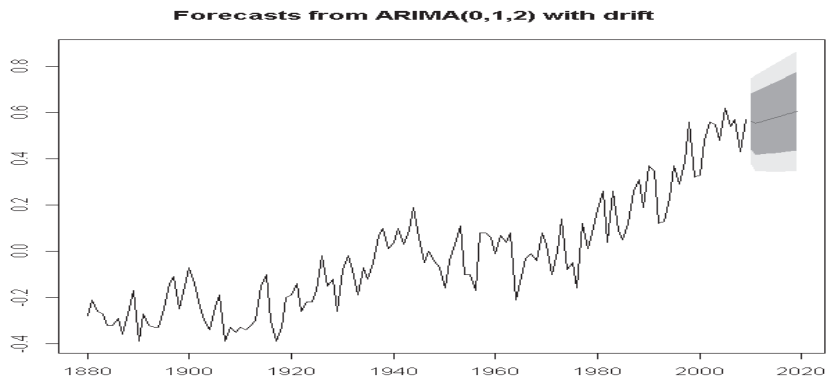
時系列モデルについて R-2.15.1 を使い auto.arima による ARIMA(0, 1, 2) と ARIMA(12, 1, 0) モデルを用いて予測値を比較する。Auto.arima は Forecast method: ARIMA(0, 1, 2) with drift を選択した。即ち

集積移動平均モデルである。

$$\nabla Z_t = c + a_t + \theta_1 a_{t-1} + \theta_2 a_{t-2}$$

ここで a_t はホワイトノイズである。 $\nabla = (1-B)$ 。

以下は ARIMA(0, 1, 2) モデルの予測値プロットである。



ARIMA(0, 1, 2) は集積移動平均過程の時系列モデルである。

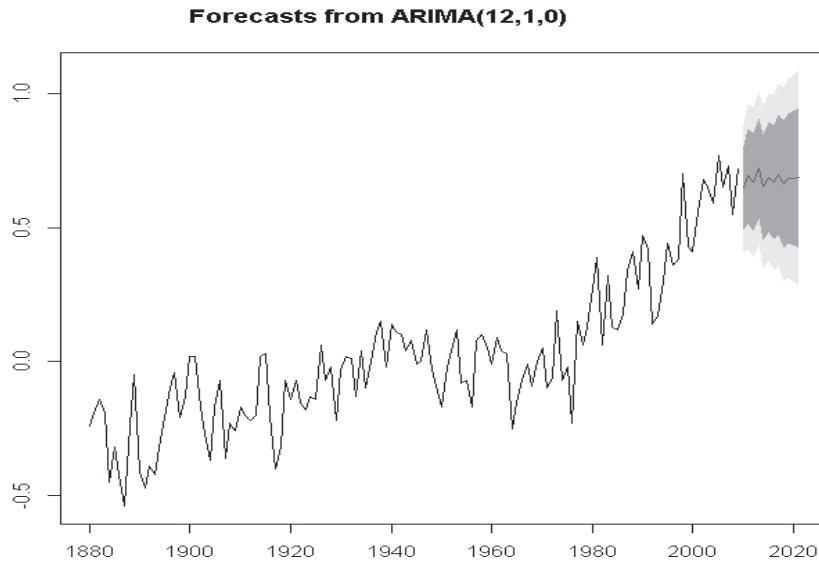
R による Global Warming 予測

```
summary(forecast(fit, h=12))
Forecast method: ARIMA(0, 1, 2) with drift
Model Information:
Series: gtemp2
ARIMA(0, 1, 2) with drift
Coefficients: #モデルの係数の推定値
              ma1      ma2      drift
              -0.5134  -0.1916  0.0064
s.e.          0.0830    0.0780  0.0025
sigma^2 estimated as 0.00911:  log likelihood=119.71
AIC=-231.41  AICc=-231.09  BIC=-219.97  # 予測の適合度
In-sample error measures: # 予測の精度の基準
ME      RMSE      MAE      MPE  MAPE  MASE
-0.00031 0.0950    0.0782   NaN  Inf   0.87858

Forecasts: # 予測値と予測信頼区間 (80% と 95%)
      Point Forecast    Lo 80    Hi 80    Lo 95    Hi 95
2010      0.5622097 0.4398892 0.6845301 0.3751366 0.7492827
2011      0.5541441 0.4181083 0.6901800 0.3460953 0.7621930
2012      0.5605656 0.4198237 0.7013076 0.3453194 0.7758119
2013      0.5669871 0.4216914 0.7122829 0.3447765 0.7891978
2014      0.5734086 0.4236976 0.7231197 0.3444454 0.8023719
2015      0.5798301 0.4258303 0.7338300 0.3443077 0.8153525
2016      0.5862516 0.4280793 0.7444240 0.3443479 0.8281554
2017      0.5926731 0.4304355 0.7549107 0.3445521 0.8407941
2018      0.5990946 0.4328912 0.7652981 0.3449084 0.8532809
2019      0.6055161 0.4354393 0.7755930 0.3454060 0.865626
```

ここで偏差の値は 1951 年-1980 年がベースである。

次はモデル ARIMA(12,1,0)による予測値のプロットである。グラフでカラーの部分は予測信頼区間である。



以下はRの結果とスクリプトである。

```
plot(gtemp2, type = "o", main = "Global Temperature Deviations")
fit <- arima(gtemp2, c(12,1,0))
plot(forecast(fit, h=12))
summary(forecast(fit, h=12)) #モデルの要約
```

Forecast method: ARIMA(12, 1, 0)

Model Information:

Series: gtemp2

ARIMA(12, 1, 0)

Coefficients: # AR(自己回帰)部分の係数の推定値

ar1	ar2	ar3	ar4	ar5	ar6	ar7	ar8
-0.4758	-0.4354	-0.4036	-0.1334	-0.1943	-0.0393	0.0277	0.0936
s.e. 0.0883	0.0979	0.1050	0.1124	0.1128	0.1144	0.1148	0.1151
ar9	ar10	ar11	ar12				
-0.0217	0.0832	0.0877	-0.0101				
s.e. 0.1156	0.1097	0.1029	0.0961				

sigma² estimated as 0.01497: log likelihood=87.46

AIC= -150.92 AICc =-147.75 BIC= -113.74 #モデルの適合度 AIC と BIC

In-sample error measures: # 予測値の精度基準

ME	RMSE	MAE	MPE	MAPE	MASE
0.0168	0.12189	0.0975	NaN	Inf	0.8302498

Forecasts: # 予測値 と予測信頼区間 (80% と 95%)

	Point Forecast	Lo 80	Hi 80	Lo 95	Hi 95
2010	0.6471580	0.4903395	0.8039764	0.4073249	0.8869911
2011	0.6923925	0.5153372	0.8694479	0.4216097	0.9631753
2012	0.6705121	0.4866859	0.8543383	0.3893741	0.9516500
2013	0.7211362	0.5341523	0.9081201	0.4351690	1.0071034
2014	0.6503260	0.4523918	0.8482602	0.3476118	0.9530403
2015	0.6873638	0.4832984	0.8914292	0.3752727	0.9994549
2016	0.6696670	0.4562760	0.8830581	0.3433136	0.9960205
2017	0.6983764	0.4749356	0.9218172	0.3566531	1.0400996
2018	0.6619454	0.4253478	0.8985430	0.3001006	1.0237902
2019	0.6835002	0.4414983	0.9255020	0.3133902	1.0536101
2020	0.6845068	0.4330446	0.9359690	0.2999285	1.0690851
2021	0.6864137	0.4247412	0.9480861	0.2862202	1.0866072

結論;

短期時系列予測による分析結果はモデル ARIMA(12, 1, 0)に従えば偏差は 0.65~0.69 の区間を変動し、0.72 に迫るものである。Auto.arima によって選択されたモデル ARIMA(0, 1, 2)の予測は上昇傾向である。

ここで R-2.15.1 で 時系列解析を行うためには、packages tseries, TSA, forecast, asts と Rcmdr-Plugin.Epack 等のインストールが必要である。

参考文献

- (1) Robert H. Shumway & David S. Stoffer, (2011), *Time Series Analysis and Its Applications*, Third Edition, Springer.
- (2) Rob J. Hyndman, Anne B. Koehler, J. Keith Ord, Ralph D. Snyder, (2008), *Forecasting with Exponential Smoothing: The State Space Approach*, Springer.
- (3) NASA GISS Data, gistemp2; (<http://data.giss.nasa.gov/gistemp/graphs>).
- (4) CRAN R-2.15.1 & RStudio.

「能仁新報」よりみた名古屋の仏教（二）

——明治二十三年五月～明治二十三年十二月——

川口高風

名古屋における仏教寺院の活動や展開をながめる方法として新聞記事がある。ただし、名古屋における新聞の創刊は明治四年三月に名古屋新聞が発行されたことに始まる。名古屋県が愛知県と改称するや同五年四月には名古屋新聞を愛知新聞と改称し、六月一月には愛知週報と改題して六月に廃刊された。翌七月には日刊愛知新聞、八年八月には愛知日報が創刊され、愛知新聞は八年五月に第二大学区新聞と改題したが、十一月に第二大学区の称が廃止されるのに及び、旧名に復された。また、同十六年には東海新聞と改題している。愛知日報は同九年一月に愛岐日報と改題した。続いて十一年には官報雑誌、青柳新紙、十三年には転愚叢談、愛知絵入新聞、十四年には物価新聞、米価日報、医事新報、十五年には愛知教育雑誌、経世新誌、学事新報、十六年には名古屋絵入新聞、愛知日々新聞、十七年には愛知自由燈が創刊されたが、黄金新聞と改められ、翌十八年には毎夕新聞と改題した。な

「能仁新報」よりみた名古屋の仏教（一）

お、同年十二月には東海、名古屋絵入、愛知日報の三社が合併し、翌十九年より東海及び名古屋絵入を扶桑新報に、愛知日報を絵入扶桑新報と改題した。同年には金城新報、金城だよりなどが刊行されており、金城新報、扶桑新聞、新愛知の三新聞が最も優勢であった。

同二十四、二十五年より以後も名古屋新報、愛岐毎日新聞、愛知民報、天下新報、時務日報、真金城、名古屋朝報、中京新報、愛民日報、魁新聞、斎藤新聞、東海日々新聞、名古屋日報、金城、明鏡新聞、金城朝日新聞などが創刊される一方、改題されたり廃刊もあった。⁽¹⁾

ところで、明治期に発行された新聞はほとんど政論を目的として生まれたものである。営利を目的とするものでないため、発行部数は極めて少なかった。その上、交通機関が不備であったところから配達することはほとんど駄目であった。しかし、新聞の発行が画期的な進歩を与えたのは戦争で、西南戦争以来、ニュースに対する読者の欲求が激増して発行部数も多くなっていた。読者は批判に興味を持ち、新聞もそれに答える時代の批判に力が注がれていた。そのため攻撃的なものが多く、政府は権力の行使によって、発売禁止や発行停止の処分に処するものが多くなっていた。⁽²⁾

このような新聞であったが、名古屋では愛知仏教会の機関紙ともいえる「能仁新報」が明治二十三年五月に名古屋市朝日町五十番戸の能仁社より発行された。発行兼印刷人は中村元亮で、編

輯人は石川安松であつた。販売方法は配達及び送付で、地方によつては販売所、または取次人が設けられた。

仏教新聞のため仏教全体の運動と進歩について意見を吐露し、事実を報道するのはもちろんであつたが、政治、社会、教育、実業、商業などに至るまで十分に注目している内容であつた。発刊の趣旨と特質をあげると、

現今我カ大日本帝国ノ版図ニ於キテ、南ハ沖縄県ヨリ北ハ北海ニ至ル迄、仏教ノ布教若クハ拡張ヲ目的トシ其機関トシテ発刊スルノ新聞雑誌ノ数ハ吾人其詳ナルヲ聞クヲ得スト雖モ、其日刊新聞モ既ニ二三種アリ。其週報新聞モ亦タ数種アリ。而シテ其雑誌ノ数ニ至リテハ、蓋シ少クトモ数十種ニ下ラス。我カ国仏教カ其数百年間ニ沈滞シ腐敗シ枯槁シタル元氣ヲ漸々回復シ来リ。遂ニ我カ国運ト其隆盛ヲ競ヒ、恰モ日月ノ並ビ懸ルカ如ク、輝光瞳々トシテ東洋ノ天ニ軋リ上ランコトハ吾人カ窃ニ期望シテ慶賀スル所ナリ。抑モ全国仏教新聞ノ数彼カ如クソレ多ク、其雑誌ノ数彼カ如クソレ夥クシテ殆ント世ノ購読者ノ需用ニ供シテ余リアル程ナルニ、今又吾人ハ、純然タル仏教ヲ以テ主義トスル此毎週新聞ヲ発刊スルニ至ルハ、果シテ如何ナル必要ヨリ生シタルモノナル乎。吾人一言以テ本紙ノ特質トスル所及其目的トスル所ヲ極明白ニ極簡短ニ説明スルノ勞ヲ執ラサル可カラス。蓋シ本紙ノ仏教新聞トシテノ特質ハ二個ナリ。曰ク本紙ノ発企人等ハ純然タル俗人、即チ仏教信徒ニシテ僧侶ニアラサルコト。曰ク本紙

ハ海内ニ於テ仏教運動ノ全体大勢ヲ代表スルノ新聞ニシテ、一宗一派ノ機関ニアラサルコト。此二点ハ本紙ノ特質トスル所ニシテ、吾人カ本紙ヲ以テ日本全国一種出色ノ新聞ナリト自ラ信スル所ノモノハ、蓋シ此二点ニ在リ。

ソレ本紙ノ発企人等ハ、既ニ前述ノ如クナレハ從來宗教社会ニ於ケル一種ノ弊習ト臭氣トヲ脱シ、自カラ其信スル所ヲハ何ノ遠慮モナク敢言痛論シ、只仏教ノ真理ヲ以テ我カ眼光ノ注ク所トナシ、全国仏教徒カ精神信仰ノ集合スル所ヲ城トシ、其性命財産名譽私欲ヲ以テ仏教ノ真理ノ犠牲ニ供シ、其言論其學問其実行其教誨ヲ以テ、社会ニ仏教ノ感化ヲ流カシ仏陀ノ恩寵ヲシテ洋々トシテ斯世ニ光被セシムルモノヲ兵士トス。念フニ此ノ一点ハ、我新聞ノ論說ヲシテ其光明ナルヲ期セスシテ、自ラ公明ナラシムルモノアラン。又其濶大ナルヲ期セスシテ、自ラ濶大ナラシムルモノアラン。次ニ、本紙ハ海内ニ於テ、仏教運動ノ全体大勢ヲ代表シテ一宗一派ノ機関新聞ニ非ザルガ故ニ、其報道スル所ノ事実ハ仏教全体ノ現象ニ係リ、決シテ特更ニ一宗一派ニ僻シ、彼レニ詳ニシテ是レニ略スルモノアラズ。是レ本紙ノ特質トスル所ナリ。

となり、さらに一言でいうならば、

故ニ一言以テ之ヲ云ヘハ、本紙ハ仏教新聞ナルヲ以テ仏教全体ノ運動ト進歩トニ付テ意見ヲ吐露シ、且ツ其事実ヲ報道スルハ固ヨリ勿論ナリト雖、又我邦ノ進歩即チ政治、社会、教育、実業、技術、商業等ニ至ル迄、恒ニ十分注目シ、苟クモ

我邦ニ於テ改良スヘキコトアレバ仏教ニヨリテ之ヲ改良シ、我邦ニ於テ保存スヘキコトアレハ、仏教ニヨリテ之ヲ保存シ、我邦ニ於テ拡張スベキコトアレバ、仏教ニヨリテ之ヲ拡張シ、我邦ニ於テ振起スベキコトアレバ、又仏教ニヨリテ之ヲ振起シ、仏教ノ生氣アル感化ヲ以テ之レヲ社会万事ニ応用セント欲スルナリ。何トナレバ、吾人ハ仏教ヲ以テ完全円満ナル真理ト信ジ、而シテ真理ハ以テ国ヲ興スベク、以テ世ヲ済フベク、以テ社会ヲ改良スベク、以テ文明ヲ進武ス可クシテ、又其教育、実業、富強ノ淵源タルコトヲ確信スレバナリ。世上ノ君子乞フ本紙ヲ以テ政党ノ機関ナリト邪推スルガ如キコトアル勿レ。真理豈党派アラシヤ。乞フ吾人ヲ以テ名譽ト私利トヲ目的トシテ本紙ヲ発刊スルモノト誤認スルガ如キコトアルコト勿レ、吾輩ハ既ニ仏陀ノ恩寵ニ感化セラレタリ。又豈仏教、道德、愛国等ノ文字ヲ仮托方便トシテ妄リニ名利ノ途ニ奔走スルモノナランヤ。本紙発刊ノ趣旨タル大略如此矣。

である。つまり発行の発企人は、仏教信徒の俗人で僧侶ではない。そのため一宗一派の機関によるものではなく、仏教運動の全体を代表する新聞である。さらに仏教によつて政治、社会、教育などを改良し、文明を進歩させようとするのであった。なお、第十七号（明治二十三年九月一日）では再度、発刊の趣旨が述べられており、

吾人か既に初刊に於て論ぜしか如く、徒に今日名義上の門徒

『能仁新報』よりみた名古屋の仏教（一）

たる者を以て直ちに仏教信者と名づくべからざるなり。徒に今日名義上の関係を以て、直ちに寺檀の組織完全なりと謂ふべからざるなり。徒に今日名義上の僧侶を以て、直ちに仏陀の使徒とは謂ふべからざるなり。徒に今日名義上の団体を以て、直ちに新仏教の教会なりと謂ふべからざるなり。徒に今日名義上の演説説教を以て、直ちに仏教の感化を与ふべしと断言する事能はざるなり。以上の者は皆以て革新改良を施さざるべからざるものにして、此の義を称して正義と名づけ、吾人能仁子は既に此義を唱ふるものなり。

去れば、如何して之れを改良し、如何して之れを革新すへきや。之れ能仁子が逐号論ぜんと欲する所なり。

抑も眼を放ちて遠く社会の有様を見よ。其の紛乱錯雑なる。啻に外形に止まらざるべし。故に宗教則ち心意識思想の境界も同じく紛擾を極むる事政治及び商工業と異なる事なし。仮令は耶蘇教の入り来りしより、神は人を支配せる者なりと謂ふ。奇観の新たに我日本帝国人民の頭上に落ち来るが如く、共和国政の歴史を読み人の権力に差別なきの奇念を起せしが如し。以上は觀念則ち心を感じしむる一二を挙げしものにして、異宗教の伝来する今日以後、益々頻繁なるべき時にしあれば、奚ぞ心性上思想上意識上に変動を来す事なきと謂ふべきが、既に開港以来外面的に非常の変動ありしを以て見るも、今後異教伝来等のために思想上即ち宗教界にも変動を起すべきや明々白々なり。去れば此の時に当り、今日の仏教を

して其俟に保存せんか。其の難き事智者を待たざるも知るべきのみ。去れば如何してか之れを保存せん。曰く革新改良の一あるのみ。

革新改良之れ吾人能仁子が此の世に生れし本懐のみ。革新改良は吾人が能仁新報を産みし所以なり。

このように、たとえば耶蘇教のように異宗教の伝来する今日であるところから、仏教を革新改良するため「能仁新報」を生んだともいつている。

その後、保存に便利ならしめるため紙面の改正や頁数の増加などが行われている。しかし、残念ながら現在確認できる「能仁新報」は、東京大学の明治新聞雑誌文庫に所蔵する明治二十三年五月十二日の第一号から同三十三年六月二十五日発行の第六四九号の十年間のみである。ただし、その間の明治二十四年六月八日（第五十七号）、十五日（第五十八号）、同二十七年九月七日の第三三三三号から二十八年七月三十日の第三七〇号、二十九年十一月十六日（第四三八号）から三十一年八月三十日（第五五五号）までの発行の号数が欠本しており、約八年半のみとなる。

この十年間の名古屋では、明治二十四年十月二十八日に濃尾震災が起こり、多くの災害を受けた。翌二十五年三月二十二日には大須観音、五重塔、仁王門、庫裡などが焼失しており、二十八年七月には県下の各地でコレラ病が流行した。また、二十九年九月九日には水害が甚だしく、庄内川が決潰して溺死者千人が出ている。

一方、国内外では同二十七年八月に日清戦争が起こり、仏教、キリスト教など各宗教が現地民への布教、軍隊慰問のために従軍布教使、慰問使を派遣している。同三十年六月二十六日には河口慧海がチベットに出発しており、十二月には伊藤博文が組閣した。三十一年前後には雑誌「仏教」に仏教公認教の意見が出て世間の問題となった。三十二年十二月には山縣内閣が政府案として提出した第一回宗教法案に対する反対運動が起っている。三十三年には一月に普通選挙同盟会となり、衆議院に普通選挙請願書が提出された。なお、三十一年正月にはインドで仏骨が発掘され、その一部をシヤム国より日本へ寄贈されることになり、三十三年五月には奉迎に行き、七月に長崎へ到着している。

さらに各宗では、真言宗が三十二年に宗派の対立があり、三十三年に古義、新義真言宗各派の分離独立が認可されている。曹洞宗では同二十三年に布教標準をなす『曹洞教会修証義』が制定され、二十五年には大本山総持寺が曹洞宗より分離独立する事件が起きた。また、三十一年四月には能登の総持寺が焼失しており、翌三十二年には大本山永平寺で道元禅師六五〇回大遠諱報恩授戒会が修行された。さらに真宗では、同二十九年十月に清沢満之らが「大谷派改革派機関誌『教界時言』」を創刊し、連名請書願をもって大谷派法主、本山に改革を迫っている。また、真宗大谷派、真宗本願寺派ともに蓮如四〇〇回忌を修行している。

このように明治二十三年から三十三年は明治中期で、初期に制定された各宗制度の改革や日清戦争による景気の向上期であっ

た。そのため各宗において種々の改革刷新が活発に行われ、現在の各宗の礎が築かれた時であったともいえよう。

注

- (1) 名古屋における新聞の発行は、『名古屋市史』学芸編（大正五年十二月 名古屋役所）、石原生「名古屋に於ける新聞紙沿革の概要」（昭和三年十二月 『紙魚』第二十五冊）、『名古屋印刷史』（昭和十五年十二月 名古屋印刷同業組合）一〇四頁以下、西田長寿『明治時代の新聞と雑誌』（昭和三十六年八月 至文堂）一九五頁以下、『新修名古屋市史』第五卷（平成十二年三月 名古屋市）八四九頁以下などによった。
- (2) 『日本新聞百年史』（昭和三十七年三月 日本新聞連盟）二二四頁以下、『中日新聞創業百年史』（昭和六十二年八月 中日新聞社）五頁以下による。

凡例

一、本稿は「能仁新報」に掲載されている現在の名古屋市内にあたる地域の仏教関係の記事を採録した。「能仁新報」（名古屋朝日町五十六番戸 能仁社発行）の原本は東京大学法学部の明治新聞雑誌文庫に所蔵するものを使用した。同文庫には明治二十三年五月十二日発行の第一号より明治三十三年六月二十五日発行の第六四九号まで所蔵するが、明治二十四年六月八日（第五十七号）、六月十五日（第五十八号）、同二十七年九月七日（第三三三号）から同二十八年七月三十日（第三七〇号）、同二十九年十一月十六日（第四三八号）から同三十一年八月三十日（第五五五号）までの発行号数は欠本となっているため、その間の記事はない。

一、第一回は「能仁新報」第一号（明治二十三年五月十二日）より第三十四号（明治二十三年十二月二十九日）までから採録した。

一、翻刻にあたり仮名使いは原文のままとし、旧漢字は新漢字に、変体仮名はすべて平仮名に改め句読点を付した。なお、記事に付してある漢字のルビは削除し、明らかな誤植は訂正した。

一、記事は掲載年月日順に配列したが、記事中に「当市」とあるのは名古屋市のことである。

慈善展覽会〔明治23年5月12日 第一号〕

愛知仏教会が主唱者となり、市内は勿論市外の各寺院及び他より古物靈宝等の出品を請ひ、門前町極楽寺の本部に於て本月中旬より展覽会を開き、広く衆庶の縦覧に供し、其縦覧料を以て窮民を救助せんとする七日の例会に議決したれば、孰れ近々の中より着手せらるゝ事ならん。

説教と法要〔明治23年5月12日 第一号〕

明十三、十四の両日は知多郡大脇村曹源寺に、十四日は当市宮出町永安寺に、十七日には同じく杉山町安斉院に孰れも説教及び法要を営まるゝよし。其教師は伊藤覚典師なりと。

愛知仏教会第二期大演説会〔明治23年5月12日 第一号〕

昨日、当市門前町西別院にて開きたる該会大演説会の概略を示さるゝに、玄関門の前には六根色の仏旗を交叉したり、其余粧飾至らざるなし。午前十時頃より会員続々参聴に来るもの引きも切らず。已に午後には会場立錫の地なく、入場を拒絶するに至る。実に未曾有の盛会にて正一時を報するや、伊藤覚典氏演壇に登り開会の理由と併せて本誌発行の主意を述べられたり。続ひて水谷仁海師（愛知仏教会は先鞭をつけた）、小杉陶蔵君（仏教）、笠間龍跳師（能仁寂黙の解）、松山松太郎君（進んで取るか退いて守るか）、西有穆山老師（仏性の有無）にて何れも蘭菊美を競ひ演述せられ、午後四時二十分頃閉会せり。尚其演説は速記に有名な

る波多野氏を聘して速記せしめたれば、次号より其筆記を掲げ、愛読諸君の電覧に供せん。

同夜会の景況〔明治23年5月12日 第一号〕

晚六時より千歳座に於て開きたる仏教演説夜会の景況は、昼に異ならず満場立錫の余地なく聴衆無慮四千人余なり。第一席松山松太郎君は（自由思想の結果）第二席水谷仁海師（二十三年の仏教は如何）第三席小杉陶蔵君（仏教・第二）にて、何れも滔々懸河の雄弁を奮はれ、特に小杉君の如きは聴衆に非常の感動を与へたり。今回の演説につき、仏教会へ加入を申込む者終日絶へず。為に係員は繁忙を極めたりと。仏教徒の団体は世間に尠からざれども、六千余名の会員を有するものは、盖し愛知仏教会の外他に非らざるべし。

永安寺の仏教演説〔明治23年5月12日 第一号〕

毎月十四日大般若転読並心経講義を開筵す。講義は大光院住職笠間龍跳師にして、講本は能仁新報記載の心経平談を以て講義せらるゝに付、同新報を御持参あれ。当廿一日大施餓鬼を執行し仏教演説を開き、弁士は仏教会より聘す。

名古屋市宮出町 永安寺

臨時生徒募集広告

本校各年級に欠員あり。依て男女共各廿名宛募集す。女教師には高等女学校卒業生二名を聘し、且つ大和唱歌教師には羽塚慈音師

を聘懇篤に教授す。亦毎日曜日午前八時より、何人に限らず大和唱歌を教授す。有志の諸君は至急来学あれ。

名古屋市宮出町永安寺内

愛知育英学校

大須宝生院寺伝〔明治23年5月19日 第二号〕

伊勢大神宮の神主従三位度会行家の子能信上人の開基にして、中島郡大須庄北野村にありしを、慶長十七年徳川家康の命に依りて住僧梵遍をして今の地に移さしめ玉ふ。南朝の正平五年十二月十三日、後村上天皇御祈願の綸旨を賜ひ、また東南院二品法親王の令旨をも玉へり。同じ御宇文和元年勅によりて、摂津国四天王寺の正観音の像をうつして、当寺の本尊とす。同じ天皇の皇子土御門二品任瑜法親王第三世の住職として、おぼろけならぬ勅願寺なりしが、中世の騒乱に衰廃せしを、信長公燈明田として北野の地を寄付有しがども、累年の水災に煙没せしゆえ、今の所へ移せしなり。聖一国師の弟子仏通禪師遷化の時、密教及び禅学の書籍残らず彼能信上人へ付与せしゆへ、今に大須古写本の書籍多し。さて此能信上人は、和歌に長じたる人にて、其詠歌古き歌集に見たり。曾て此の境内に鎮座ありし天満宮神像は、延喜二年筑紫太宰府に於て、菅公御自筆に画かせ玉ひ、北の御方及び姫君へ送らせ給ひし画像にて、天曆年中北野御鎮座の節神殿に御同座ありしを、後醍醐天皇御崇敬のあまり、長岡庄大須の地にむかへ奉り御建立ありし旧社なり。今も北野山と号しと大須と通称するも、此

の縁に由ればなり。今此の神像は、該寺の靈宝として宝庫にあり。其余靈宝頗る多し。

七ツ寺の仏教演説〔明治23年5月19日 第二号〕

明廿、廿一日の両日、当市門前町七ツ寺に於て、午後七時より仏教演説を開会せらる。其弁士は青木宥恕（世界に貴重なる者は果して何物ぞ、諸君日本男子となり玉へ）の二題、宮崎智全（不殺生）横井良嶽（吾人の目的）の三氏なりと。

法園会の盛会〔明治23年5月19日 第二号〕

法園会の有志者は、去る十七日鍋屋町円明寺に於きて南条博士、名和大鳳、萩倉耕造の三氏を聘し、仏教演説を開かれたりし。景況を記さば、該門前には六根色の旗を交叉し、紅白の流旗を樹て、夜に入りては数百の紅燈を点し、既に七時頃に至りては満堂立錫の地なきまでに傍聴人の充満せしは、近来に稀なる盛会なりき。亦同会には、明廿日を期し、兼て能弁の名ある小杉陶蔵氏を聘して、更に一会の演説を開かるゝよし。

来る廿日昼夜、愛知郡鳴海大心進徳会會員諸氏の発起にて開会せらる。其弁士は伊藤覚典（好年中の好年）近藤疎賢（真の開明）萩倉耕造（未定）の三氏にして、会場瑞泉寺に△廿一日午後二時より当市宮出町永安寺にて、近藤疎賢、伊藤覚典、中村頼宗の三氏にて何も仏教演説会を、去る十一日昼夜二回、演説会を県下西加茂郡挙母村に開き、村瀬古俊、萩倉耕造等数氏の演説ありし

が、(ヲルガン)(バイヲリン)等の奏樂ありて中々の盛会なりしが以来、毎月一回つゝ法話、若くは演説を開んと、有志は尽力奔走のよし。

桜町天満宮の社伝〔明治23年5月26日 第三号〕

今此の社伝を記するに当り、最も必要なるは其昔当国勝幡の城主織田備後守信秀氏が事蹟なり。氏は桓武天皇の四世高望王十一母の孫平資盛が妾腹織田親実が後裔なり。親実が父平資盛は寿永二年、平氏の一門京師を避けて西海に奔るに当り、其妾に孕めるものありければ、別れに臨みて之れに告げらく。我今西海に落ち行かば、生きて再び汝に遇はん事難かるべし。汝若し別後に男子を産まば、孤を育て、我が後を立てよと懇に諭して西海に行きぬ。

妾は深く別れを惜み歎き悲しみしかども、兵乱の折柄わきて京師は戦ひの中心なれば、泣く／＼都を立ち出で、潜かに江州津田の郷に到り村長某の家に匿くる。既にして月満ち男子を産みければ、其名を親実と名づけて越前の国織田明神の神官某の猶子となしけるが、親実の稍長するや自から平氏の後胤なる事を知り、姓を織田と名乗り、足利氏に仕へて尾州に來り、世々当国に住しけり。信秀は則ち其十六世の孫にして、実に織田信長とは其祖を同じくしたる従弟にして、代々末盛の城主たりしが、殊に信秀は文武兼備の誉も高く、威名四隣に輝きて天晴れ武將の名に負かざりき。爰に信秀の伯父にして、大雲と名づけし禪師あしが、世は足利の末葉にして、諸侯所々に割拠して互に角争を事として智計謀

略唯吞噬を旨とせるにも似ず。又能く仏を信じ、法を重んじ、寺塔梵鐘を建立し、名僧智識を懇請するの心の厚き事、亦當時の美風なりしが、信秀の如きは則ち其一人にして、実に兵馬控騷の間に在りて、身に弓箭を帶ぶるいへども、曹洞無着の心を明かにして、以心伝心の理りを悟り、禅味を嘗めて其甘きを知り、専ら正法の興隆に力を尽されければ、幸ひ伯父の大雲禪師を招請し、尾張国那古野に一字の精舎を建てらる。偕其他は今の名古屋を北となし、南は今の広小路より東西凡そ十丁に及び、今の巾下は則ち其門前なりと云。斯くの如く宏大の伽藍なれば、巾下五百六十余石の田園を寄付し、常住梵修の費用に充て、三年の星霜を経て成就しければ、名をば龜嶽山万松寺とぞ名づけられける。然るに信秀氏は、仏を信ずるのみならず厚く敬神の心ありて常に菅神を崇敬し度々京師の北野に詣てられけるが、或時靈夢に感ぜられけん。北野の社中に梅松院と申す寺ありしが、寺の重宝として蔵め奉る菅公御自作の御木像ありけるを迎へ奉りて万松寺の鎮守とぞなされける。是れ則ち今の桜天神の濫觴にして、今の神社は則ち万松寺鎮守の旧地なり。斯くて幾干の星霜を経て慶長十五年になりぬれば、徳川家康公は西国北陸の諸侯に命じ、春日井郡清州の城を那古野に移し、改めて名古屋城を築かれけるが、則ち万松寺の境内なれば、寺を今の所に移されしかども、菅神の祠は御圖の神慮にまかせ奉り、依然其地に残されける故に、社殿の向も當時の俛にして社殿の門に背したるは、恐らくは此社の外には非ざるべし。以上祠伝の大略を述べけるが、桜天神と申す所以は、昔し

此の祠の後ろに大桜ありしによるとかや。今も一樹の老桜はあれども、そは大火のありし後、因によそへて植へしとぞ。次に、

例祭の前後に植木を商ふ事

は何時の頃より始まりけん。別に由縁もなきことなりと。

時鐘の事

万治四年三月より社内に鐘樓を建築して昼夜時尅を報せしめしが、維新以後は断へたりき。社内に有名の国学者田中道麿呂氏の碑石（本居宣長翁撰）あるが、何故に倒しあるか、記者は甚だ遺憾に存ず。

又此の這りは、名古屋城造営の時、天守閣を建られたる加藤肥後守清正氏が普請場の旧地にして、氏は当寺万松寺を以て旅館にあてられたりと云。

愛知仏教会の慈善〔明治23年5月26日 第三号〕

同会は、本日即ち世尊の降誕会を以て、目下飢渴に迫りし貧民を救助せんとて、過日来、義捐金の募集に尽力せられしか。会員は勿論、其他より喜捨し玉ひし金員は、既に二百余円の多きに登りしを以て、先づ貧民一人に付、五合の割を以て本日、一千人分則ち五石の白米を早朝より施与せんとす。偕、当日は仏教会本部の境内に釈迦堂を建て、其の前にて施与する事とせり。亦会員井上重兵衛氏より甘茶一俵を寄付せられたれば、是れ亦一般に施与すべき筈なるが、是れを第一会とし、続きて救助の方法を協議中なり。最も愛知仏教会規則には、明かに慈善の挙を為すべき明文も

あれども、是れまでは単に演説講義新聞の三事業を為せしのみなりしに、今回の慈善を始めとし、以後に免囚保護に育児に悉く規則に掲げし実業を挙げて、仏教者の本分たる実地運動為さんと存すれば、世の仏教者及び慈善家よ、願くは微志の存する所を察し、増々本会を賛成せられん事を。記者は一同に代りて江湖に望む。尚ほ当日の景況は、次号に於て詳細に報道すへし。

溺死者大法会〔明治23年5月26日 第三号〕

兼て聞し各宗同盟仏教会の有志寺院の尽力にて、入鹿大池堤防破壊の節、溺死せし者の廿三年と昨年水難を蒙りし全国横死者の一周年とを兼ねて、本月十四日丹羽郡羽黒村興禅寺に於て、近來未曾有の大法会を舉行せられし景況を記せんに、高く五色のフラフを立て、毬灯一千余箇を掲げ、犬山街道まで路傍に彩幡を列ね、堂内には錦色灼々たる莊嚴を為し、一石余の餅を供へ、導師臨済宗管長関無学禪師の來着せらるや東西春日井丹羽葉栗四郡の各宗三百五十余の僧侶左右に立列し、瞭曉たる奏樂の中に入堂せられ、読経回向の了りし時、又川施餓鬼を修行し老若仏名を唱ふる声と共に経音は天に響き渡り。如何なる溺死者も此法会に遇ふて定めて地下に得樂するならんと覺へず。感泣せし者尠なからすと。当日は天氣極めて清朗にして、近傍四五里内より参集せし人は、広き羽黒村内に溢ふるゝ斗りの有様なるに、演説と説教と順次に富樓那の快弁を以て仏教の光りを輝かし、聴衆に非常の感動を与へられしと。

進徳会員の慈善〔明治23年5月26日 第三号〕

愛知郡鳴海村進徳会本部たる瑞泉寺に於き、去る廿日兼て本紙に記載したる如く昼夜仏教演説を開会せられ、翌廿一日大施餓鬼を修行し、貧民にして仏事を営むこと能はざるもの、為め、祖先追福の法要を営まれ、同日より餓鬼に叫びて見るに忍びざる同村内なる貧困者百三十七名に施米せらるゝよし。既に其義捐金として、同会員の尽力により二百五十余円の喜捨金を得られけるか、尚ほ尽力中のよしなるか、其發起者は何れも同地の仏教家にし、其姓名は左の如し。杉本道山、小笠原惣兵衛、梶川初造、早川常吉、近藤武助、榊原重義、中西理八、伊藤庄兵衛の諸氏なりと。

真理協会の演説〔明治23年5月26日 第三号〕

一昨日、橋詰町円頓寺に開会し、荻倉、伊藤等の諸氏交々演壇に登り、各拍手の間に下られ、偶近藤氏の口演半はなるに及び、突然火事の報の為めに、少数の傍聴は出場せしが、大半は皆静粛に坐し、又喝采の中に結論せらる。当日は式場には六金色の旗を交又し、装飾極めて美麗にして、会員諸君の仏教に尽くさる熱心には、聴衆は弁士の名論と共に感動せしと。只憾むべきは小杉、岡の両氏事故に依り欠席也。

仏教演説会〔明治23年5月26日 第三号〕

本日午後一時より愛知郡稲葉地村真生寺に於て、黒田安麻呂、加

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（一）

藤大成、鬼頭宗城氏を聘して、同日西春日井郡九ノ坪観音寺に於きて、伊藤寛典氏を聘し、

明廿七日愛知郡笠寺□□□にて青木宥恕（宗教信者の結果）、各務恵実（十善の説）、杉本恵本（世界第一の化者とは何ぞ）の諸氏を聘し、何れも仏教演説会を、

亦同日より当市鶴重町□□寺に於きて、現世和讃を以て有名なる土倉村浄雲寺住職高橋示証氏を招待して説教筵を開かるゝよし。来る六月一日午後、当市松山町安齊院にて大法会を修行せられ、導師には有名なる野々辺至游なりと云ふ。

大光院主〔明治23年5月26日 第三号〕

大光院主は、去る廿日当地出發教用を帯ひて東上せられけるか、寓所より社へ寄せられし書信に、……昨日汽車中に在りて貴社の新聞を読み居る人ありければ、借りて読みしに、榴陰君か余を讃したる詩あり。余や道学二ツなから欠きて敢て之れに当る能はず。又当春丹波巡教中に余を評して悪僧なりと云ひ、また其の取消しを為したる人ありと聞きて、

難波江の波のまに／＼まかせなむ

よしあしの世を渡る身なれば

と口づさみたる事もありき、兎に角毀誉は夢の一場云々。

昨日は陰晴常なく、汽車中より不二の山を望むに、顕陰出没自在なるも、又一興を添へたり。

動きなき不二の高根も浮雲に

かはる姿の面白きかな

また、

浮雲にまよひし眼より不二の山

かはらぬものをかはるとそ見る

たとと御笑被下度云々。

論 説〔明治23年6月2日 第四号〕

左の一篇は、去る頃真宗本願寺派勸学原口針水老師が当市門前町本願寺別院内真宗青年伝道会支部に於て講話せられし筆記なり。

伝道の心得 真宗本派勸学原口針水講演、凡そ伝道と申す名言は、洋書漢籍国史にも常に談することにて、各々其の道に付て伝へ方にも随て不同ありされども、今は真宗に付ての論なれば、自余に關せず。先づ宗意を以て暫く御咄し致します。伝道の名言の中に伝は能詮、道は所詮、先づ其の道とは何等をさして申す哉と云ふに、即ち論註八番問答の中に、諸仏菩薩説世間出世間善道教化衆生と云ふ。此の二種世間の善道を伝へるが、浄土真宗の教化にてある凡そ教化は勸懲を先きとす、其の懲惡勸善の急なるは因果を明かにするにあり。宝王行正論（三右）若略説邪見曰發無因果若略説正見曰信有因果。北本涅槃經三十五卷（十五丁）南本涅槃經三十二卷（二十四丁）にも此の事を説けり。其の文の信卷本（二十七丁）に引用あり。仏本行集經六卷（三丁左）に麻皮般提国王の慕惡なることを説て不信因果と云ふ。所謂一切

罪惡不信因果為根本一とも戒めたまへるが是れなり。此れに反すれば、都て心行の善良なるは、必ず因果あることを信ずるの厚きに依る。心地觀經に、凡そ大國の聖王たるは必ず其宿世に於て深信因果の行ひ善良なるに依る。よりて無因無果大邪見と説き出して、是故王者非因と決してあり。偕て此の因果と申す名言は、漢籍には安せず。六国史などでは、因果は仏教も及ばんほどあり。続日本記二卷（七丁）為賤為良有因有果等是れ大經の善惡報応禍福相承と云ふものと全く旨を同す。彼の大經に積善余慶と云ふもの、漢籍の積善必有慶と云ふも、因果応報の道理は申し尽してあり。天智天皇鎌足公の病床を訪ひたまひて、御言の中にも積善余慶、豈に夫れ空しからんやとござります。されば地藏所説の善惡応報を説きたまひて、其説に二種の因果を分て、一に世間の因果、是は六道を分て人天を善とし、自余の四種を惡とす。而して因果空しからずと云ふ。二には出世間の因果、是れ声聞緣覺菩薩の三乗の因果を云ふ。されば撰撰集下卷（十二丁）觀經行福の中の深信因果の一句を釈したまふ中に、此の地藏所説の全薩行の規則を踏で釈定したまふ。而して其の出世の因果の下には、大乘三乗及び一乗の教法をも挙げて漏らさず。而して此の深信因果の一句の中に世出世の教法を撰尽してありと結びたまへり。されば奉事師長の句を釈したまふに、同く世間の師長出世の師匠と分て、其の世間の師長は仁義礼智信を教へるの人とす。之を以て今の論註を見れば、此の因果を謗無せば、豈に仁義礼智信あるを知らんやとのたまへるものに能く応じます。

学場の開講〔明治23年6月2日 第四号〕

当大谷派本願寺別院に於きて、春秋の二期学場を開き尾張全国の僧侶を集め仏書の講筵を開かるゝ例規なるが、昨日より春期の学場を開き、大谷派一等学師小栗栖香頂師を招き、撰択集の講筵を開き、其副講には当国海東郡同三等学師海老原静観師なると云。

開校記念の祝典〔明治23年6月2日 第四号〕

開校記念の祝典を挙行せん為め、明二日当市下茶屋町大谷派普通学校には、午前九時より職員教員生徒一同終身教場の広間に参集し、祝詞祝文及び演説等あり。尚終りて種々の遊戲運動をも催さるゝよしなりと云。

法国会の演説〔明治23年6月2日 第四号〕

去る五月廿五日午後七時より、代官町京柳座にて小杉陶藏、伊藤覚典、黒田安麿、近藤疎賢の四氏を聘して開会ありしか、何れも熱心に仏教の真理を説き、耶蘇教の妄を破せられし故、聴衆は何れも感動せり。尚同夜魚町の御納屋に於きて、将来仏教上に関する運動上の事に付き懇親会を開きて協議せられしと云。

育英学校の補助金〔明治23年6月2日 第四号〕

宮出町永安寺に設立せし育英学校は仏教主義の学校にて、将来は盛大なる者となし、十分教育を進めんとて同宗管長へ補助金下付の義を願ひ出でられしに、大に其挙を賛せられ寄付金を賜りしと

其指令を得たれば、左に掲ぐ、

願の趣向本山貫首閣下へ上請ニ及ヒ候処、其事業ノ純善ナルヲ嘉ミセラレ、其校資本の内へ金一百円御寄付相成候事

明治廿三年五月廿九日

曹洞宗務局

生花会〔明治23年6月2日 第四号〕

来る六月八日には、門前町極楽寺に於て西京円山会分筵植松家、松月堂古流生花会を開らき、家元よりは五大坊出張し、尚ほ尾張会頭の盛んなる大会を催す由。

仏教会の貧民救助〔明治23年6月2日 第四号〕

去る五月廿六日午前七時より門前町極楽寺に於きて、花にて屋根を葺きたる七尺に五尺の仮御堂を造り、中に釈迦如来の御像を安置し、施米を貰ふ貧民に拝礼せしめ、其傍らには説教師ありて因果の道理を説き示し、今後の世渡り等まで懇ろに語られて仮御堂の後に施米せり。其石高は白米五石にして、一人に付五合つゝとし、一千人分を施せり。尚ほ集りたる喜捨金は一百二十余円の多額なれば、残りの金を以て近々の中に第二回の救助を為す筈なり。当日は甘茶を与ふる等、すへて懇に貧民を取扱ひしかは、何れも念仏の声と諸共に涙を流して義捐者の厚意を謝したりき。尚ほ慈善家は多少を問はず増々喜捨せられて、本会の微志を賛助せられん事を希望するなり。

笠間大光院主の慰勞〔明治23年6月2日 第四号〕

師は過般、管長の命により京都滋賀の二府県へ派出巡教を命ぜられしか、去る五月廿三日付を以て左の賞詞を賜はられたり。

巡教師 笠間龍跳

京都府滋賀県へ派出巡教を任命せしに到る処、真諦を演暢し、各教会信徒をして能く信根を固からしむ感嘉余りあり。茲に直綴一領を授与して、聊か其勞を慰す。

明治廿三年五月廿三日

管長 畔上樸仙

また、随行員久田龍峰氏には、

巡教師随行員 久田龍峰

巡教師笠間龍跳到に随行し、左補右弼能く其任務を全ふせしめたる段甚だ嘉みすへし。茲に慰勞として金三円を賜与す。

明治廿三年五月廿三日

管長 畔上樸仙

桜天神の境内取広げ〔明治23年6月2日 第四号〕

前号の紙上に略伝を掲けたる当市桜町の天満宮は、社殿の造りも、昔万松寺の鎮守たりし時の其俣にして境内も甚だ狹隘あるが、今回近傍の有志者中、境内取広げ及び表門を本町通りに付け換へんとて、昨今尽力中のよしなりと云。

東本願寺別院の略伝〔明治23年6月9日 第五号〕

左に掲ぐる最と莊嚴なる堂宇は、文化二年に再建せしものなるが、退いて其の由来を尋ぬるに、元禄三年京都六条の門主第十六

世の無碍光院一如上人、諱光海と申す高僧、多年の願望に依りて道心教入江崎氏市民を以て当国の片に訴へ、城下に建立の御免を蒙り、終に大願成就して袈町の泉龍寺を始めて名古屋御坊と為せしが、同年冬十二月国命に随ひ、古渡村前津の境なる一万坪の敷地即ち織田信長出生元服の地とて名高き、天文の頃彈正忠が新城を築きてより男織田備後守信秀の住みし城址に移し、元禄五年今より百七十三年前、坊舎を建立し後ち一如上人の本利に遷化せらるゝや、洛中の諸道場の僧侶等交代輪番となりて寺務を掌れり。故に道俗呼びて「御通ひ所」と云ひ、永く今日まで仏門の名刹として稀なる堂宇を有し、隣国の老若男女の詣ふでぬものとて無く、僻地のものの城の在り場を知らざるも此寺を伝へ聞き、親の背にありて小兒心に見覚へのあるならん。誠に仏教の我国人の心に染み渡りしを、此伽藍の關係する所多からん。斯くて文化の再建、土木の結構殊に行届かぬ所とはなく、人も我も花の朝には弘化の年に植へし桜の下に手を曳きて、広見に咲き乱るゝ花を賞し、昔時の人に習ふて心地よく葭簀の茶屋に遊び、月の夕べは廿六夜待として何時しか始りしを知るも知らぬも集ひ来て、春に劣らぬ賑合ひに澄み渡る月を眺めて楽しみ、朝課の鐘に驚かされて、左ながら迷夢を破るが如き心地するも、皆此寺の人に及ぼす清洒たる勝景にて、実に名古屋の妙境なり、崇め観るべきの梵宮なり。因に云ふ。慶応二年寅年世上何となく皆貧困に叫ぶ者ありしとき、此東広見の岨に小屋を構へ、施行御備講と云貧民の爲めにて一口二分掛の御備講を三万五千口集めて鬻引となし、当鬻の者二

千七百二人へは、最初の者五人には百両づゝと段々次第ありて、終りの者は一人五百両を即時に貰ひ受け、不当の者は其日に一朱を取りて、追て一分三朱を受け戻す筈にて、加入者は少しも損の無き方法なりしと。且其節役所へ願ひ出で、七千四百五十両の下金を願ひしと云ふ。其文あり。左に掲ぐ、

御城下端の借家住の難渋の者共御救之為、広小路において長く施行被下趣、最早新米取入も近寄候得共、兎角米高にて御差止之際限無之上も、御時節柄に付、町々より御手伝ならでは難成候処、左では迷惑の向も可有之候付、今度施行御備講御願済相成、一口金二分懸けにて鬪引を以御下げ金相成多少共不残え金子被下候筈に候間、直達の者は不申及平町家之者は町代庄屋より相論可成丈多数加入相成候様致度候事

寅八月

施行懸り

別院の伝記には贅語の如きに似たれとも、当今の時節柄なるを以て斯くは施行の旧法を記しぬ。

白根内務次官の法要（明治23年6月9日 第五号）

氏は事務引続ぎの為め過日來名ありし際、当地門前町総見寺に於きて父母及び亡児の為に法要を営まれしと。

施米の狂歌（明治23年6月9日 第五号）

去る廿六日、門前町極楽寺に於きて愛知仏教会か貧民一人に付五合つゝの施米をなせし時、石塚無仏老人か即吟して貧民に一生後

「能仁新報」よりみた名古屋の仏教（一）

生を願へと勧められたる其歌は、

五合で今日一日は極楽寺

一舛五舛願ふ身になれ

熱田の貧民救助（明治23年6月9日 第五号）

熱田白鳥の法正寺住職は貧民救助の義捐金を募集せられしに、最寄の有志中より既に八十余円の寄付ありしかは、近々方法を設けて救助せんと目下協議中のよし。

道德会の建白（明治23年6月9日 第五号）

当市門前町阿弥陀寺に設立しある同会には、今回会員中より二名の惣代を撰出し目下餓死せんとする貧民の為め、其慘状を陳述して救助あらん事を主務省に建白の為め上京せしめんと計画ありしと。

仏教婦人会（明治23年6月9日 第五号）

当市茶屋町に設立しある同会は、創立已來日に増し隆盛に赴き、会員も現に五千名に垂んとしたるにつき、来る七月初旬を以て會長伏見宮殿下、真宗大谷派、本願寺派、高田派の御裏方を請待し、下茶屋町東別院に於きて盛なる発会式を挙行せらるゝ由。

唱道会の演説（明治23年6月9日 第五号）

去る五日、当市伊勢山町善正寺に設立ある同会の演説には、名和

大鳳、松本恵秀の二氏出席せられたるか、当夜の景況を記るさんに先づ同会の記事を朗読し、次て前会後入会者の姓名寄付の新聞雑誌等の報告をなし終りて演説を開かれたるか。名和氏は無我、松本氏は仏教の価値てふ演題にて、一同満足して退場せられけるが、尚ほ同会には本月下旬、真宗大派一等学師小栗栖香頂師を聘して、同会付属部の説教始めなざる、よしなるが、尚ほ時日等は聞き込み次第報道すへし。

演説〔明治23年6月9日 第五号〕

来る十一日午後二時より、当市白川町養林寺に於て仏教演説を開会せらるゝよし。其弁士は沢日向麿氏なりとか申す。

貧民救助〔明治23年6月9日 第五号〕

日に増し米価の騰昇に際して、前津町隣町の極細民の困難を見るに忍びずして、全町内長松院住職水野道戒氏が慈愍大悲の涙を流し、自から当市の慈善家へ赤脚にして非常の奔走を為し若干米を受け、来る十日、第二警察署届済の上施与せらる。幸ひ同寺の法脈会なれば、定めて貧民へ因果業報の妙理を演じて救助せらるん。

長松院の施米〔明治23年6月16日 第六号〕

当市上前津町長松院に於きて、去る十日貧民救助を行はれけるが、一人に付四合つゝ八十六名、同じく三合つゝ十二名惣計九十

八名なりしと、同寺の世話方諸氏より申し越されぬ。

熱田の演説〔明治23年6月16日 第六号〕

去る十三日、熱田亀井山なる仏教会支部の定期演説を開かれければ、弊社よりも出場して一場の演説を為したりしか、続々新報の購読者もありて、相変らず諸氏が仏教の爲／＼熱心なるは感服に外なし。

大谷派普通学校の内演説〔明治23年6月16日 第六号〕

同校生徒諸氏が設立にかゝる樹心会にて、来る十六日午後一時より内演説を催さるゝに付き、一等学師小栗栖香頂師か出席さるゝと。

熱田の貧民救助〔明治23年6月16日 第六号〕

去る十三、四、の両日、仏教会熱田支部亀井山に於きて、同町の貧民六百六十余名に各々二日分つゝの施米に為せり。

演説と救助〔明治23年6月16日 第六号〕

来る十五日より当市東袋町教泉寺に於きて、高岡応順、広間隆円の二師、其他有志の僧侶には、日々午後六時より演説並に説教を開きて、其費錢を以て市内の貧民を救助せらるゝよし。僧侶諸氏よ、総て斯くこそありたきものなれ。

第一特別教会〔明治23年6月16日 第六号〕

昨十五日、当東別院に開きし第一特別教会は、小栗栖学師の講筵ニテ聴衆中の重なる方は当黒川師団長黒木旅団長及び其御家族県知事將校県官裁判官等凡百名斗りなりしが、因に記す。徳川公爵は一昨日参詣せられし節、若干の金員を寄付せられしよし。

感化保護院設立願〔明治23年6月16日 第六号〕

愛知仏教会が慈善事業の其一として、既に出願したる感化保護院設立の主意及び認可の次第は左の如し。

感化保護院設立願

仏教の真理を拡張し、兼て慈善事業を興さん事を目的として、各宗各派の僧俗を以て組織したる愛知仏教会は、不幸なる刑余の人を救済し、未来の良民たらしめんと欲し、本会々員の協力と一般慈善家の翼賛とを得て感化保護院を設立致度候条、御允許被成下度則別紙綱領相添此段奉願上候

追て御允許の上は、速に着手可仕且、該事業に關する諸般の細則は、更に相伺何分の御示令可相仰候也

明治廿二年十二月十八日

名古屋市裏門前町万松寺住職生駒円之

外十五名

明治廿二年十二月十八日付願感化保護院設立ノ件認可ス

明治二十二年十二月廿八日

愛知県知事 勝間田 稔

右の如きに付き、逐々同会に於きては、着手の準備に取り係らるゝなり。

風航社〔明治23年6月23日 第七号〕

風航社は、去る十日より大谷派第二特別教会委員有志の組織にて、当市桜の町珉光院に於きて毎月四日、真宗学師名和大鳳師を聘して浄土和讃原人論を講せられしが、原人論は既に講了になりたるを以て、来月四日より起信論を講せらるゝよし。尚ほ同社は、個人的安心立命道德培養の主意なるを以て他を誘導せず、且講義前には、必ず社員一同仏前に勤行を為し終りて講義を聴聞する例規なりとか。

愛知仏教会支部の演説〔明治23年6月23日 第七号〕

来廿九日を期し、名和大鳳師を聘して愛知郡熱田前新田支部には、同地の誓成寺に於きて演説を開会せらる。

唱道義会〔明治23年6月30日 第八号〕

仏教主義の団体なる当市の唱道義会は、来る七月五日午後七時より伊勢山町善正寺内本部に於きて定会を開かるゝよしにて、今其演題を聞き込たる分は「所感」、本多善明氏「於諸衆生視若自己」、劉潮等の諸氏にして、尚此外にも諸氏の出席ある筈なりと。

演説と説教〔明治23年6月30日 第八号〕

来る七月二日、大高村仏教会支部に於きて演説を、同日当市松山町安齊院に於きて大般若の転説と説教を、亦去る廿七日には同町聚福院に於て羅漢供養と説教を、其教師は野々辺至遊師にして、廿五日戸谷村の演説は、伊藤寛典氏および黒田安磨呂の二氏なりといふ。

黄檗東輪寺々々伝〔明治23年6月30日 第八号〕

当寺は元橋町にあり。後今の所に転寺せり。聊か其来歴を記さんに、当寺の橋町に在るや、即非如一禪師の法子大休和尚住職たり。師は学徳兼備禅氣透達の大徳たりし。其頃尾張の太守、和尚を深く帰依し、度々城内に請じ公案を取り坐禅三昧に余念なかりき、後には太守自から和尚の禅室に駕を枉ぐることに屢なりき。或日、師は高塀の破損しあるを修繕してありけるが、折しも太守の来訪に会し、師は持ちしところの金槌を落せり。太守自から拾ひ師に捧ぐ。師両足を出して之を受く。以て師が禅機の妙用活潑なるを知るに足る。夫より太守、益師を敬すること深く、昼夜を分たず参禅して夫のみに心を砕くことゝはなりぬ。師は之を見て心に太く思ふ旨のありければ、夜潜かに脱れて伊予の松山に行き一字を建立し、名を万歳山千秋寺と号す。是に就て、太守深く憤り、当寺を廃して放逐せり。師の法兄千杲和尚（支那僧）之を惜み、来て再建創立せんとし、寛文十二年五月を以て今の地に土工を始め、翌十三年六月再建成就せり。乃ち開宗隠元国師、第二の

法子即非如一禪師を推して当寺の開基とす。禪師自から筆を染めて、額面に第一関と大書し、山門に掲ぐ。今尚ほ存せり。（是の第一関の額面のことに就きて種々記すべき面白き話もあれど、今は略す）禪師は当寺に雲衲を集め、専ら宗風を振興せり。後禪師は、当寺を千杲和尚に付属し孤錫、日本全国を徘徊して四十余ヶ寺を建立し、普く布教に力を尽し、豊前小倉に至り。又一の大道場を建立し、第二黄檗広寿山福聚寺と名け、此所にて入寂せられたり。後元禄五年国命あつて、新に護国山東輪寺と名け、寺祿廿五石と寺中千八百坪とを永く寺領と為すべき由御証文を賜りて、御証文地と称ふ。（記者曰く、国命に依りて寺領を有する寺院数多ありと雖も御証文地と称へ、太守より御証文も賜りし寺院は僅かに八九ヶ寺に過ぎずとかや。記者当院々主に接し、右証文は一覽せり該全文を記載すべきも、行数に限りあれば省く）千杲和尚の法嗣江外和尚（長崎人）嗣で住職す。当寺は黄檗中本寺にして、開堂地と称ふる寺格なり。本尊は即非禪師来朝の時携帶せられし釈迦文殊普賢の三尊仏なり。又山門の前に大木あり。鬱蒼として翠碧天に映ず。是なん開基即非禪師手植の松と言ひ伝ふ。毎年旧盆十五日、大灯籠を此松に掲ぐることに古例にして、今尚ほ絶へず。是外載すべきこと頗る多けれど、長篇に渉るを恐れて掲げず。

演説〔明治23年7月7日 第九号〕

去る四日は矢場町法光寺に於きて、五日は伊勢山町善正寺に於き

て、何れも有志家の催しにて開会せらる。

立ち所に五十円〔明治23年7月7日 第九号〕

熱田前新田の愛知仏教会支部に於きて、去る二十九日仏教演説を開会せしに、出席の弁師は笠間大光院主、名和大鳳師及び水野蘭溪氏等にして、聴衆は凡そ六七百名もありしか、演説終りて更に有志者の懇請により、名和師に乞ふて貧民救助の義捐勧誘演説を催されしに、忽ち五十円の義捐ありしかは同村長鈴木兵四郎氏に托して實際を取調の上貧民を救助する事に一決せり。尚同村長は其際、名和師の出張を乞ひて一場の説教を致されたと乞はれたるよし。

伊藤家の訓言〔明治23年7月14日 第十号〕

当市茶屋町の伊藤治郎左衛門氏の豪家たる事は、本国は勿論遠く各地方に於きても誰知らぬ者なき程なるか、同家には久しき以前より諸悪莫作衆善奉行の偈文及び諸の飲食を受くること、当に薬を服するが如くすへし、好きに於ても悪しきに於ても増減を生ずる事勿れの遺経の文を大書して其台所に掲けらる。最も同家は、古来浄土宗の門徒なるも、諸国の雲水には多年來昼食の点心を施与さるゝ故、雲水輩は何れも同家に立寄り点心を乞ふの例なるより、右の掲文及び遺経を拝読して一層の感を与ふる由、雲水連中の評なるか。抑同家か能く数百年來一日の如く連綿として榮ふるも、実は祖先か訓戒の然らしむる所なるべく、尚ほ右の偈文等を

掲けらるゝに付きて、同家か家風は知るべきのみ。此等を以ても真に仏教の世益に関する大なるを知るへし。

愛知観音講の義捐〔明治23年7月21日 第十一号〕

同講中は、兼々慈善義捐の美挙を為し、大慈大悲の恩徳に報ひんとて何れも信心堅固の方々のみなるか、今回も別欄に掲げし如く金二十円を愛知仏教会に寄せて貧民救助に充てられたしとて義捐されしか、世には観世音菩薩を信心するに、或は病氣の平愈や縁組の難願を掛け大悲の心を悩ます心得違の者あるか。大悲を信する方々は何れも斯る善根ぞ願はしき者なる。

救老院の設立〔明治23年7月21日 第十一号〕

秋葉寺の前住職白鳥鼎三師外十数名が発起して、題号の如く本県下に於ける生活の道なき不幸の老民を救助せんとて、当市高岳町四十四番戸に本院を置き、本年五月以降経画中なりしと。其重なる人々は何れも当市の禅林にして、何れ盛大に赴く事ならんか。県下に取りての幸福にこそ。

各宗々議〔明治23年7月21日 第十一号〕

当市各宗派の取締方には、明廿二日を以て愛知仏教会本部に於きて会議を開かるゝよしなり。尚其会議は各宗々議に関する件なり。

真理会の演説〔明治23年7月21日 第十一号〕

広告欄内に掲げし如く、明廿二日当市富沢町聖徳寺に於きて、小栗栖香頂学師を招請して演説を開かるゝよし。

仏教の講義〔明治23年7月21日 第十二号〕

昨廿日より、左の日割を以て濃州西野徹元学師を招聘し、略述法相義を講述せらる。

来ル二十日ヨリ二日間 花車町 淨信寺
 同 廿二日ヨリ三日間 水主町 長円寺
 同 廿五日ヨリ三日間 小林町 楽運寺
 同 廿八日ヨリ三日間 大津町 光円寺
 同 卅一日ヨリ三日間 駿河町 光蓮寺
 八月三日ヨリ三日間 東袋町 聞安寺
 毎日午前正六時始リ

法中の集会〔明治23年7月21日 第十一号〕

当国本願寺派末の寺院中申し合せ、例月廿一日を以て一の集會を催し、布教に関する前途の方向等を談義せらるゝよしよるか、第一回として本日当枇杷島西源寺に開かれ、例会必ず一場の説教を為さるゝ筈なりと云ふ。

法篤会〔明治23年7月21日 第十一号〕

東西春日井郡の各寺院申合せの上僧俗を論せず。毎月三厘宛の積

金を為し、法話講義討論を為す。見出しの如き会を設立せんと尽力中なり。

貧民救助〔明治23年7月28日 第十二号〕

貧民救助を去る廿三日当市上前津町長松院に於て行はれしか、最寄の貧民一百名へ白米五合宛を施与せらる。尚其施主は海東郡神島村滝川源太郎氏にして、全く同寺住職水野道戒師か勧誘に応せられしものなりと云。何れも奇特にこそ。

西別院の貧民救助〔明治23年7月28日 第十二号〕

去る廿五日午前七時より、兼ねて広告の通り一千百八十人の貧民に施米せられしが、各々白米五合宛の割にして、何れも本堂に参詣せしめて布教係藤照山、高岡応順、広間隆円の諸師交々懇切なる教戒を致されければ、何れも感泣の余り仏恩の深きを喜びつゝ、唱名諸共に帰り行きしは、慈善家に取っても本望にあるらん。

唱道会の演説〔明治23年7月28日 第十二号〕

同会は創立一週年に相当するを以て、来る八月五日を期し、同会の本部たる伊勢山町の善正寺を式場に充て、演説会場を東橘町の橘座とし、午後二時より式場に於て紀念式を挙げ、次て仏教講話を為し終て、会員及び招待員に茶菓を饗し、午後七時より橘座に於て演説社を開き、翌六日は有志者の懇親会を開く筈なりとの事なるか、何れ其景況は、開会の上は本紙に掲載報道すへし。

七ツ寺寺伝〔明治23年7月28日 第十二号〕

当院は聖武天皇天平七年乙亥の秋、行基菩薩当國中島郡七ツ寺村にありて開基するところの道場にして、正覚院といへり。後六条院仁安二年丁亥尾張權守大中臣安長朝臣、重ねてこれを建つ。是より真言秘密の淨域となれり。中皇の祖榮芸上人の時、稲園山長福寺と号す。後陽成院の天正十九年辛卯、寺を春日井郡清洲に移し、同院の慶長十六年辛亥今の地に移す。東山院の元禄五年壬申八月、良快法印新に仏殿を建立し、全十四年五月、三重の宝塔を营造せり。此寺通名を七ツ寺と云ふは、往古七ツ寺村に在りしを以ての故なり。寺記に曰く、光仁天皇の御宇、河内權守紀是広といふ人なり。秋田城介に任ぜられ、奥羽の賊を鎮む。是広東国下向の時、其妻娘める事あり。任国の間に男子生れて光磨と名く。幾程もなく其母逝れり、光磨七歳の時、父是広を尋つ、独り東国に下り、当国父是広の里にいたり病に臥たり。里人其国を問ふ。兄のいはく、吾は河内の菅田の者なり、父は權守紀是広とて、出羽の国に在りと語り終つて死す。此日、是広任みちて帰路、萱津の里に來り、是を聞きても始めは信ぜず、兄の懷中に在る薬師仏の像を見て、実に吾子なる事と知れり。涕泣して正覚院に詣て、智光上人に逢ふて曰く、我子我を尋ねて路に死す。恨むらくは生前に其素意を果さざる事を、豈仏力を以て、片時蘇息することなからんやとて、悲歎限りなかりけり。上人之を憐み玉ひ、乃ち寺院の東にある林中に壇を封じ、地を清め薬師如来を壇上に安んじ、却死返魂香といへる名香を焚き、医王密法を修し祈念し玉ひ

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（二）

しかば、香煙児の面を掩ふ時、忽眼を開き、言語生ける時の如し。是広歎喜して父子の情を語るに尽きず。既にして、また息絶ぬ時に見聞するもの皆嘆敬せずといふことなし。昔日其地を呼んで反魂香壇といふ。父子生前に遇ふこと能はず。夫に依つてあはての森といふ（阿波手之森の記中、其名称の由来を記せしが、今は是伝と一説なり。何れが信か識者の叱正を待つ）。是広愛慕の情に堪へず。泣く／＼児の死体を葬り、正覚院を再創し七字の仏閣を建立す。蓋し、七歳の亡児が追福の爲なるが故に、七区の精舎を営しとかや。是も又今七ツ寺と称ふる所以ならん。是時桓武天皇延暦六年なり。かくて仁和三年七月の水難、天慶四年の兵火等にて堂宇衰廢せしを大中臣安長再建せり。其後、清洲の住人鬼頭孫左衛門、天正十九年豊臣家の命によりて、寺を清洲に移し後、慶長十六年、沙門良円法師今の所へ移せしなり。因に記す。三層の宝塔は、国君良快法印に命じて造立し玉ひし名塔にして、京都の仏師運長を召し、五智如来と八大菩薩の像を彫らしめ塔中に安置す。享保年中、此塔の九輪かたふく事ありしに折ふし、長崎より麒麟太夫といへる輕業師、当地に來たりしが、此事を聞き、我是を直さんとして其俣担端に一本の竹をよせ、それをつたひて忽ち頂上に登り、好みのまゝに直したるよし。古老の口碑に残れり。

仏教大演説会〔明治23年7月28日 第十二号〕

来る八月五日午後二時、本部に於て本会創立 仏教大演説会を開一年紀年式を挙行し、午後七時橘座に於きて

六日有志懇親会を催す。

本部名古屋伊勢山町 唱道義会
善正寺内

大光院の大般若説教〔明治23年7月28日 第十二号〕

来る八月五日正午より、コレヲ病予防祈祷大般若説教を執行し、御守及び予防法書参詣へ施し候也

名古屋市門前町 大光院 世話方

唱導義会一週年大演説〔明治23年8月4日 第十三号〕

明五日午後七時より、当市橘座に於きて開会せらるゝ唱導義会一週年大演説の弁士及び演題は左の如しと云。仏教愛国論小杉陶蔵氏、輪廻説中村甄宗、日本と仏教萩倉耕造、檀那の説高橋仙定、仏教の前途劉潮破邪、近藤疎賢等の諸氏なるよし。尚ほ弊社の中村元亮等へも出場を乞はれしかども、都合にて断はり祝詞を贈れり。何れ社員は参会すれば、其景況は次号に譲る。

大光院の法要〔明治23年8月4日 第十三号〕

明五日、当市門前町大光院に於きて法要を営まれ説教及び虎列刺予防の書き物を施与さるゝよし。

曹洞宗専門校と真言宗の中学林〔明治23年8月4日 第十三号〕

当市万松寺内の同専門学校は去月中に、又長久寺内に設立しある

同中学林は、来る十日までに何れも試験を終へて夏期休業を行はるゝが、真言宗新義派の方に於きては、過般学則の改正等ありしを以て、次期の開業より尚一層普通学科を奨励せんとて、当局者は目下協議中のよしなりと云ふ。

育英学校〔明治23年8月4日 第十三号〕

同校は、兼ねて有名なる熱心家永安寺住職織田宝山師及び其他の諸師が計画により、追々隆盛に赴むき、尚一個の教場を此の暑気休業中に新築し、女子部を設けて次期より授業せんと目下工作築造中なり。

愛知救老院義捐金募集広告〔明治23年8月4日 第十三号〕

這回白鳥鼎三外数名發起トナリ、当県下ニ於テ生活ニ迷フ六十以上ノ老人ヲ、本院ニ於テ救養ナサント欲ス。慈善家諸君、希ハスノ挙ヲ贊助シ応分ノ投寄アランコトヲ懇願ス。尤モ右義捐者ノ尊名並ニ金員ハ其都度新聞紙上ニ登載可致候

名古屋市高岳町四十四番戸

明治廿三 愛知救老院事務所 追テ本院規則書御入用ノ諸君ハ、郵便年七月、愛知救老院事務所 券一錢投セラルレハ速ニ発送可致候

仏教大演説会〔明治23年8月4日 第十三号〕

来る八月五日午後二時、本部に於て本会創立一年紀年式を挙行し、午後七時橘座に於きて、仏教大演説会を開き、翌六日有志懇親会を催す。

本部名古屋伊勢山町 唱道義会
善正寺内

大光院大般若説教〔明治23年8月4日 第十三号〕

来る八月五日正午よりコレヲ病予防祈祷大般若説教を執行し、御守及び予防法書参詣へ施し候也

名古屋市門前町

大光院 世話方

史伝〔明治23年8月11日 第十四号〕

左の図は、日比白圭氏が画にして平手政秀、織田信長を諫言する図なり。白圭氏は元日置の産間瀬伝蔵氏が二男なり。幼にして画を好み、森高雅、渡辺清等に從ひ土佐派を学ぶ。曾て朝廷の御用品を蒙り賞詞を受く。氏が孝道の厚き一枚の画成れば、必ず之れを亡親の靈前に供し、其恩徳を謝すと謂ふ。

政秀寺々伝并に平手政秀諫死の事

当寺は、人皇百六代 後奈良天皇、天文廿二年癸丑閏正月十三日、織田信長の家臣平手中書侍郎政秀、主君信長を諫むれども信長用いず。終に自殺す。信長愁歎措く能はず、政秀菩提のため一字を小牧山の南小木村に建て、沢彦和尚（勅諡円通無礙禪師）を請じて開基とす。後三十二年を経て兵火の爲め、其寺烏有に属す。時に天正十二年なり。翌十三年寺を清洲に再建す。同十三年禪師入寂世寿八十二歳。第二世を雪巖宗赫禪師と云ふ。文禄四年八月、豊太閣より寺領二百五十九石を賜ふべき旨御朱印あり。後慶長六年薩摩守忠吉公より改め、中島郡下津村に於て百石領すべき御朱印を賜ふ。同十三年雪巖禪師寂を清洲に示す。世寿七十四歳なり。三世挽山和尚入寺、慶長十五年庚戌寺を那古屋府（今の

所）に移す。後十七年程経て、国守義直公より瑞雲山の号を賜ふ。夫より今に至るまで法脈断ぜず。是を当寺の略伝とす。

葛原親王の嫡孫平相国太政入道清盛、廿一代の華胄織田備後守の家臣平手中務太輔清秀と云へるは、当国志賀村の人にして備後守の嫡子吉法師丸乳母の人なり。備後守新たに城を古渡に築き居を移し、玆に吉法師丸の元服の式を挙げ三郎と改む。清秀も名を改めて政秀とす。此日、備後守申さるゝようは三郎も名乗を撰むべしとあつて、政秀を沢彦禪師の庵に遣して名乗、及び反切をも撰ましむ。天文十五年正月十八日、禪師信長の二字反え、桑と云ふを書付て進上に及ばる。備後守是を見て申さるゝは、桑は蚕の爲めに食はるゝもの敵に領地を侵さるゝを蚕食とも云ふ。武家にては忌むべき文字なればいかゞあらんと云はれければ、禪師申さるゝは日本を扶桑国とも申候、三郎殿武勇を振はれ、日本を治め給ふ事有る可し。又函谷関と云ふ所にて、白石篆文の得桑の字解者も桑の字を分てば、四十八にして四十八世正符在位之數と申候。是れは帝王の位に在せ玉ふこと四十八年たるべしとの瑞兆なり。備後守曰く、四十八年は短少の數なり。如何と禪師答へて申さるゝは、人の一代は廿年宛は考へ申候、父の四十歳の頃、家を其子に譲り玉ふこと本分なり。彼是以て上吉なりと申されければ、備後守も御感斜ならず、信長と名づけて御判初をも首尾克く終へにけり。

因に記す。備後守信長の難問も空しからず。信長四十八歳を過して程なく飼子にひとしき光秀が爲めに事ありしは、寔に奇代

の先兆なり。

信長卿十六歳の時、父備後守に晩れ給ひてより、行跡我意にして先考へも不孝の行ひ増長しければ、政秀寝食をも忘れ、至諫を尽せども、更に用ゆる事なく愈我謾日夜に増すばかりなれば、政秀一日御前に出で、色を正して申すよう我君御先祖御先考へ不孝に候こと偏に五常と云ふを知しめされざるによる。古人の語にも孝子は亡に事ふること任に事ふるが如くせよと申し候に、弥々御嫌随に我意を張り、仁義五常を忘れ玉ふにおいては、武家の冥加も尽き候はん。一度国を治め給ふを見奉つれば、政秀が喜びは何に譬へん。又夫のみを楽みとして、乱哺の御時より守立候へども、我俥気俥の御行跡日夜に増長し悪敷ならせ玉ふこと頼母敷げなし。君御心を改めて君臣不和に成らざる様、特と御賢慮を仰ぐのみと涙と共に諫むれば、居並ぶ諸氏も諸共に涙に袖を湿しけり。信長卿も黙然としてありければ、政秀は言葉を續き、君に向つて不敬の諫め其罪大なり。誠に恐入り奉つる。但た御改心こそ願ひけれ、是れ君を思ひ、国を思ふの赤心のみとて、其日は御前を退きたり。

夫より政秀は、他所ながら信長卿の行跡如何と心をこめて伺ふも、信長卿益々我意我慢の振舞のみなれば、斯くては諫言も水の泡なれば、諫書を捧げ自害して我君に見せ候は、御心を改め玉ふこともやあらんと思ひ定め、諫書五章を捧げ、己が領地なる志賀村に引籠り、天文廿二年丑閏正月十三日の暁、孤灯の下に筆紙を執り信長公の御行跡弥々我意に成せ給へは、数度の諫言返て耳に

逆ふまてに候。所詮自害して見せ申さば、御心をも直し玉はんと存知候。後世の事頼み入り候と涕ながらに書き終る筆の命毛諸共に、我玉の緒も切れななんと思ひかへせば、何となく流石に猛き武士も千々に心を砕きけり。斯ては果てじと氣をはげまし、家臣山内久内と云へるを密に呼び、汝今より沢彦禅師の庵に到り、此の一書を禅師へ参らすべしと。久内委細了承仕りぬとて出て行きぬ。政秀今は心安しと床木に腰打掛け、短刀を右に取直し、脇指し切つて我君を喚び来れ。信長公へ我か最期の趣き上申せよと高声に呼びければ、家内の者共驚きながら信長卿へ注進に及びければ、信長卿は汗馬に鞭打ち駈付け玉ひ、脇指に取付き其方は何として斯く最期を遂げしやと問ひ玉へは、政秀床木より下り御手を引寄せ、密に何事かを暫らく言上に及びければ、信長卿も是より万事其方が異見次第なり。此上は養生大事ぞとて涙にむせひ玉ひけり。政秀は今御耳に達し候事、御忘れなき上は政秀は世に望みなし。是御覽候へと云ふ俥に、十文字に掻切て伏たりける信長卿は、死骸を抱き愁歎限りなく古今君の為に死するもの多しと雖も、政秀の如きものはあらじとて悲み歎き玉ひける。斯くて信長卿は、沢彦禅師を請じて葬儀の引導を頼み玉ひしかは、禅師平手が館に赴き道号功菴、諱を宗忠と付られ、下炬の頌に曰く

忠肝義膽太稀奇。横□鄧矣忘処知。未後牢関鉄炉歩。一拳々倒

五須弥 喝

夫より那古屋信長卿御帰城あつて、禅師へ使者を以て申さるゝは、政秀が追福の爲め一字の寺院を建立したし、其寺号を平手が

名乗を以てせんと存ず。如何にやと禪師答へて曰く、政秀の二字作り字と申して古事もなく候へども、貴命に応し候も即ち平手氏の追福ならんと申上られければ、早速新寺を建立して政秀寺と号す。余は前きの寺伝に譲る。尚ほ沢彦禪師岐阜の名称を捧ぐるこゝと、国印調製のこと、狩野古法眼百菊の屏風の事等あれど、政秀諫死の条には関係少なきを以て記さず。

仏教会の貧民救助〔明治23年8月11日 第十四号〕

昨十日、貧民救助の第三回を同会の本部に於きて施行せしか、午前七時より貧民を同町の大光院の転愚堂（元僧堂）に集め、同院主等間龍跳師及び真言宗各務恵実師、懇ろなる説教を聴聞させ終て施米券を与へて本部なる極楽寺に於て、一人に付き五合宛の白米を施与せり。其人員は一千四百名にして、何れも随喜歡喜して恩徳を謝して帰宅せり。

長松院の入仏供養〔明治23年8月11日 第十四号〕

当市上前津町長松院に於て、明後十三日虚空蔵菩薩の入仏供養を営むよし。

鳴海の仏教青年会〔明治23年8月11日 第十四号〕

同町瑞泉寺に於きて、浅井蜜成氏外数名が發起となり、題号の如き会を設けて仏教の真理を基礎とし、真正なる知識完全なる道徳を養成發達する事、及び各自の親睦を謀り交誼を厚ふする事、及

ひ仏教の真理を拡張し弊風惡習を矯正する等の目的を以て組織せられ、毎月一回演説を開き、講義法話を筆記、若しくは小冊子にして会員に頒つ等にて、何人と雖も入会を諾さるゝよしなりと云ふが、我徒仏教者の為めに賀すべく喜ぶべき事にぞある。

唱道義会の演説〔明治23年8月11日 第十四号〕

去る五日午後、当市橘町橘座に於きて開きし同会一週年紀之演説会は、第一席高橋仙定氏、第二席中村軔宗氏、第三席萩倉耕造氏、第四席小杉陶造氏、第六席近藤疎賢氏にして、聴衆は定尅前より会場に押掛け、既に開会せらるゝや満場立錫の地なく、殆二千余名の聴衆にして未曾有の盛会なりし。

奇特〔明治23年8月11日 第十四号〕

当育兒院に於て養育中なる育兒中根小まつ、近藤義夫の両兒は、先頃より病氣に罹り衰弱せしを以て、北折源六氏が自費を以て牛乳を与へられしを、宮出町善昌寺住職織田高倫氏が見聞して金二十銭を補助せられしが、尚本月も三十銭を補はれしのみならず、種々尽力の末、日々育兒六名へ一百日間日々五合宛を富沢町十二番戸丹羽梅次郎、袋町二百九十五番戸丹羽鈴三郎の両氏より寄せらるゝ事となりしが、目下九名の育兒は日々其沐にあづかりて、何れも暑中健全に暮し居るよし。其牛乳は五斗にして、代金に直せば十五円なりと云。

仏事〔明治23年8月11日 第十四号〕

来る十四日午後一時より、宮出町永安寺に於て大般若の転読、引続き心経の講義を開かれ、亦廿一日には大施餓鬼及び仏教演説を開かるゝよし。

同窓懇親会〔明治23年8月11日 第十四号〕

去る九日、元愛知師範学校同窓諸子相謀り、亡友の霊を当市矢場の政秀寺に祀り、一大法要を開き畢つて、前津の香雪軒に於て親睦の宴を開き旧誼を温ためられしよし。其幹旋者は味岡正義、田中有文、鈴木訥、小川政徳、大田寛の諸氏なりしと。

愛知救老院義捐金募集広告〔明治23年8月11日 第十四号〕

這回白鳥鼎三外数名発起トナリ、当県下ニ於テ生活ニ迷フ六十以上ノ老人ヲ本院ニ於テ救養ナサント欲ス。慈善家諸君、希ハスノ挙ヲ贊助シ、応分ノ投寄アラシコトヲ懇願ス。尤モ右義捐者ノ尊名並ニ金員ハ、其都度新聞紙上ニ登載可致候

名古屋市高岳町四十四番戸

明治廿三 追テ本院規則書御入用ノ諸君ハ、郵年七月、愛知救老院事務所 券一銭投セラルレハ速ニ発送可致候

久屋町誓願寺の演説〔明治23年8月18日 第十五号〕

一昨十六日はメソジスト教の演説ありて、有害有毒なる教を布かんとするを慨嘆せし法園会員は、同夜同寺に於て一大演説を開かれしか、聴衆は孰れも時尅前に押しかけて、開会の節は既に満場立錫の地なきまでにて、孰れも静肅に聴聞され、拍手喝采の間に

演説を終られしは午後十一時頃なりければ、彼のメソジストの帰途に参聴せられし方も多くして、近來になき盛会なりしが、弁士は近藤疎賢、伊藤寛典、中村軔宗、高橋仙定等の数氏にして、特に感ずべきは菊五郎煎餅の主人より弁師及び会員等へ氷を寄付して労を慰せらるゝ等、又会場には数百の紅灯及び大小の提灯を掲け、一見してメソジスト譬喰へ、仏教万歳と唱へしめしは愉快も亦快なりけるか。本社よりは能仁新報教部を進呈せり。

曹洞宗専門支校〔明治23年8月18日 第十五号〕

曹洞宗専門支校は、從來萎靡として振はざる事は普く世人の知る処にして、殆んど有名無実に帰せんとするを慨歎し、昨年以来學則校規を改正し、生徒室其他の必用なる建築を為し、第一年級の如きは普通の高等科の簡易なるものにして、二年三年は稍学科の程度を高くし、過ぐる三月より普通科の教師を聘し、授業を改良せしより僅々五六ヶ月間に一新面目を改めたるは、全く当路者の賜なりとて、学生一同は喜び居るよし。尚ほ去月二十九日より本月十日までに試験を終へ、昨今は休業中なりしが、尚ほ聞く所によれば、当秋より中学林をも設置して大に學風を振起せんと頻りに尽力奔走中なりと云へば、果して当地に完全したる一の曹洞宗學林を見るも遠きに非ざるへし。

四恩会〔明治23年8月25日 第十六号〕

一昨年九月より当市中下海福寺に設立されし同会は、兼ねて仏教

信者の設立にかゝる者なるが、本年三月より会員一同申合せ、毎月十日に同寺に会合し演説及び説教を開く上、尚ほ貧民救助の爲めにとて五名の救助掛りを設け、初めは二〇名の發起人なりしか、昨今は七十四人の講員となり、亦一時義捐者三十名に相成りて月々貧民を救助し、尚ほ仏教の拡張に尽力せらるゝが、同会の事に關しては本紙に記載すべき約を爲せしにより、逐々と掲げて読者に告げん。

大谷派当別院の法要 (明治23年8月25日 第十六号)

曾て執行あるべき前々住上人の法要は当春、陛下の御幸が爲め、遂に延引されしが愈々来る十月廿日頃より執行あるべき予定なり。

演説 (明治23年8月25日 第十六号)

本日午後一時より門前町西別院に於て仏教演説を開会せらる。其弁士は本多淨嚴、高岡応順、広間隆円、大田幹の諸氏なりと云。

慈心会 (明治23年8月25日 第十六号)

去る十九日、当市白川町光明寺に於て発会式を挙行せし愛知青年慈心会は、初めに貧困者の祖先代々の大施餓鬼を施行せしに、其導師には深見志運律師自から務められ、且つ若干の金を寄付せらる。当日は本社より寄付せし能仁新報をも参拝人へ分与されしが、午後二時頃より村瀬古俊、中村頼宗、高岡徹宗、所叔子の演

説もあり。深見師の説教もありて、何れも静肅に聴聞せり。尚ほ同会は名を慈善会と改め、以来は仏教の講義をも爲して、互に研究せんと準備中なり。

法類なれば馬鹿でも宜ひ (明治23年8月25日 第十六号)

当市内浄土宗鎮西派某寺外数ヶ寺が安普老師の徒弟続きを一法類と爲し、寺院相統は其徒弟中を以てし順に法兄弟法孫弟と及ぼす筈にして、切角寺院に於て徒弟を教育し、後住に適當なる人物を出さんとするも何分右の如き規約ある以上は、ドノ寺の馬鹿者が来て後住となるも斗るへからずとて、己が徒弟の教育を怠るは自然の理なりとて、該寺に關係ある某氏が嘆息の余り物語られしが、固より法類相統の必要もあるべけれど、斯かる嚴重にして犯すべからざる一種の規約ありとせば、大に徒弟の教育上に関する事もあるべけば、是非とも斯かる規約は今日の時勢に於て廃せられたきものにぞある。尚ほ此の事に關しては聞き込みたる事もあれば、飽迄扶宗護法の爲めに公然掲げて以て是非を公衆に訴ふる事あるべし。

法宝物虫干 (明治23年8月25日 第十六号)

当市に有名な真宗養念寺は、大谷派の古梵刹なることは尾張名所図絵に顯著なるが、実に堂宇の結構と林泉の佳致なると、殊に烏ヶ池の古跡ありて松杉森鬱風韻雅趣極て清艶觀望美なりと、殊に該寺は旧藩主の御黒印地にして、藩主代々の寄付物、古器物等

も数多あれば、来九月八日の旧孟蘭盆会には、例年の如く其什宝の虫干を為し、参詣の信徒に縦覧令る由なれば定し早朝より群集するならんと。

大閤山常泉寺々伝〔明治23年9月1日 第十七号〕

左に掲げしは尾張国愛知郡中村大閤山常泉寺の真景にして、画は生駒石溪氏の筆なり。氏は加賀国江沼郡生駒矩方氏の次男、名は筍、別号竹亭、又は掃雲軒と号す。幼にして画を好み加州藩竹内吟秋翁の門に入り、南北派を学び十七歳にして諸国を漫遊し、名古屋に來りて奥村石蘭氏に就き感ずる所あり。旧派を改めて四条派を學ひ、既に數回共進會等に賞与を得られしと云。

尚左の寺伝は同寺の略縁起なり。故に説の信偽を知らずと雖も、抑も大閤の如きは世人既に其人たりを知る故に、今誕生地の真図を掲げて以て、読者の一覽に供するに止まり、敢て編者の記述を掲げず。

大閤山常泉寺々伝

抑当山創建の濫觴を尋に、境内は豊臣大閤秀吉公誕生の遺蹟にして、則公の誕生は人皇百六代後奈良院御宇天文五年丙申正月元旦に生給ふ。御母公は天瑞院殿^{後從一位号、大政所殿}、持明院前中納言藤原保道卿の女なり。保道卿朝廷に仕て私なき所、上（後柏原天皇）殊に重遇し給ふ。然に永正十年秋、天瑞院殿二歳の御時、或人の讒によりて尾張國中村に謫居し給て後年亦赦免有、皇邦に還り旧官に復し給ふ。天瑞院殿成長して容貌艷麗に在せば、詔ありて内裏に

仕奉り、上（後奈良天皇）是を愛幸在し、終に重き身となり給ひしか、上を恐れ病氣と称し、吾家に下り一女を産給ふ。是を密に尾張國中村の郷木下弥右衛門昌吉か家に預け養育ありけるか、主上（後奈良天皇）重て又詔あり。再内裏に入御寵遇一方ならず。寿或夜の夢に、太陽懷に入と見て妊娠ありけるに、宮中の妃これを妬み、己に害せんとす。天瑞院殿是を恐て、又尾張國に走り、木下昌吉か家に寄居す。終に天文丙申正月元旦に一男子誕生す。是則大閤秀吉公にして幼名日吉丸と申奉なり。母公は二子を養育し中村寓居ありけるか、姉君は（後瑞龍院殿号村雲御所開山也）成長の後、三好武藏守に嫁し三男子を産、嫡子秀次（号孫七郎、次第昇進後に大閤の養子と成爲関白内大臣叙正二位）、次男（号丹羽少将）、三男（大納言秀俊養子）、爰に又母公は日吉丸未幼年在しければ、親族媒して木下弥右衛門昌吉に婚し、亦一男（幼名小竹、後小号美濃守大和大納言秀長是ナリ）、二女を生、昌吉は始め織田家に仕致して後難髪す。法名筑阿弥と号す。昌吉か父を吉高と云。吉高父国吉と云。国吉幼して叡山に登、出家して昌盛法師と号す。後故ありて還俗し、尾州中村に住居す。是大閤中村誕生の権輿也。秀吉公干爰人となり、永祿元年の頃、始めて織田信長公に仕て忠誠を尽し、朝日の昇るか如く歳々月々に軍功を顕し、終に一天下を掌握し遠く朝鮮迄を征伐し、忝も一天万來の御公の補佐と成り給ふ次第に官位昇進し、既に天正十四戊十二月十九日に叙^三從一位^二為^一関白^三任^二太政大臣^一給ひ、慶長三年戊八月十八日、春秋六十三歳にて伏見の城に於て薨去し、翌年人皇百七代

正親町院、慶長四亥四月十八日 勅賜贈正一位豊国大明神と諡ありけるこそ誠に類ひ希なる輝運也。玆に太閤秀吉公、先年小田原征伐凱陣の時、当所に立寄給ひて御一宿あり。小早川隆景、加藤清正を被召、此中村は我出生の地なれば一村地子を用捨あるへし。殊更、屋浦の旧地を糞土に穢し候事本意なく、宜く淨利建立ありたし見れば、我十一歳の時植置し、終大に繁茂せり。世の諺に拘骨樹は鬼神も恐るゝと申せは、大に吉兆の樹なり。大切に致へし迎、手づから竹を立添ひひけり。其終今猶庭中に存せり。時に從四位下侍從加藤主計兼肥後守藤原清正は索より、仏法帰依の名士なれば心に難有。是を領掌し則円住院日誦上人（清正之一族也）と謀て始めて創建せらるゝ所の道場也。神体は豊臣太閤の肖像（束帶唐冠長二尺余）、木食興山上人の彫刻なり。始め浪華の大城に有しを、清正右大臣秀頼公に請奉て此地に鎮座し奉る正殿拝殿及び廊門魏々玲瓏として、実に東海の壯觀なり。又正殿の側に一字を宮、廟堂の別当とし、萱津妙勝寺十三世日進上人に談し、秀吉公の宅跡たるを以山を太閤山と号。境内の古井は同公産湯の瑞水にして、近郷無類の清泉なれば、常泉を以て寺号とし、長正山の末派に属す。嗚呼天なる哉。爰に元和元卯夏、廟堂回録に罹り殿宇尽く灰塵となる。別当日深上人（日誦上人弟子当山二世）遽て正殿に駆入り、神像を負出恙なき事を得たり。其後日深上人仮に一草堂を旧跡に再建シ、先ツ神像を安置する耳。誠に惜へきの甚敷や。

東輪寺の施餓鬼〔明治23年9月1日 第十七号〕

一昨世日は例年の通り、当市下茶屋町東輪寺に於て大施餓鬼及び大灯笼を点せられしか、折悪敷雨天にて参詣人も意外に少なかりしか、昨日は新出来町の五百羅漢にて、同様例年の如く大施餓鬼を施行せられぬ。

育兒院〔明治23年9月1日 第十七号〕

育兒院へ当市本重町養牛社より五十七錢五厘即納。又熱田大字伝馬町正覚寺前住職六万隆見氏は去る十九年、同院設立の際にも特別に尽力されしが、当今は徒弟二名を従へ、日々名古屋及び熱田地方を托鉢し、其金を直ちに同院に寄付せらるゝよし。奇特の僧侶と謂ふべきなり。

雲衲接待〔明治23年9月1日 第十七号〕

当市上前津町曹洞宗長松院檀頭にて同町の小原清吉氏と云へるは、同院住職水野道戒氏か常に多くの雲衲を接して、家風綿密に弁道せらるゝを深く随喜し、自宅において春秋夏間に当地を往來する洞濟雲衲衆の投宿点心とも供養せんとの大願心を起し、兩三年前より実地挙行し居らるれど、未だ之れを知らざる雲衲衆も有るべければ、寺院方は申に及ばず、僧徒親籍のかた／＼よ、広く江湖の雲兄水弟に報知し玉へ。但し食事は小原氏の宅にて供養し、宿泊は長松院に赴くなりと申越されぬ。

真徳講の組織成る〔明治23年9月1日 第十七号〕

過日の本紙を以て読者諸君に報道せし如く、其筋に出願中なりし真徳講は、二三日以前を以て遂に許可になれり。若し此の講の規則及主意等を知らむと欲せば、当市小林町楽運寺に行て尋ねらるべし。勿論有志の人々は誰にても入講を許すとの事なり。

徳源寺和尚〔明治23年9月1日 第十七号〕

皆人の知らるゝ、当市新出来町徳源寺の和尚は、西京八幡円光寺の住職伽山大禅師の徒弟なるが、大禅師は故蘇山師の会下にして悟道に有名の禅師にして、今日までに理趣分三万余、金剛經三万余を真読され、尚ほ大般若の真読に掛り居らるゝ趣きにて、去る頃同師より当市の仏教会員某氏へ真読祈祷の靈符数葉を送られたるよし。

宝物虫干〔明治23年9月1日 第十七号〕

例年旧暦の七月廿四日より当市菅原町興善寺に於て、見真大師御作の聖徳太子の靈像を始め種々の法宝物を虫干し、有縁の衆生に拝覧を許す例規なるが、本年も亦例年通り執行せらるゝよしにて、同寺は本願寺派の由緒寺にして、古城主の御墨付其他種々の靈宝最も多し。

西野徹元師〔明治23年9月1日 第十七号〕

西野徹元師は久く当地所々に略述法相義の講義を開かれしに、先

般来一時休講せしが、本日より再び前講を引き続き、当市菅原町珉光院に於て開講せらる。因に記す。同師は大谷派の学師にして学識富饒なれば、弊社より参聴に出る者もありて、能く義理精確なりとの事なれば、午前暫時の暇を愉みて参聴せられなば、其鴻益も甚だ多かるべし。

三宅直温氏〔明治23年9月1日 第十七号〕

過日辞職せられし当市下茶屋町大谷派普通学校監事兼教頭三宅直温氏は、今回滋賀県尋常中学校々長（月俸六十円）に拜命せらる。

有志会〔明治23年9月8日 第十八号〕

来る十三、十四五の三日間、当市役所議事堂に於て曹洞宗有志会員の全国大会を開くに付、同会の重立たる人々には続々出席を通知せりと。又右三日間は、昼間は会議にして、午後六時よりは末広町末広座に於て、仏教大演説を為すと云ふが、其弁士は六十余名なりと聞く。

大施餓鬼〔明治23年9月8日 第十八号〕

今八日は旧于蘭盆会に付、各寺院に大施餓鬼等ある中にも、県下に有名なる当市矢場の地藏尊は延日なるを以て一大施餓鬼を営なみ笠鉾祭り等もある事なれば、例年の如く参詣人群集するならんと。第一第二警察署等にも夫々注意せらる。

大演説〔明治23年9月8日 第十八号〕

一昨六日夜、当市大須宝生座に開きたる曹洞宗務局処主に付、大紛疑仏教演説会は満場立錐の余地なく、第二席弁士演説中、園井町の出火の信号鐘の聞こゆるや場中騒擾し過半退場したるも廿分内外に又前同様満場の聴衆に帰し、弁士は何れも熱心に演述したり。聴衆中一人の或る僧侶が反対の言を発するや、弁士は証拠を挙げて陳弁したれば、満場大喝采にて反対僧は青菜に塩然として引込たり。同夜の出席弁士は近藤疎賢、中村軫宗、村瀬古俊（静岡県人）、所叔子の四氏なり。会主は高岡徹宗氏にてありき。開散せしは午後第十一時なりと云ふ。

四恩会〔明治23年9月8日 第十八号〕

当市明道町の同会には、明後十日、同町宝周寺に於て演説を開かるゝが、尚ほ同町の慈善青年有志者には、兼ねて堀川以西の貧民を救助する為め、其事務を四恩会に依托し、毎月十日を期し救助されしが、右は本年一月より明年一月までの期限なるが、尚ほ世況に依りては継続せらるゝよし。

仏教演説〔明治23年9月8日 第十八号〕

去る五日、当市伊勢山町善正寺に於て唱道義会定期演説を開会されしに、太田幹氏（思想）、広間隆円氏（智徳并行論）にて何れも雄弁を以て演ぜられし由。

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（二）

大光院での講義〔明治23年9月8日 第十八号〕

本月十六日午後六時ヨリ、本院ニ於テ羽翼原人論ノ講義ヲ開筵ス。有志ノ君ハ男女ヲ論セズ来テ聴聞アレ。講師ハ本院住職笠間師ナリ。

名古屋門前町 大光院

正誤〔明治23年9月15日 第十九号〕

前号の紙上に、当市明進町四恩会は新道町海福寺の四恩会、尚ほ同町宝周寺とあるも新道町の誤りに付き訂正。

愛知仏教会記事（九月十日例会決議）〔明治23年9月15日 第十九号〕

去る十日は、定規の例会なるを以て役員一同の集会を為し、既に本紙の前号に掲げし当市内各仏教団体連合懇話会の第一着手として仏教会は其周旋を為す筈なりしが、愈々一同の協議を経て本日を以て同本部に於て茶話会を開く事に決定せしを以て、各団体に向つて開会の旨を通知せり。

来る廿五日の例会日を以て、奨励委員一同へ会員募集依頼方の示談を為す事に決定せり。

会則に由り会員死亡者の法要を営むべき筈なるも、今に其運ひに至らざりしが、来月を期し一大演説会を開き、其前日を以て会員中の死亡者の為め法要を営む事に決定せり。

常置理事一名欠員に付き撰挙せしところ、真言宗各務恵実氏当撰

す。

仏教講義場を当市中市場町二丁目中村嘉兵衛氏方に開く事に決定し、至急開講すべき取斗いを為せり。

東輪寺の大灯籠〔明治23年9月15日 第十九号〕

同寺の寺伝は本紙の第八号に記載せしが、今同寺に於て毎年点する所の大灯籠の由来を記るさば、享和の頃、尾州公枋方役所より一張の大灯籠を寄付されしを以て始めとす。尚例年之れが点火用の大蠟燭は、仏教会奨励委員たる当市下長者町服部卯助氏が寄付せらるゝよしにて、尚ほ施餓鬼の朱塗壇は天保十二年国君より寄付せられしものにして、其美麗なる事は皆人の知る所なるが、曾て記したる寺伝に漏れたるを補ふまでに斯くは記るしぬ。

甘蔗普薫師〔明治23年9月15日 第十九号〕

有名なる真宗本派の教師たる同師には、年々巡回の節必ず当市に立寄らるゝを以て、信徒は何れも指を屈して待ち居るが、本年も巡回中、来月四日頃、当地着の上、菅原町浄教寺に於て説教を開かるゝよしなるが、何れ例年の通り聴衆も群集するならん。

続々投書来る〔明治23年9月15日 第十九号〕

当市内の寺院中、往々僧侶にあるまじき振舞ある人々の名を指摘し、其の不都合を責めらるゝ投書が続々ありますから、掲げて以て筆誅を加へられぬ先き何卒御注意あらん事を願升。

仏教演説〔明治23年9月15日 第十九号〕

去る八日、県下海東郡前田村円盛寺に於て、今度護法会なる者を設置され、其発会式として当市法雨協会理事本多善明、村瀬古俊、中村瓢宗の三氏を請し演説会開会されしに、聴衆は満堂立錫の余地なく、同地に於ては古今未曾有の盛会なりぬ。又た去る十一日夜、当市笑福座に於て四恩会の大演説を開きしに、出席弁士は近藤疎賢、村瀬古俊、伊藤寛典の三氏にして得意の雄弁を以て演ぜられしに、満堂の聴衆は拍手喝采の声交々起り、発起員は皆な満足の面持なりし由。又々本十五日夜、大曾根町顕正会に於て演説を開会さる由。出席弁士は村瀬古俊、本多善明、伊藤寛典の三師と外に数名の弁士も有る由。之れ又定めて盛会ならん。

大光院での講義〔明治23年9月15日 第十九号〕

本月十六日午後六時ヨリ、本院ニ於テ羽翼原人論ノ講義ヲ開筵ス。有志ノ君ハ男女ヲ論セズ来テ聴聞アレ。講師ハ本院住職笠間師ナリ。

名古屋市門前町

大光院執事

愛知仏教会講義〔明治23年9月22日 第二十号〕

門前町大光院内転愚堂に於いて、毎月十五日、廿七日午後第七時より

羽翼原人論

講師 笠間龍跳師

仏教演説並に説教〔明治23年9月22日 第二十号〕

有名なる島地黙雷師の義兄本派巡教師香川黙識師は、今回東京布教に出張の途路、当市門前町西別院へ来たられ、来る廿六日より三日間、説教並に演説を為さるゝ由。

開扉〔明治23年9月22日 第二十号〕

昨廿一日より六日間、当市五条橋西慶栄寺に於て、常陸国廿四輩地願船寺伝来の宝法物を開扉せらる。

布薩法要に説教〔明治23年9月22日 第二十号〕

彼岸中、当市梅川町梅香院に於て布薩法要並びに説教及び浄土宗の安心を、尚ほ同宗中にて有名なる中将姫の伝記をも語りて結縁の為にせらるゝと云ふ。

演説〔明治23年9月22日 第二十号〕

昨日、当市政秀寺に於て演説を開かれしが、弁士は大田寛氏外二名なりし。

特別教会〔明治23年9月22日 第二十号〕

一昨日は第二、昨日は第一特別教会を当東別院に於て開かれしにより、南条文学博士は来会せられし。

廿五回忌の延期〔明治23年9月22日 第二十号〕

曾て本紙にて記載せし当市東別院に於て、前住上人の廿五回忌を施行せらるゝは、来る十月頃ならんと報じ置きしか、愈々来春まで延期する事に決定せしよし。

何ぞ速かに土艦を吊ふ演説を開かざる〔明治23年9月29日 第二十一号〕

当市は名にし負ふ仏教地、寺院の多く、僧侶の夥しき、信徒の沢山なる、特に弁士の多き、演説家の沢山なる、土地柄にも似ず、一場の演説未だ土艦を吊ふの一辞なきは、吾人が土地柄として甚だ以て疑なき能はず。

愛知教育会〔明治23年9月29日 第二十一号〕

同会は、昨日午後第一時より名古屋市役所議事堂に於て常集会を開会され、柳本書記官議長席に就かれぬ。

演説〔明治23年9月29日 第二十一号〕

昨二十七日、当市西別院に於ける演説の景況は、会場は本堂、開会時間は午後一時半、第二席に自愛心を忘るゝ勿れ（羽川得忍）、第二席は人（中川泰道）、第三席は注意の弁（高岡応順）、第四席動物と世界（広間隆円）国民的宗教の観念（香川黙識）、聴衆は凡そ五六百名にして閉会せしは同四時半なり。尚、香川氏の演説は二時間に余る長演説なりし。

供養に挿花〔明治23年9月29日 第二十一号〕

去る廿一日演説と記載せし政秀寺には、無縁施餓鬼を執行し畢りて、三河国石橋妙峯外一名の説教と該寺の高弟宗芸氏等の生花の奉納等、都合により大田寛氏の演説はあらざりし由。

興禅和尚示寂す〔明治23年9月29日 第二十一号〕

当市下茶屋町黄檗東輪寺前任職興禅和尚は、去る十八日溘焉寂せられしかば、来る十月一日午前十時葬送を営まるゝに付き、現住聖道師は同寺近傍の貧民へ施米、或は其他の施与を致さるよし。尚ほ同興禅和尚は永住伽藍護持の功績により、旧尾州侯より三度の賞典をも得られ、亦本山よりは大和尚の号をも賜りし事あると云ふ。

愛知仏教会部南講義〔明治23年9月29日 第二十一号〕

門前町大光院内転愚堂に於いて、毎月十五日、廿七日午後第七時より

羽翼原人論

講師 笠間龍跳師

愛知仏教会部東講義〔明治23年9月29日 第二十一号〕

中市場町二丁目中村嘉兵衛氏方にて、毎月三ノ日午後 時始
三国仏法伝通縁起

講師 広間隆円師

柳原長栄寺々伝〔明治23年10月6日 第二十二号〕

当院は西春日井郡杉村大字上名古屋字柳原にありて、当国鎮護の道場なり。些か其寺伝を記さんに、文政二年当時の大守大納言源斉朝卿金城の東北柳原に（即鬼門の方位）一字の仏閣を造営し、国家守護の祈願所と定めんとの大願心を発し玉ひぬ。（蓋し往古王城鎮護の爲め、皇城鬼門の方位に比叡山延暦寺を開き玉ひしに、先王の例に類するものか）其時、肥後熊本に豪潮阿闍梨といへる大徳の高僧あり。斉朝卿乃ち請じて是事を果さんと使を以て其旨を伝ふ。師命を奉じて来り。先づ万松寺に入り、夫より知多郡（今の山海村）大慈山巖窟寺に移り、暫く茲に錫を留め玉ひぬ。大守斉朝卿の請疏に曰く。

啓茲スニ審洲之巖窟寺者。観音薩埵之靈区。実邦内之小補陀落迦山也。昔行基シ發跡ヲ焉ニ法化ス雲。布レ中空海勃興ニ而徳沢雨霑ニ已矣。今則寥々ハ奉ニ香火ニ者。猶或闕ク何況ニ荷法之徒ヲ以レ是ニ惟ニ走獸跋扈草木蒙茸。寡人甚慨焉。茲聞東肥豪潮阿闍黎ノ心月ノ清戒行玉。朗能蘇息ニ民物ニ感通疾シ於レ神来ニ黼黻ニ公乗ニ且冠冕縑緞宜下促シ法駕ヲ以ニ雪林慚美ス必ニ媲ニ二師ニ社ニ先被ニ社稷ニ寡人何徳能羅致若人。匪ニ但寡人之慶ニ亦社稷之頼也。臨レ啓ニ不堪ニ瞻依之至ニ。

文政二己卯冬十月 齊朝 花押

幾程もなく今の地に一字を創立して護国堂と名け玉ふ。今本堂の南の小堂是なり。夫より諸輪村なる長栄寺を遷して三密の道場とし、松洞山を以て山号とす。律師来て錫を安んず。今の殿堂伽藍即ち是なり。開基豪潮律師の徳風を慕ひ来つて脩身の道を授り、又は戒を受けて恵心を磨き、現当の利益を得たるもの其数幾千なるを知らず。実に近世有難き高僧なり。第二世を実戒律師とす。是れ亦た豪潮律師にをさく、劣らざる知識にして、其徳望の高き皆な人の知るところなれば略しぬ。此寺靈仏靈像頗る多し。其二三を挙げんに、本尊十一面觀世音は便ち開基律師の持仏にして種々の名木を以て彫み、一拝崇敬の外なし。又大日如来、五大尊、十二天の十八体は、大檀那源齊朝卿等身の像にして、刻師は京都の仏師山本茂助氏なりと。(等身の像とは大守齊朝卿の身と寸尺を同じくし、其御体に等しきを以て云ふ) 又四天王は、三位源義宣卿(元千代君) 十歳の御時の等身の像なり。又弁才多門大黒天三体一形の大黒天は、伝教大師の御作にして鈴振の大黒天と称へて靈驗著しく、実に天下無双の靈像なり。左に飯綱明神の尊像あり。これ弘法大師の御作にして、実に威嚴畏るべき尊容なり。昔は門前町清寿院に安置しありしを、修験廃止の砌り国君より当寺へ御預相成しとぞ。其余靈像多し。今列記する能はず。今筆を措かんとするに当て記すべき一話あり。

愛知仏教会追用法会〔明治23年10月6日 第二十二号〕

本会々則に由り、来る九日午後一時より門前町極楽寺に於て、会員中死亡者の為め八宗の大法要を修行す。由て同日迄 戒名

「能仁新報」よりみた名古屋の仏教(一)

或は俗君御差出 相成度此段会
員諸君に告ぐ

門前町極楽寺内

明治廿三年 愛知仏教会本部
九月六日

愛知仏教会^{第三}大演説〔明治23年10月6日 第二十二号〕

来る十日、門前町西別院に於て同十一日小川町法華寺に於て開会す。

但し、会員は会員証持参の上御参聴相成度候

弁師

島地黙雷師

堀 日温師

外 一名

門前町極楽寺内

明治廿三年

九月六日 愛知仏教会本部

仏教会の法要及び演説〔明治23年10月6日 第二十二号〕

別項広告の如く、来る九日は同本部極楽寺に於て、会員規則由り会員中の死亡者を吊ふか為め、各宗の僧侶相会して午後より読経供養を営む。翌十日及び十一日は、西別院及び寺町法華寺に於て大演説会を開かるが、尚別項広告の外、加州金沢天徳寺住職森田悟由氏の高弟一名も加はらるゝ筈なれとも、未だ確報を得ざるを以て暫く。

曹洞宗有志会の仲裁に就きて〔明治23年10月6日 第二十二号〕

前々号の社説中にも記るせし如く、久我通裕外三氏の仲裁云々は、当市曹洞宗々務局長生駒円之氏が深く本末葛藤の好からざる事を痛歎の余り和解の爲め、右の数氏に依頼せんとせられしものにして、有志会員中にも大いに其説を可なりと為さるゝ方もあるよしなれば、一日も早く和解の運びに至る様願はしき俟かくは記るしぬ。

演説〔明治23年10月6日 第二十二号〕

一昨四日には巾下橋詰町慶栄寺に、昨五日には袋町延明院、本日は松山町薬師の東充寺、九日は古渡の東海寺に於て何れも仏教演説を開会せらる。尚ほ弊社よりは何れも一名宛出場せり。

第一婦人会の発会式〔明治23年10月6日 第二十二号〕

当市伊勢山町善正寺に於て、昨五日婦人会の第一団体の発会式を行なはれ、夜に入りて同寺に於て唱道義会の例会を催されしかば、是れ亦社員一名出場せり。

四恩会の演説と救助〔明治23年10月6日 第二十二号〕

当市巾下新道町海福寺に於て、本月十日午後一時より仏教演説を開会せらるゝよし。其弁士は近藤疎賢氏外二名の予定なりと。尚ほ堀川以西赤貧者百五十名へ白米五合宛を同会救恤議員特別有志より施与せらるゝよし。

大須の出火〔明治23年10月6日 第二十二号〕

一昨四日午後十二時五十分、当市門前町大須境内大吉楼雇人部屋より出火し、同樓の坐敷及び接続の玉突紅白亭並びに寄席新福亭と其回り明家二戸玉突き、十二月に正友舎の移転すべき修繕中なる一棟を焼失し、散髪店鬼頭銀次郎は丸毀し等にて鎮火せしは午後三時三十分なりと。因に記す。曾て同寄席地に釈迦堂を建立すべき筈なりしに、彼の八卦を以て名ある南北が易断に、若しも其の地に釈迦堂を建てなば、大須は丸焼となると占ひしより、遂に釈迦堂は他に新築せしも、今此の祝融の災にかゝるを見れば、或は合ふも八卦の其の一つか。

追弔大法会〔明治23年10月6日 第二十二号〕

本月十二日、熱田白鳥山に於て山主大島天珠及び山田大啓、平野貞道、吉田義道、安達恵等の五氏が首唱者となり、小塩幹、藪本八左衛門、野口吉十郎、田中源助、井上信八、岡本賢吉、岡本清吉、磯貝浩、青木文七、山田清三郎、小貝甚三郎、島本権左エ門、岡山新蔵、酒井礼三等の諸氏が發起人となり、土耳其軍艦及び日本諸船の覆没死亡者並に本年諸国に於て虎列剌病の為に落命したる者の為に、曹洞宗の老宿白鳥鼎三師外二名の頌徳を請し、追弔大法会を執行し大演説を開筵し、当日参詣の諸人へ供物等を施与し、其余財を大日本水難救済会へ義捐するの目的なる由。

奇特〔明治23年10月13日 第二十三号〕

愛知仏教会の招聘に応せられし天台宗播摩国神西郡相坂村天台宗八葉寺住職岡岡恵道師は、当杉村長栄寺に於て説教の爲め滞留中、去る廿六日夕方、カバンを紛失せし其中に書類及び金子等これありし爲め、信徒はいたく氣の毒に思ひ、各々若干の金員を寄せし高は三円十錢とあひなりしが、師は盗まれしは我が品なり。各位の心を勞するには忍びずとて、更に受領せざりしが、其後ちカバン及び書類は発見せしも金員丈けはあらざりし故、信徒は強て納め呉れと頼みければ、師は一回之れを受納して、更に金十錢を添へて愛知育児院へ寄付せられし由。

愛知仏教会第三回大演説の景況〔明治23年10月13日 第二十三号〕

去る十日、十一の両日開会せし愛知仏教会第三回の大演説会は、門前町西別院に於て午後一時より開会せしに、雨模様なりしにも関はらず、午前十時前より会場に参集せられし会員は、開会前既に満場立錫の地なく、殆んど二千余人の聴衆にて、当日新たに入会せられし方も一百余名ありぬ。第一席は開会の主意広間隆円、第二席心の写真岡岡恵道、第三席信仰の理由伊奈良啓、第四席勇猛と精進堀日温、第五席何物か是れ真理島地黙雷等の五師にして、何も拍手喝采のみならず、真に身心に徹して感淺からざるの状は何れも表に現はれたりぬ。第二日目即ち十一日は小川町法華寺にて、第一席開会の主意伊藤覚典、第二席信仰の理由伊奈良啓、第三席能仁新報の主意を述ぶ（社員）、第四席驕慢堀日温、

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（一）

第五席生死を畏るゝ勿れ林道永、第六席何者か真理の続島地黙雷等の諸師にして、当日は稍辺鄙にも関はらず、聴衆は前日に同じく満堂立錫の地なく、何れも満足を得て帰りし会員は二千名近くなりし。尚ほ両日共、六金色の彩旗及び其他裝飾十分にして夫々役員の手順も行き届き、第二回に比すれば一層の整頓を得、混雜を避けたるものゝ如し。

亦去る九日の法要も、各宗の僧侶諸師は交々読経供養せられ、会員の参詣者も多く最と静肅に勤行せられぬ。尚毎年一回宛会員の爲め、各宗の法要を行ふ事は規則上にあれば、次年の法要も他分本年同様九月頃に施行すべき見込の由。

島地黙雷師〔明治23年10月13日 第二十三号〕

島地黙雷師は仏教会の招聘に應じて来名の上、伝馬町の志貴の屋に宿泊せられ、山県書記官を訪問し、東別院及び其他を見物せられ、昨十二日午前一時の汽車にて東上せらる。

林道永師〔明治23年10月13日 第二十三号〕

林道永師は（前黄檗の管長）、十日午後陸路伊勢より来名の上、下茶屋町東輪寺に宿泊、二三日滞留の予定なりしも、俄かに電報に接して昨日十二日午前出發せらる。

大光院での講義〔明治23年10月13日 第二十三号〕

講義

観音普門品 伊藤文梁講義

般若心経平談 笠間龍跳続講

右来ル十六日午後一時ヨリ当院ニ於テ開筵ス。

傍聴勝手有志ハ参聴アレ

名古屋市門前町 大光院

建中寺々々伝〔明治23年10月20日 第二十四号〕

当寺は当市筒井町にあり国守御代々の菩提所なり。慶安四年瑞龍院殿 御父源敬公の御菩提寺として御創立ありし伽藍にして、下総国結城の弘経寺の廓吞和尚を請じて開山となし玉へり。同五年二月経営成就の後、廓吞和尚上京して、六月廿二日参内して住僧代々賜紫勅許の綸旨を拝受して帰れり。（右綸旨は、今尚ほ同寺にあり。其明文を掲ぐべきも故ありて記さず）境内頗る広大にして、国君御代々及び御簾中御連枝等の御廟御靈屋を始め堂宇善美を尽し、又御寄付の靈宝寔に多し、今記すに暇あらず。本尊は阿弥陀如来にして、鳥仏師の作にして廓吞上人所持の靈仏なり。（鳥仏師は聖徳太子同時の人なり。経蔵に掲げある転法輪蔵の額は、智恩院尊超法親王の筆なり。又鐘樓に林道春が銘を鑄りし名鐘あり。然るに尾張名所図会に曰く、慶安四年五月七日、林道春の銘にして羅山文集にのせたり。惜哉。天明五年正月廿三日に焼失せり。今の鐘の銘は細井徳民の作なり。文こゝに略す云々と掲げあれと、恐らくは誤りならん。記者当寺伝を掲ぐるに当り、当寺に至り住職徴典上人に謁して詳しく取調べ、又彼の林道春の筆

なる鐘銘の一見を乞ひ写し取つて帰れり。其文に曰く、

建中寺鐘銘

尾州愛知郡古井邑徳興山建中蘭若者

二品重相尾陽侯源敬公之影堂也

公平生。慕儒風。向神道。不信浮屠。常考朝儀。

愛国民不忘武備。世人以為仰望。一旦殂矣

悉皆莫不哀惜焉矣。其所倚頼也

令嗣本洲主 □は虫食

三品参議源君至孝。有繼述之志。然姑□其佐見其時創建此蘭若以代廟祠。於是新摸梟鐘掲之於樓。以為警衆之具。命予為之銘。不

耐屏營之至□謹作銘。銘曰

徳興之山 建中之寺

高樓新構 鉅鋪具備

鯨音聞天 龍紐□□

仲冬始律 叔世攪睡

既告衆民 能警將師

豊嶺霜来 長安月墜

以道善鳴 知風所自

宮商有諧 忠孝不匱

縱其小扣 惟是大器

嗚呼振旅治兵 愷於鼓吹

慶安四年月日 法印道春撰

とあり。又梵鐘は天明五年火災の時、樓より落ちて些か損所を生

ぜしのみにて今尚ほ有り。然れば、尾張名所図会に云ふところ誤なるべし。

又境内に陳元寶の碑あり。碑面に大明国武林既白山広学陳元寶、寛文十一辛亥年六月没と見へ、其傍に白翁道元の碑あり。是則ち元寶の子俗源太郎の墓にて、宝永二年九月二日没と記せり。因に元寶の伝を記さんに、元寶は、字は義都、号を既白山人、又は芝山升庵と称し、明の虎林県の人なるが、明季の乱を避けて日本に來り、国祖君の寵遇に預かり、当地に住居せしが寛文十一年八十五にして死す。深草の元政と友情厚くして詩文の贈答多く、元々唱和集等にあり。又拳法秘書に曰く。元寶江戸麻布の国正寺に寓するとき、福野七郎左衛門、磯貝次良左衛門、三浦与次右衛門といふ三人の浪人ありて、同じく彼の寺に寄寓せしが、元寶これらに語れるは明朝に人を捕る術あり。我れ其技を見るに、しかくといふ三人、終に工夫を凝らして其術を得たり。是即ち起倒流の柔術なりと云々。

仏教演説〔明治23年10月20日 第二十四号〕

来る廿一、廿二、両日、門前町七ツ寺に於て真言宗有志者にて催さるゝ弁士と演題は、所感、唯心所造、伊藤栄二郎氏演題未定、広間隆円、宮崎智全、横井良琪、杉原惠本の四氏等にして午後一時より開会。

亦廿一日午後一時より、宮出町永安寺に於て土耳其古軍艦沈没者追弔会及び全国水難者の法会を兼ね演説を開会せらる。

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（一）

笠寺略縁起〔明治23年10月27日 第二十五号〕

昔尾張国愛知郡呼続の浦松巨島の北端に、坂野といへる在所ありて、其所に善光上人とて智徳戒行目出度き高僧のをわしける。其頃呼続の浦に、一つの浮木漂着し、夜なく光を放ちけるを見る人疫病の患をなしける。善光上人不思議の靈夢に感じ、聖武天皇の天平聖暦八年丙子の年、其浮木を以て十一面觀音の像を刻み一字の精舎を建立し、其靈像を安置し天林山小松寺とぞ申しける。然るに年月を経て、堂舎おのつから雨に朽ち風に倒れ、寄進の田畠さへ国司の爲めにとされて、昔仏涅槃し玉ひてのち、祇園精舎の破壊に異ならずして本尊さへあらわになりて野中の石の上に立ち玉ひ、雨露に浸され玉ふ程になりけるを、美濃国野上と云ふところに美濃守とてよしある人ありて、一人の姫君を持ち玉ひけり姿いと妙にして、一度笑へば百の媚をなし、容顔露に綻び柳髪風に梳るか如し。花の匂ひ月の容云はんかたなし。父母殊に愛しめ玉ひけり。此姫の名をば玉照姫とぞ名けゝる。時に鳴海の長者太郎成高といへるが美濃守を殺し姫を奪ひとりて連れ帰り、花の姿をあやなくやつし丈けなる髪をくひきりに切なし、雪の肌を松の烟にてふすべ、昨日までは源氏狭衣を手馴れし身も、今日は水を汲み爪木を拾ひ若菜を摘む等、昔の釈迦仏捨身の行を修し玉ひしも、斯くやと思ふ斗り也。玉照姫幼き心に思ふ様は、我身如何なる宿世の罪の報ひにや。一夜の中に父母を失ひ、かゝる憂目を見るらん王照君が、泣々都の雲井を外所に見て、胡国に赴く旅の空胡角一声霜後の夢漢宮万里月前の腸とて、悲みしも我歎きに

はよも勝るまじと。天に仰き地に伏し願くは、前世の果報こそ拙くとも、只命を殺し父母の浄土へ送らせ玉へと悲しみ玉ふにも哀といふ人更になし。夜も漸々明ぬれば、家内の女童等に誘われ菜摘みに出てけり。此日嵐いと烈しく時雨の降り出て、皆人は笠をきれども姫斗りには笠を与へず。姫は泣く／＼雨露に濡れつ、追ひ回されて居たりけり。此時一人の僧、これを見て哀と思ひけん。我着たる笠を姫に与へければ、姫は嬉しさ限りなく、彼僧の行衛見えぬまで伏し拝みてそありけるが、夫より星崎の野に行きて見れば、十一面観世音の御堂もなく雨にうち濡れて立ち玉ふを哀に思ひまいらせて、彼の笠を着せ参らせ祈念しけるは「過去の因を知らんと欲せば、其現在の果を見よ。未来の果を知らんと欲せば、其現在の因を見よ」とかや侍れば、現当の果報共に知られて頼なし。願くは衆生の苦みに代り玉はんと誓ひ玉ひてこそ観音と現れさせ玉ひけれ。されは「衆生若し名を聞て苦を離れて解脱を得る。或は地獄に遊戯して大悲受苦に代る」と誓ひ玉ひ、独りとして二世の願叶はずば、妄語の罪に大悲を捨て本覚の都に帰らんと御誓の頼もしくも有難く思ゆるとて、流涕こがれつ、祈念し終つてぞ帰りける。斯くて月日を送るうち、時の関白殿の徒子中将殿東へ下り玉ふ道ながら太郎成高が家に入り玉ひ、四五日逗留ありけるが不図姫を御覧じて云ひ甲斐なき民なりとも見へずとて、彼の水汲みを召して参らせよと有ければ、是れは如何なる御事ぞとて立さわぎ諫めすかし参らせとも聞入玉はず。遂に御中睦じく契り玉ひけり。中将殿都に帰り玉ひて姫君を

向へ上せ玉ひぬ。洛中の上下の人々申合へる様は兼平の中將、このたび田舎より北の御方 toward 玉ふよしとて、御迎ひの人々山を為し、常に振合ふ都地も猶一しほの景況なり。夫より太郎成高が振舞は、世にためし少なき事なりとて、則ち勅勘の宣旨を下され、近国の武士どもに仰せ付られて討せ玉へり。是れ即ち因果応報の理りに依るものなれども、哀にこそ侍りけれ。斯くて後ち、玉照姫兼平中將に申さるゝは、彼の星崎の観世音の利生あらたかにまし／＼なから雨露に浸され玉へるは、寔に歎かはしき次第にこそ侍れとて、逐一彼の観音の事並に笠を着せ参らせし事など述べられければ、奏聞して勅許を得、醍醐天皇の延長八年、此の寺を創立し姫君の笠を着せ参らせし故を以て、小松寺を改め笠覆寺と名く。今笠寺と称ふるは其略号なり。

当縁起は長文なるを省略して掲げたるものなり。詳しくは次号より其詳伝を小説体に綴りたるを掲載すべければ、看客是れを察し玉へ、其の題号は、

笠寺
靈驗 玉照物語

土耳其沈没艦の大法要〔明治23年10月27日 第二十五号〕

去る廿一日、当市宮出町の永安寺に於て同法要を営まれし大略を記るさば、当日山門内に大塔婆を立て、派内の僧侶数十名は施餓鬼壇を設けて読経され終りて、笠間龍跳師及び伊藤寛典師の演説ありぬ。

演説と講義〔明治23年10月27日 第二十五号〕

去る廿二日より天台四教儀の講義を、明二十八日は連月の通り大光院に於て演説会を開かるゝよし。

蜜巖教会の一周年〔明治23年10月27日 第二十五号〕

去る廿一、廿二、両日、当七ツ寺にて真言宗有志僧侶の設立に係る蜜巖教会の一周年には、両日とも演説を開会せられ終りて一同の懇話会を開かれしが、例月廿一日には七ツ寺に於て同会の説教を開かれるは、兼ねて有志家に報する事しかり。

愛知仏教会講義〔明治23年10月27日 第二十五号〕

中市場町二丁目中村嘉兵衛氏方にて毎月三の日午後七時始

三国仏法伝通縁起

講師 広間隆円師

愛知仏教会講義〔明治23年10月27日 第二十五号〕

門前町大光院内転愚堂に於いて、毎月十五日廿七日午後第七時より

羽翼原人論

講師 笠間龍跳師

和同協会〔明治23年11月3日 第二十六号〕

和同協会は来る五日、西春日井郡杉村心入寺に於て伊藤覚典、黒田安麻呂、中村専輒等の諸氏を聘して仏教演説を開会するよし。

白林寺住職森拙元師逝く〔明治23年11月3日 第二十六号〕

篤実温良と品行方正とは之れ氏の賛辞なり。氏は今を去る九年前に住職となり、殊に節儉其廃頽せる堂塔を保存せんと専心勉強せられたり。其効や顕れ信徒増加し漸く完全を告げんとするとき憐也。無常の一風氏を誘ふて黄泉に旅行せり。時に本月廿八日なりき。

各仏教団体懇話会〔明治23年11月3日 第二十六号〕

来る十四日午後六時より

各仏教団体懇話会

を開く。此段各団体諸口告ぐ

名古屋市東田町 温知会本部
一丁目宗円寺内

久我環溪大禅師七回諱〔明治23年11月3日 第二十六号〕

故管長久我環溪大禅師七回諱 御相当ニ付、来ル五日、南小川町長全寺ニ於テ大法会執行致候間、曾テ御教化蒙リシ方ハ御参詣被成下度候

水野道秀

清浄寺々伝（世俗に矢場の地蔵と云）〔明治23年11月10日 第二十七号〕

当寺は当市矢場町にありて浄土宗の寺院なり。往古、此所は尾州小林の城主牧大和守源長清の城址なりと。今此辺を矢場と称ふるも、長清が矢場なりしを以て言伝へしを字とはなりしものならんか。長清嘗て七度富士登山を思ひ立ちて五度迄は登山せしも、年老て歩行等も不自由なりしを以て、我廓内へ五社を勧請し、朝夕の勤め怠たらざりし、今の春日の神社及び浅間神社等も其五社の中なりと。長清は正親町天皇の元龜元年二月十五日卒し、法名を長清院殿梵阿弥陀仏と云ふ。内室信徳院殿善行慧長大師（天正五年八月十五日卒、信長の妹）と二基の五輪当境内にあり。其後徳川氏の世を始め玉ふに当り、国君より此地を柳生兵庫介平利厳入道に賜ふ。三男兵庫助厳包、又此地に住居し薙髪して浦蓮也と云ふ。此人剣道の達人にして、庭地の蓮の花開くを見て、兵法の奥儀を悟りしと云々。其伎の巧なる事は、既に海外の書籍にも載たるにても知るべし。故ありて蓮也。此住宅を離れ、此地に寺院を創設せんとせしも果さず。其の後、南寺町尋盛寺塔頭庚申院と云へるに潜居してありし、廓龍上人として尊き御僧あり。貞享年の初め、法徳益々著しく、終に瑞龍院殿の高聴に達し、御帛依の余り貞享五年此地に一の堂宇御建立ありて清浄寺と称号を下し玉ひ、廓龍上人を開基とせらる浦蓮也の宿願も、此時に成就せしと云ふべきか。元禄四年、瑞龍院殿御宿願の筋ありて古仏の霊像を尋ね求められ、廓龍上人尊命を蒙りて探索せられ、往昔、宇治の関白

頼通公、永承七年館を捨て山城の国宇治の里に於て朝日山平等院を建立し、其本尊として定朝の作御長ケ五尺九寸の阿弥陀仏并に御長三尺五寸の観音勢至の三尊仏を安置せられたる霊仏も、兵火に依て宇治一円焼亡の節、里人窃に尊像を民家に供奉し、治平の後幾許の星霜を歴て同所願海寺の尊に移し奉り、観音勢至の二尊は平等院の宝蔵に安置しありとの由を伝へ聞き、此三尊を御遙迎遊はさるべき旨申上られければ、瑞龍院殿乃ち願海平等兩寺の住僧に御懇望の子細申伝へ、右の三尊を御迎ありて当寺に安置せらる。今の本尊即ち此なり。元禄十二年六月、海東郡津島誓願寺を移し徳寿山無量院清浄寺と改号せらる。当院へ国守より御寄付の品々多きが中にも、国祖源義直卿（源敬公）の御生前の画像は義直卿、嘗て画師に命じて写さしめ玉ひしを、直ちに瑞龍院殿へ御付属ありしものにして、此を瑞龍院殿当院へ納め玉ひしなれば、国祖御生前の画像は此を措きて他に有ることなし。他に見るところのものは皆此を復写、世人俗に当寺を矢場の地蔵と呼ぶものは即ち当寺に靈驗著しき地蔵尊の安置しあればなり。些か其由来を掲げんに、彼の地蔵尊は誰れ人の作り玉ひしものなるやは詳ならず。昔善人と云ふ類なき念仏の行者ありけり。諸国を行脚し霊場名跡に結縁し、或時同志の同行と共に越中国立山に詣でんとて、其麓に至り宿りけるに、其夜の夢に最と尊き御僧一人現れ玉ひ、善入に告げ玉はく、我は此山の地獄谷と云ふ所に久しく、諸人の苦を救ひ済度し在けるが、今は汝が方に行て諸の衆生を利益せん。明日より我を俱ふべしと宣ふ程に、夢は覺めたり。明る朝、

夢の有様を同志の者に語り、宿を立ち出て險阻の峯を越へ、終に地獄谷の焦熱地獄と云ふ所に至りければ、其さま地上より煙立ち登り、岩間より湯沸き出で、いかさま畏ろしく身の毛もよだつ斗なり。其煙りの中に一つの光り見えければ、善入近く寄りて見れば、昨夜の夢に違はぬ地藏菩薩の尊像なり。有難抱き奉れば、御肌暖かにして生る人の如し。愈信心肝に銘じ笈に納め諸国順歴し、終に尾張国尾頭村に至りければ不思議なるかな尊像動き玉はず。これこそ有縁の地ならめと、こゝに仮りの庵を結び安置し奉る。然るに善入命終の後ちは、故ありて御城の御安置仏とならせ玉ひしが、元禄の頃、瑞龍院殿光友卿御意願ありて新に当寺御建立し玉ひ、則ち此尊像永く安置し奉れとの御意ありし尊像なり。尚ほ当寺の由緒宝物等に就て掲ぐべき事蹟あれと略しぬ。

施餓鬼〔明治23年11月10日 第二十七号〕

明十一日、当市宮出町照運寺に於て大施餓鬼を施行し、同宗の宗意安心を説教の爲め松山町安斉院住職野々辺至遊師が出席さる、由。

和同教会〔明治23年11月10日 第二十七号〕

和同教会は毎月五日を期して、仏教演説会を地方寺院巡回通番に開会せらる慣例なるを以て、去る五日、杉村心入寺に於て開会せしが、聴衆五百余名にして出席弁士は伊藤寛典（日本魂の前途）、黒田安麿（老婆心）、中村頼宗（迷ふ勿れ同胞兄弟）の諸氏に

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（二）

て、何れも拍手喝采無事閉会せりと。因に同会は西春日井郡清水辺の仏教有志者か發起せられたる者なりと。

育英学校運動会〔明治23年11月10日 第二十七号〕

当市宮出町永安寺境内愛知育英学校には、去る一日を期し秋期大運動会を催せり。当日は殊の外、朝来陰雨濛々たるにも拘らず、全校生徒男女百余名午前九時三十分より驟雨を冒して隊伍を成し、勇氣凜々として愛知郡広路招魂山に向て進軍し着後、綱引、旗取、幅飛、疾行、競走等の活戯を為し、優者には授賞して、午後六時整々として軍歌を謡ひ、泥濘を蹴立て列伍堂々として帰校せしは、実に勇しかりなりし運動会なりし。

法会と演説の景況〔明治23年11月10日 第二十七号〕

過る五日、本市南小川町長全寺に於て執行せられし全宗故管長久我環溪禪師の七回諱法会及演説の景況は、全日殊に降雨なるにも拘らず参詣者頗る多く、聽て正午十二時より伶人の奏樂に随て僧衆一同本堂に整列す。導師（安斉院住職野々部至遊師）続て献供、出斑焼香、宣疏、誦經等ありて、了つて説教（野々部至遊師）、次に演説開会の旨趣（水野道秀）、高橋順、伊藤栄治郎、日下部徳兵衛、伊藤寛典氏等嚟曉たる音楽につれて、交に演壇に登られ最と慇懃に演述せられ、頗る聴衆に感動を与へたりき。

天長節の祝式〔明治23年11月10日 第二十七号〕

当市に設立する曹洞宗中学校に於ては、同日午前八時鳴鐘に随て職員生徒清服被着にて同林の大講堂に参集し、平素奉置しある天皇陛下の聖牌前に就て、同宗の法式を以て天皇太后両陛下の万歳を祝し奉り、式了て一同行茶位に就き、茶菓の盛礼を挙行し退堂せられたり。

温知会講義〔明治23年11月10日 第二十七号〕

本日は全会の定期講義を挙行する例日にて、午後六時より東田町宗円寺に於て開会すると云、出席講師には広間隆円、水野道秀、伊藤寛典、大田元遵等諸師なりと云。

愛知育児院〔明治23年11月10日 第二十七号〕

全院は、愛知に於て吾曹仏教有志者が設置に係る慈善事業の嚆矢たることは世の知る所なりしが、今回は其の育児の不幸にして死亡したる者及び慈善会友先亡者の為に、本日正午より大光院に於て各宗僧侶参集して大法会を修し、次て演説の由なるが出席弁士には広間、伊藤、水野の諸師を始め西有穆山老師も出席せらると云。

生駒円之師〔明治23年11月10日 第二十七号〕

全師は曹洞宗有志会の調和を計る為め嚮に上京せられしが、未だ調和の場合に至らず帰寺せられたりと聞しが、過る六日には有志

会の総代有沢香庵氏が来て師を訪しと。果して調和は成べき哉。

西有穆山老師〔明治23年11月10日 第二十七号〕

遠州可睡斎貫主全師は、過る五日以来、東桜町安清院授戒会の請に応ぜられ滞名中なりしが、本日完戒となり、直ちに横浜へ赴任せらるゝと云。

四恩会〔明治23年11月10日 第二十七号〕

四恩会は、本日新道町同会本部に於て、例月の通り貧民へ施米を為して仏教演説を開会せられ、弁士に（日本魂の前途）、伊藤寛典（日本人の元氣）、水野道秀（老婆心）、中村甄宗の諸氏なりとのよし。

愛知仏教会講義〔明治23年11月10日 第二十七号〕

中市場町二丁目中村嘉兵衛氏方にて、毎月三の日午後七時始

三国仏法伝通縁起

講師 広間隆円師

愛知仏教会講義〔明治23年11月10日 第二十七号〕

門前町大光院内転愚堂に於いて、毎月十五日、廿七日午後第七時より

羽翼原人論

講師 笠間龍跳師

仏教講義〔明治23年11月10日 第二十七号〕

右は、今回当市裏門前町総見寺前光勝院内に法苑学会なるものを設立し、来る十二日より毎日午後六時より仏書の講義を開会す。依て会員望みの諸君は本会へ申込あれ。講師は左の如し。

酒井恵遂師 富田智俊師 外一名

当市裏門前町総見寺前光勝院内

十一月 法苑学会

各仏教団体懇話会〔明治23年11月10日 第二十七号〕

来る十四日午後六時より

各仏教団体懇話会

を開く。此段各団体諸君に告ぐ。

名古屋市東田町 温知会本部
一丁目宗円寺内

仏教会支部設立〔明治23年11月17日 第二十八号〕

当市上宿は最北隅の地方にして、自然本部の關係薄きより、演説講義を聴聞するにも甚だ不便なりとて、今回は全地方の大橋銀治郎、酒井勝房、其他二三の有志者が率先して泥町周泉寺に支部設置する事とし、既に昨十六日に本部より伊藤寛典、水野道秀師等を聘し、夜会演説を挙行せられし参詣頗る多く非常に盛会なり

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（二）

き。

窮民法会と施米〔明治23年11月17日 第二十八号〕

松山町安齊院に於て、毎年一度窮民の飢寒に迫り衣食に汲々として、其の両親及祖先の年諱法事の吊祭をも成し得ざる赤貧者の為に大施餓鬼会を執行して、其の両親なり祖先なり戒名及月日を持参すれば、最と丁寧に向きされし事なりしか。本年は、来る十九日には右の法会を修し、猶慈善家より寄贈せられた米をも貧民へ施与せらると云。

森田悟由師〔明治23年11月17日 第二十八号〕

曹洞宗に有名なる加賀国天徳院住職の全師は、当市古渡町東海寺江湖会の請に応せられ、五十余名の学侶を引率して来名せられしが、今冬は全寺に滞錫せらると云。因に過る十五日より本日迄、大問答及説教等を執行せらると云。

仏教各団体の懇話会〔明治23年11月17日 第二十八号〕

過る十四日、当市東田町温知会に於て催されたる各団体の懇話会は、全日午後六時より各会の代表者は続々来会せられ、全夜は曾て前会より話題となり居たりし、左の四件を懇話ありし

- 1 一大演説場新築の事
- 2 女学校設置を仏教婦人会へ促す事
- 3 仏事禁酒の事

4 僧侶托鉢禁止の事

以上の四件なりしが、第一の演場新築は大事業に就き、明年全国仏教大会後迄都て延期する事。第二女学校の設置は目今の急務なり。殊に各団体の会員は既に婦人会の会員となるもの亦多し、依て各団体として之を促す事に決し、第三飲酒は積年の習俗にして容易に之を矯正す可からされば、先づ葬式のみ一般に飲酒を止むる様各寺院へ諭達して、其の檀徒へ諭さしむべき様各宗取締り建議し、更に演説講談に於て右の旨趣を布演す。第四托鉢は釈尊の勝躰仏者の浄命食なるも目今の世勢に適せず。加ふる惡徳汚行の僧僧を養ふに過ぎされば、先づ各宗取締りより地方限り禁止し、之を警察へ依頼せらるゝ様建議する事に決し、最後に帝國議會開日には、祝典を挙行する事を懇話し散会したるは午後十時廿分なりき。因に全夜各団体の代表者として出席せられたる人名は左の如し。

光閣會員大角金治郎、奥田錠太郎、顕正會員鈴木定吉、矢野福吉、紹隆會員日下部徳兵衛、四恩會員浅井栄治郎、仏教會員伊藤覚典、高橋順庵、唱道義會員林鍵治郎、桜木利三郎、法園會員宇都宮尚山、佐藤平兵衛、温知會員水野道秀、福田伝兵衛、宮橋勝三郎、松井万作、浅野市太郎、小笠原顯延、神谷兼吉、服部国太郎、阿部太四郎。

追吊大法会の実況〔明治23年11月17日 第二十八号〕

去る十二日、熱田白鳥山にて執行したる船艦覆没遭難死亡者追吊

大法会実況の大概を記せんに、先づ山門には六根色の大旗を交叉し、本堂の前庭には八寸角の大塔婆二本（野口吉十郎氏の寄付にて、此代価金五円余と云）、一は（土耳其軍艦覆没死亡者追吊浮図と書し）、一は（日本諸汽船沈溺虎列刺病死死亡者一切精霊と書す）を樹立し、其両側は廿五旗を懸し、本堂の西側には大花瓶に大生花（此は高浜与七氏の寄付、此代価は二円余と云）を飾り、其他内外の荘飾は善美を尽せり。大法会は午後二時頃より始めり。大導師は白鳥鼎三老師、奠湯師は大島天珠（白鳥山主）、奠茶師は栗木碓伝（福寿院主）の両氏にて、同宗の寺院僧衆三十余名の出動にて、各宗寺院僧侶七十余名の随喜あり。嚴肅に大施餓鬼会の法要を執行し終て、愛知郡長高木延世氏に代て平野貞道氏祭文を朗読し、続て仏教演説を開筵し、其演題弁士は（徳義は国の元氣なり）、浅野規鎧（生恩の解）、吉田義道（仏体の解剖）、安達慧等（行路難）、山田大啓の諸氏、終に笠間龍跳師が登壇し（仏教の不殺生戒を論ず）云。一題に就て丁寧懇切に仏教の大意を弁説して、大に聴衆の感動を引起さしめたり。是日参詣男女老幼は、凡そ五千余にて山内一円に充滿し立錫の地なし。実に未曾有の大盛会なりし。尤も参詣の者へは一般に切赤飯を供し、野口吉十郎氏は特別に大饅頭千六百人前を施与し、夜に入ては瑞穂村の有志者より獅子舞を寄付せられ、洗月院境内にて之を催し、尤も門の内外には数百の紅灯を挑けて大に壯觀を呈せり。

説教〔明治23年11月17日 第二十八号〕

来る十八日より当市皆戸町真宗寺に於て五日間、近江国信教寺住職武村浄実氏を招き説教を開かるよし。

仏教講義〔明治23年11月17日 第二十八号〕

右は今回、当市裏門前町総見寺前光勝院内に法苑学会なるものを設立し、去る十二日より毎日午後六時より仏書の講義を開会す。依て会員望みの諸君は本会へ申込あれ。講師は左の如し。

酒井恵遂師 富田智俊師 外一名

当市裏門前町総見寺前光勝院内

十一月 法苑学会

瑞雲山龍興寺々々伝〔明治23年11月24日 第二十九号〕

龍興寺は当尾張国愛知郡御器所村大字常盤字東脇に在り。創建詳かならずと雖も、同寺の過去帳を案するに、天文中本村城主佐久間大学の造立ならん。今過去帳に記るせる所を見るに、龍興寺殿半入玄心居士城主佐久間大学、天文八己亥十二月廿八日とあるを以て、或は当寺建立の大檀那ならんか。大学は家勝の子（家勝、嘉吉年中に勧請せし、八幡宮は今尚ほ同村に在り）なり。或は大炊助と称す。二子あり盛次、信盛と謂ふ。其先は三浦義明の一族にして鎌倉に仕へ、安房国佐久間の莊を領す。依て佐久間を氏とす。中世の祖本國を去りて本郡に來り。盛次に至りて織田氏に仕ふ。盛次、柴田勝家の妹を娶り多く男子を挙げ。（藩翰譜）長を

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（二）

盛政と云ふ。柴田勝家の滅ぶるに及びて秀吉、盛政を以て叛魁となし、擒りて檻車に載せ洛中を巡くり、遂に六条に斬る。（天正記）其辞世に曰く「世の中をめぐりはてぬる小車は、思ひの家を出するなりけり」と其の以て深く仏教に帰依せしを知るべし。次を河内守安次とす。太閤記に曰く、御使番衆の内及び普請奉行六人の内に、佐久間河内守は馬廻小姓組二千七百人の内より撰ひ出され、其為す所遅速理に叶ふ云々。第四子を勝之と云ふ。従五位下大膳亮たり。（本紙第一号熱田神宮の大灯籠を寄附せしは、則ち此の勝之なり）勝之初め源六と称し、佐々成政の養ふ所たり後、本氏に復す。

天正以来武勇の名あり。江州河辺七千石を領す。慶長五年関ヶ原の役忠を家康に致し、常州北条の地三千石を加へられ、又従五位下に叙し、大膳の亮に任す。大坂の役竹田永翁を討て功あり。信州長沼、江州高島の地一万八千石を領す。曾て渡海して難風に逢ひ、熱田の神靈に祈りて恙なく着岸するを得たるを以て其神恩に謝せん為め、京都南禅寺と共に一对の大灯籠を建つ。其の教神奉仏の志厚きを知るべし。寛永十一年十一月十二日卒す。斯く佐久間氏は世々教神奉仏家たるを以て、大学の当寺を建立せしは知るべきのみ。

当寺は東春日井郡大草福嚴寺三祖盛禅和尚の五哲たる止室和尚の開基にして、実に曹洞宗の中本寺たり。境内八百廿四坪にして、前は池水に臨み、緑樹碧水の間に巍然たる彩門は実に幽邃閑雅の清梵なり。寺後に盛政手植の古梅一株あり。亦天保元年二月、現

住奇夢に感して門前の大樹より得たる虚空蔵菩薩は一寸八分の黄金仏にして、其由来詳ならざるも山澄淡路守の寄付を以て香木の尊像を作り、之れを服中に蔵めて現に同寺に安置せらるゝか。案するに、或は同寺建立の砌り、特に樹下に埋蔵せしものに非ざるや。然らば是亦佐久間氏一族の遺物ならん。憶ふに古戦国の時、仏寺建立仏教帰依の人々多きは、当時の勇将猛士達の不_レ惜_二身命_一国家の爲め、主の爲め死生を顧みざりしものは、実に仏教の功德に由り安心立命の致せしものなれば、斯くは付記して戦国時代に仏寺建立の何に基きしや。且つは仏教の世道に関するの大なる事を告げんが爲め、斯くはものしぬ。

熱田支部仏教会の演説〔明治23年11月24日 第二十九号〕

去る廿日、全所亀井山に於て開会されたる仏教演説会は、仲々盛大、出席弁士は加藤渥寛、神座栄彦、浅野提鋤、(本部出張)広間隆円の諸氏、又廿一日は全所田中清雲寺に於て開会、出席弁士は神座栄彦、浅野提鋤(全断)、広間隆円の諸氏にて、両日とも聴衆三百有余名にて実に盛大なりと云ふ。

愛知育英学校〔明治23年11月24日 第二十九号〕

同校は、織田宝山氏が首唱して設置せられしに、爾後仏教会よりも同会の事業として監督することに約せられしが、開校以来日々進歩の有様にて亦続々同校の資金に賛助せらるゝありて、左の如し。

金一百円曹洞宗大本山より下賜

金五十円生駒円之君、金二十五円笠間龍跳君、金二十五円羽柴達玄君、金十五円近藤疎賢君、金十五円野々部至遊君、金五十円織田雪巖君、金十円藏山嶺瑞君、金八円高木啓法君、金十三円朴我碩鼎君、金五円梅本石雲君、金十円加藤孝玄君、金七円浅井無提君、金一百円東京小川作蔵君、金十五円高木忍海君、金十五円平野古仙君、(以下次号)

笠間龍跳師〔明治23年11月24日 第二十九号〕

同師は今冬、知多郡北崎村光善寺、西加茂郡高岡村徳昌寺等両所の江湖会の請に応せられ、十二月一日より光善寺に赴かれ、全月六日より徳昌寺法会に赴かれ、同九日より同寺にて授戒会を修せらると云。

仏教会演説〔明治23年11月24日 第二十九号〕

去る廿日、宮出町永安寺に於て開会せられたり。亦同夜、門前町大光院内天愚堂に於て開会せられたる。両所共出席弁士は水野道秀、伊藤覚典、中村輒宗、黒田安麿、本社員等なりし両所共盛会なりき。

安齊院法会の景況〔明治23年11月24日 第二十九号〕

曾て報道せし同院法会は、慈善家及窮民等午後一時頃続々参詣し、中には窮民の戒名等を持参せし者もありて、同二時より薬師

如来の誦經あり。次て本年虎列刺病死亡者及天災溺死者の施餓鬼あり。最後に窮民先祖の為に施餓鬼会あり。了て説教一席（至旌師）あり。此間、窮民等は最と整肅として本堂に聴聞せり。夫より一同へ白米五合宛を二百五十余人へ施与せられたり。同日施米寄贈慈善諸氏は左に伊藤松藏、内藤利兵衛、加納、中野甚兵衛、土川久藏、山田、大野、荒川、津田、其他数氏なりと云。

仏教講義〔明治23年11月24日 第二十九号〕

右は今回、当市裏門前町総見寺前光勝院内に法苑学会なるものを設立し、去る十二日より毎日午後六時より仏書の講義を開会す。依て会員望みの諸君は本会へ申込あれ。講師は左の如し。

酒井恵遂師 富田智俊師 外一名

当市裏門前町総見寺前光勝院内

十一月 法苑学会

梅昌院御霊屋の真景及び其由来〔明治23年12月1日 第三十号〕

左に掲げたるは当市門前町本願寺派別院内梅昌院殿御寿牌所の真景にして、画は伊藤清助氏の筆なり。氏は暁星と号し、曾て奥村石蘭翁の門に入り四条派を学び、大坂絵画共進会に於て褒賞を得らる。

抑も梅昌院と申し奉るは、享保の頃当国の城主徳川泰心院殿の御簾中にして厚く浄土真宗に帰依せられし御方なり。院御在世の砌りは、度々同寺に参詣せられ、享保五年子二月廿六日御自身の御

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（一）

寿牌所を同院の西北に建築せられ、御休所等の御普請料として五百五十壺両を御寄付あらせられし由同院の記録にありぬ。去れば御他界後は、御遺言に任せ奉り、同寿牌所の西北隅に葬り奉りけるが、今墓前の石灯を按ずるに、奉拝献梅昌院御廟前、享保十五年庚戌七月十一日酒井庄助尉藤原政興とあり。去れば御生前十余年前よりの御築造にして世々の国主も御尊敬あらせられ、殊に本願寺よりは代々の輪番役僧をして守護せしめければ、其美麗なる言の及ぶ所に非ず。今左に寺社奉行等より輪番に訓令せし一端を記るさば、第一公用を重んじ御国法を相守り、違背の儀無之法中取扱宜く梅昌院様御霊屋朝夕無怠懃会勤行勿論云々とは、安永七年辰八月廿三日寺社奉行林又左衛門の仰書なり。

案するに西本願寺別院は、天正年中までは勢州長島にありしが後清州に移し、再び享保三年今の地に移せしものなり。（此の由来は、他日同寺々々伝を記るすに当りて詳かにせんが為め、茲には略す）故を以て、当時の城主泰心院殿も御帰依浅からざりしは勿論なれども、御連中梅昌院殿の大に預り力ありしを知るべし。今同寺の由緒書に由るに、梅昌院殿よりの御寄付として享保三年十一月、本坊起立の砌金百両御寄付、同四年御寿牌御預けの節仏供料として三百両、同五年御寿牌所御普請の為め前記の五百五十壺両、同七年台所取立に付式百両、同十二年御寿牌堂備付け水籠三十円坐三十本、同十四年鐘楼再建に付、金三十両米三十拾石（代金）を御寄付の由記るされ、又御在世の時より御他界後までに御寄付の品は、結構謂はん方なき物数百品今に伝はり居たり。殊に

御守刀吉光作無銘長刀を始め御送葬後御手道具悉皆今に同寺の宝庫に保存せらる。殊に泰心院殿御作の紙雛（封印付き）を始め愛玩せられし品目数ふるに暇あらず。又伝ふる所の梅昌院殿御参詣の事は幾十回なるを知らず。且つ御実母の三十三回忌を勤められし事も伝はり居れり。又享保十七年に国君中納言拝任の時、御廟へ御名代御参詣の由も伝はり居れり。後ち修繕料下賜等の事数ふるに暇あらず。斯く同寺の爲め一大檀那なれば、今に朝夕勤行怠る事なく勤めらるゝも、今や修繕の費途もなく荒敗日々甚だしきは記者も歎息の外なきなり。尚ほ同廟の正面には阿弥陀如来の影像を安置し、其前に位牌、其左右に侍女の位牌を安置せらる。御墓は廟の西丘にありて、数基の石灯古松柏の間に散在し、侍女の墳墓は其の左右山腹にあり。

特別広告（明治23年12月1日 第三十号）

去月十八日臨時会の評決に依り、本月六日七日両日午後一時より会務拡張の爲め臨時総会を相催候。此段一般会員へ広告候也但会場は宮出町永安寺にして、会員証御携帶者に限り随意に傍聴する事を得、但し会則に由り、時宜に由り、之を謝絶する事あるべし。

熱田に於ける祝典（明治23年12月1日 第三十号）

愛知仏教会熱田支部に於ては、去る廿八日正午十二時各宗寺院の住職二十余名参集して大般若を転読し、午後六時より仏教演説を

開きしに、弁士は神野栄彦、浅野提鋤、安達忍等、平野貞道の諸氏なりしが、同日は同地方に於ても地方有力者の発起にかゝる祝典の準備、及び廿九日の前日なりとて伝馬町などは舞子を車上に載せて町内を引き回る等の賑合にも似ず、殊の外盛大の演説にてありしと同地よりの通信。

唱道義会の演説（明治23年12月1日 第三十号）

来る五日、古渡町三丁目伝昌寺に於て同会定期の演説を開かれ、出席弁士は北海道土産水野道秀、宗教論萩倉耕三、未定演題岡無外等の諸氏なるが、同会には例月仏教者の大懇話会当番なれば、十四日午後一時より広告の如く東橘町崇覚寺に於て開かるゝ由なり。

仏教会演説実況（明治23年12月1日 第三十号）

過る廿八日、転愚堂に於て催されたる全会の派出演説は、午後六時頃より続々参聴あり。七時頃には殆んど満場となれり。第一席長谷川良円（仏教は何処にあるや）、第二伊藤寛典（案するより座が安き乎）、第三黒田安麻呂（首は誰なる乎）、第四水野道秀（北海土産）等にて、参聴は無慮六百余名と見受たりしか、最と静粛として時に拍手湯か如く頗る感情を与へられたり。

臨時試験（明治23年12月1日 第三十号）

当市裏門前町万松寺内に設置せる曹洞宗学林は、曾て全宗々務局

より頒布せられたる新教育令に依り、第一期臨時試験を此頃舉行せられたりしか、目下中学林生は廿五名にて、小学林生は六十余名なりと云か、学生は近来大に勉強の域に進み、十五科中平均に得点せし。

愛知仏教会記事〔明治23年12月8日 第三十一号〕

今回評議員として各宗取締より撰挙せられたる人名にて、本会より惣会の通知状を發せし人員は左の如なりき。

臨時總會議員 小林康任 生駒円之 酒井恵遂 安藤清治郎
青木文七 森本善七 大沢重右衛門 河津清兵衛 久松丈助 伊藤榮二郎 恩田長翼 武市又三郎 日下部徳兵衛 伊藤覺典 水野道秀 織田宝山 麗野淪明 稻葉与助 河田七左衛門 高岡亮音 古沢全誠 杉山微典 池上曜信 吉川日光 青山儀兵衛 北折源六 小笠原忠益 山田稻太 相羽和助 各務恵実 杉本了逸 奥田亮敬 山田中辰 若山直樹 佐々木賢淳 河村文六 山田尊照 酒井祖印 山田良海 武田鼎立 小林新三郎 広間隆円 長尾五兵衛 高橋順庵 松下芳太郎 河村武七 若山善右衛門 伊藤彦八 朝比奈秀玉 中村元亮 原鳳端 本田静清 山田善助 飯田幸之助 服部兵助 勝野善八 津田利三郎 中野徳三郎 瀬尾順節 林潮真 林潮音 小栗藤三郎 山本権治郎 太田元遵 水野与八 長谷川半兵衛 高岡応順 森川市兵衛 宮崎智全 三神栄阿 平野大仙 以上九十二名
一昨六日、宮出町永安寺に於て開会せし臨時總會の評議員は、何

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（二）

れも全日午後〇時卅分頃より続々参会せられ、全一時卅分頃には前項九十二名の定員中僅に廿六名の欠席のみなりき、先づ一同評議員は議席に就きしが規定会則に依り、酒井監督は議長席に就き、其の他番外一番水野道秀、番外二番日下部徳兵衛、書記高橋仙定、先づ議長臨時總會を開会せし旨を報じ、続て番外一番は、今回は臨時会なれば本会会計報告をなすの必要はあらざれども、将来業務拡張にも付帶する事なればとて、四月一日より十一月卅日に至る精算書を報告し了て議案に取りかゝりしが、酒井議長は原案に就き發言致し度ことあれば、本会の慣例に依り更に議長を指名すべきを議會に諮問せしに、満場異議なく則ち恩田長翼氏に指名す。依て氏は議長席に就く。書記原案朗読（都て七条にて、会則第十五条改正の件、全第十六条へ追加の件、免因保護会の件、全国仏教者懇話会準備二件、會員募集方法の件）等なりしが、第一誂会は無事に通過したり。第二誂会より逐条議となり議論甚だ烈しかりしが第一、第二の両条は動議者賛成過半数に満す原案に決し、一と先づ休憩を命じたり。

四時二十分より開会第三条免因保護会の件二誂会なれば、甲論じて乙駁し、頗る激しく遂に免因保護の如き慈善の業は、政府既に窮民救助に就、衆議院へ下付せられたる原案もあれば未だ如何なる結果に到るかは知れざれども、方針既に此にあれば暫時見合との動議起り、頗る勢力を得て否決せり。既に黄昏に到れば、晚食後直ちに開会することゝして休憩せり。

各議員は弁當を喫し、直ちに開会の筈なりしが、何れも平素業務

繁忙の諸氏のみなれば、寧ろ之より懇話会として評議せんとの議起り、遂に午後六時十分より懇話会として第四、第五、第六、第七條等の原案を懇話し、何れも原案に可決して、更に来る十日の通常会へ、各宗派より一名宛の委員を派して原案執行の事務を議せしむることに決し散会せられしは、午後十時なりき。

熱田に於ける井上氏の演説（明治23年12月8日 第三十一号）

昨七日、当熱田亀井山に於て愛知仏教会熱田支部の催ふしにて午前十時開会されしが、聴衆は続々開会前より会場に詰め掛け、定時に至りて満堂立錫の余地なく、十一時過ぎに至り、前席終りて井上氏登壇、宗教と国家の關係を以て二席に別ち演説せられしが、耶穌教の妄なる事を破せられ、同郡長始め一同に満足を与へられ閉会せしは午後一時過なり。

仏教大演説会（明治23年12月8日 第三十一号）

真理協会の南部会員には門前町大光院に於て仏教大演説会を催されたり。先つ同寺門前に演説の大札を掲げ、（六金色に製せしは新思考）門内に大國旗を交叉し、亦本堂前には仏旗を交叉し、裝置能く整へり。出席弁士は石川穰然、広間隆円、水野道秀、岡法城の諸師にして、参聴は会員百余名を始め総て八百余名と見受たりしが、近來の盛会なりき同会の幹事木村庄七、大平七兵衛始め其他伊藤松兵衛等の諸氏頗る斡旋せられたり。

熱田に於けるヤソの失敗（明治23年12月8日 第三十一号）

去る三十一日、同処郡役所前講義所に於ての説教は第一席加藤六太郎氏にして、仏教は偶像教なりと、例の古雑誌の復説に聴衆中より浅野提鉗氏立ちて質問と謂ふや否許さぬと謂ふ。大騒ぎに、遂には一先づ聴衆を戸外に出し浅野氏と加藤氏の問答となりしが、加藤氏は返す詞もなく、聴衆一同は仏教万歳と大呼しつゝ、浅野氏を戸外に迎へて引揚げたるは毎度なからの失敗と謂ふべし。

唱道義会（明治23年12月8日 第三十一号）

唱道義会は再昨五日、定時開会日なるを以て古渡町伝昌寺に於て演説会を開かる。出席弁士は広間隆円（所感を述べ）、岡無外（雑感）にして何れも滔々たる弁を振ひ聴衆をして満足を与へられたり。

和同協会の演説（明治23年12月8日 第三十一号）

同日、当清水普光寺に於て名和大鳳氏外数名を聘して仏教演説を開会せられしが、雨天にも関らず盛会なりきと。

有賀武雄氏耶穌教会を脱す（明治23年12月8日 第三十一号）

氏は名古屋の代言人にして、美以美教会の勸士即ち耶穌の職員なりしが、耶穌教会が皇室に対し不敬不礼なるは、常に吾人の奮懣措く能はざる処なるに、氏は左の一篇を呈して耶穌

教会を脱せられたるは以て、該教が内幕、果して 皇室なく国家なきを知るべし。最も左の書状は名古屋の各新聞に掲げあれども、遠国仏教者及び有志の御参考までに、斯くは掲ぐる事となし。以て耶蘇教なるものは、吾人が常に唱道せる如く果して国家を顛覆せんと欲する者なる事を証明するなり。

一筆啓上仕候、偕て小弟事多年全各位の御厚遇相受居り候処、曾て美以美教会条例及び伝道会社の方針、頗る我国に不適當の廉あるを発見し日夜痛心罷在候。然に其後、教会中種々問題の起る毎に、我々の希望と教会の風習及び伝道会社の方針とは常に衝突する事多く、又特に伝道及び教育上、外国人の共助を受けるは後昆の爲めに甚だ氣遣はしき次第、往々相見へ候、今其二三を例証すれば、小弟は曾て清流女学校に議員たりしが、本年九月開校前に方り、伝道会社の方針は教育と宗教とを混交し、強て生徒に聖書を教へ、或は教会へ出席するの義務を負はしむる趣旨なるを聞き、三枝氏と共に校長へ向て諫争したるも言終に容れられず、由て其際断然退職したり。又過日教会にて、天長節奉祝の際、日本の国旗と 天皇陛下御尊影の上に、日章及び米国の星章を付したる扇面掲げありたるより、牧師及び居合はせたる諸氏に其不敬を告げ、直に之を撤去せしめたりき當時、以為らく是れ一時の失誤なるべしと。然に昨廿日、日曜日に付、教会へ出席せし処何ぞ計ん。前日帝國議會開院式の爲め備へし国旗の上に又候右扇面掲げありし、実に驚入候。此事甚た小なるに似たりと雖も、国威の消長に関する最も大なれ

「能仁新報」よりみた名古屋の仏教（一）

は、小弟の流汗以て恥る処に御座候。是れ畢竟伝道に教育に又牧師教師の給料に外人の共助を受くるより不知不識。爰に至りたる者と存候。嗚呼国家百年の後を思へば、勢の馴致する処誠に測り難きものあり。右は元より基督教の本旨に非ずと雖とも、此弊風一瀉千里の勢を以て教会を支配するの傾きあれば、到底内部より微力し防止する能はざるを感悟す。由て今回、小弟夫妻御教会より断然脱会仕度候間除名被成下度、若し脱会は教会条例に明文なきを以て御承認不相叶とならば、審判の上除名放逐相成り不苦候。何れとも至急御処分相成る様希望致候。先は願用まで得貴意候。謹言

猶々甚た差出ケ間敷申条には候得共、今後御教会は勿論、外国伝道会社の共助を受ける教会へは断して入会不致。決心に付脱会见合はせ等の御忠告無御座候様願上候。併し基督に於ける小弟の信仰は乍薄、弱異変無之に付御安意被下度、又小弟の脱会は会友諸君へ対し、毛頭不平不満等無御座只我御国及び神聖なる基督教の前途を憂ふるの精神なれば、不惡御諒知被下度本文理由及び別辞等懇篤可申述本意之処、何分多年關係の教会を一朝に断絶する義なれば、已往を顧み前途を思ひ百感交々起り、胸塞り情迫り筆端洩りて尽す能はず。幸に御推察被下度候也。

明治廿三年十二月一日 有賀武雄泣拝

美以美教会御中

乍末勸士の職謹で返上す御承認奉希候

温知会〔明治23年12月8日 第三十一号〕

同会の定期講義は十日と廿五日なりしが、去月廿五日は招魂祭にて臨時休会せられしが、本月十日は講義会を開き、続けて討論会をも催さると云。講師は広間隆円、伊藤覚典、大田元遵、水野道秀氏等なりと云。

仏教講義〔明治23年12月8日 第三十一号〕

右は今回当市裏門前町総見寺前光勝院内に法苑学会なるものを設立し、去月十二日より毎日午後六時より仏書の講義を開会す。依て会員望みの諸君は本会へ申込あれ。講師は左の如し

酒井恵遂師 富田智俊師 外一名

当市裏門前町総見寺前光勝院内

十二月

法苑学会

真宗本願寺派別院略由緒〔明治23年12月15日 第三十二号〕

左に掲ぐるは、当市門前町本願寺派別院の本堂及び玄関の図にして、画は老儒森村宜民氏の息森村悌二氏の筆なり。氏は雲峰と号し、石蘭翁の門弟にして、現に同好社員の一なり。齢尚ほ少なきも、夙に妙手を以て著る。今は当市梅園町に住居せらる。

真宗本願寺派別院略由緒

当市門前町なる該派別院は、開祖見真大師より八代後恵灯大師（連如上人）、伊勢国桑名郡長島の門徒等の乞に依て、同地杉江村

に一字の坊舎を建立し、大師の末子実恵師をして住持たらしめ、願証寺と名けて伊勢尾張美濃三箇国の小本山なりしが、天正二年甲戌九月廿九日門徒の騒動によりて廃寺となりしを、本願寺十一代法主顯如上人、内大臣織田信雄公、清洲在城の砌請ふて桑名より移し再興ありける。然るに桑名長島の信徒等亦願の上、同地本願寺村に南北百二十間東西百間余の地所を請ひ受けて建立せり。

故に、清洲に再興ありし寺は通所となり、本願寺村に於て寺領九十三貫を授りありしを、文祿四年八月八日豊臣秀吉公右寺領召上げられ、替地として当国丹羽郡赤見村にて百三十九石余の寺領下され、同公より御朱印を授かりし事あり。夫より徳川公御一統後、即ち慶長御遷府の際、国祖源義直卿（源敬公）今の地へ即地引移り候旨仰せ付られしを以て、清洲より移し、旧号に基き願証寺と名け来りしが、享保三年戊二月十四日、本宗十四世寂如上人の願に依て本願寺兼帶所本坊となる。爾来幕府より御朱印、制札、御添状、御式書授かりし事あり。当院由緒書に伊奈備前守忠次よりの古証文の写しを掲げあれと今の略す。尾州家よりの御黒印を授かりし年月日

源敬公御黒印 寛永元年五月五日

瑞龍院殿同断 寛文七年二月十七日

恭心院殿同断 元禄七年九月十七日

円覚院殿同断 宝永六年十二月十七日

晃善院殿同断 享保三年二月十七日

其余尚ほ多し。梅昌院殿御廟の事は、先きに本誌に報ぜし事ある

を以て省く。当院の庭前鬱蒼として繁茂せる小丘は、二子山の古跡にして幽邃閑雅なる趣き、自から一別境を為す。古は此辺を皆山野なりしも慶長御遷府の頃、今の如く平地となせり。

橋詰町円頓寺の演説〔明治23年12月15日 第三十二号〕

来る十八日午後一時より、当市橋詰町円頓寺に於て醍醐教会々員石川穰然、松岡風枢、水野栄遠の諸士を聘して仏教演説を開かるゝ由。

仏教会大懇話会〔明治23年12月15日 第三十二号〕

昨十四日午後一時より当市東橋町崇寛寺に於きて、唱道義会が会主となり開会されし同会は、来る二十四年全国仏教者の大会に呈出すべき議題、其他を協議し、一同退散せしは午後五時過ぎにて、其の出席者は左の如し。

和同協会員酒井源二郎、仏教会酒井恵遂、四恩会阿部小兵衛、温知会水野道秀、紹隆会広間隆円、唱道義会会員奥村恒吉、高田達吉、桜木利三郎、鈴木秀次郎、佐々木祐継、加藤太郎、加藤常太郎、鈴木源之助、鈴木徳三郎

青年仏教大演説会〔明治23年12月15日 第三十二号〕

来る十二日午後六時三十分より当市橋町弘法座に於て開きたる同会は、聴衆三百名に垂んとして中々の盛大なりしが、同夜十数名の仏教演説終りて後ち一場の討論を開かる。

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（一）

法話会〔明治23年12月15日 第三十二号〕

本市塩町米商会所仲買商榊原栄蔵氏は、近来は頗る仏教を信仰せられしが、一昨十三日は祖先の諱日なりとて、自宅に於て伊藤寛典、水野道秀、柴田氏等を聘し、親戚近隣の諸氏を招き法話会を開かれたりと云ふ。

教導取締生駒円之満期〔明治23年12月15日 第三十二号〕

愛知県第一号

曹洞宗務支局所轄寺院

教導取締生駒円之、明治廿四年二月満期に付、後任の儀十五年宗局布達第四号に準拠し、来る廿四年一月廿日限り各自投票可差出此旨普達候事

明治廿三年十一月廿五日

曹洞宗務局 印

投票雛形 料紙美濃紙四ツ切

取締投票	何ノ誰
右撰拳候也	愛知県何国何郡
何村何寺住職	明治年月日 何 印
裏	表
何国何郡 何町村	投票 何 寺

愛知仏教会派出演説〔明治23年12月15日 第三十二号〕

本月十六日午後二時ヨリ 上宿興 西寺
同夜十時マテ

本月十五日午後七時ヨリ 大光 院内 転 愚堂

同 十八日午後六時ヨリ 清水 町 解 脱寺

右の箇所ニテ開会致候間、接近の会員は御参聴相成度、此段御報導申上候也。

愛知仏教会本部

愛知仏教会記事〔明治23年12月22日 第三十三号〕

例月廿五日に開会せる本会常議会の儀、本月は年末に就き臨時休会致候条此段報告す。

廿三年十二月 愛知仏教会本部

這回中、市場町に設置せる本会講義会へ世話係を置き、左の人名へ委嘱致候条此段報告す。

神谷栄三郎 山中庄太郎 伊藤熊次郎

柿 庄 八 川島 勇助

明治廿三年十二月

愛知仏教会本部

演説と法会の彙報〔明治23年12月22日 第三十三号〕

過る十六日、上宿興西寺に於て開会したる仏教会派出演説は、全日昼夜兩回なりしが、出席は伊藤、広間、黒田氏始数名にて、参

聴は四百余名と見受たり。又十八日夜、清水町解脱寺に催せし全会は出席水野、黒田、鈴木、渡辺、土方氏等、参聴は三百余時に拍手喝采あり。頗る感情を与へたり。亦来る廿三日には、中市場町講義堂に於て演説、出席是水野、広間、伊藤氏の筈、亦廿八日には大光院内転愚会堂に於て開会の筈なりと云。亦廿七廿八両日、大光院にて布薩会及説教、松山町安済院に於て一月一日大般若転読及説教、亦廿六廿七の両日は、福寿院にて秋葉祭祀ありと云。

火葬場落成式〔明治23年12月22日 第三十三号〕

予て愛知郡笈瀬村大字米野に新築中なりし同場は、昨日其の落成式を挙行せられ、弊社へも招状を送られしに依り、社員を派して其の席に望ましめたりしが、今其の実況を記さば、同地は米野村落の人家を距る三丁余の処にて、周圍に幅二間余の堀を回らし、正面を葬式堂とし、未だ落成せず。其の右に六十余坪の一棟あり。之を休息所、応接所、受付其の他事務所とし、正面の左に當て三十八坪の一棟あり。之を火葬室とす。其の中央に練瓦より構成したる恰も戸棚の如きものあり。其の正面を上等とし、其の左右を中等とす。而して其の東西の両側を下等とす。各三個を並列す。其の南方に煙筒の聳ふるあり。高さ六十八尺なりと云。実に学理上より構造したるものにして、五十分時間に悉皆骨揚を成し得るの計画なりと云。其の輕便神速なるは可驚なり。偕て当日の式場は休憩所にて挙行し、大谷派別院よりは野間氏の誦挙あり。

了て高橋助役の祝詞、庵原小金吾氏の演説、その他扶桑社より松
本氏、金城社より荒川、弊社の水野警察衛生員を始め関係村落の
役員来会者は無慮百五十余名と見受けたり。上棟式あり。亦た余
興には万歳、手踊、投餅等もあり。参観者最も多く一時に非常に
雑踏せり。

特別広告〔明治23年12月22日 第三十三号〕

於名古屋市中市場町二丁目中村嘉兵衛方

海西郡早尾村常德寺

本月廿五日午

後一時初メ 龍華空音師 説ヲ乞フ

名古屋有志同行中

土方鞆鞆氏〔明治23年12月22日 第三十三号〕

全氏は当市東桜町浄念寺住職土方慶遠氏の令息にて、久く慶応義
塾に留学せられしか、弥全科卒業して此頃帰省せられたり。之よ
り氏か数年研究せられし学理を以て、宗教場裡に現はるゝと云実
に頼もしき事なり。

仏教会派出演説〔明治23年12月22日 第三十三号〕

中市場町二丁目本月
廿三日午後六時より 中村嘉兵衛方
出席 広間君、伊藤君、水野君、土方君 外数名
東桜町 浄念寺於テ
来ル一月二日午後一時

出席 伊藤君、広間君、水野君、土方君、黒田君 外数名
右ノ箇所ニテ開会致候条接近ノ会員ハ御参聴相成度此段御報導申
上候也

愛知仏教会本部

法会と演説の彙報〔明治23年12月29日 第三十四号〕

一月一日午前九時より大光院に於て例規の羅漢尊供養及説教△全
日午後一時より松山町安済院には、大般若経転読及説教△二日午
後一時より東桜町浄念寺に於て仏教会演説、出席広間隆円、水野
道秀、土方鞆鞆、伊藤覚典、太田元遵なり△三日午後六時より中
市場町中村嘉兵衛方にて仏教会演説出席前全断及外数名△三日松
山町林松寺に於て仏教会派出演説出席数名△五日午後一時裏門前
町万松寺に於て説教△過る廿五日温知会に於て開会したる講義会
は終結に討論会を催し、交々代て説明壇に登り、参聴四百余名頗
る盛会なりき△昨夜弘法座に於て催したる青年者仏教演説及全夜
転愚堂に催したる仏教会演説へ参聴頗る多く盛会なりき△亦一昨
夜は三尺坊大士の縁日にて、裏門前町福寿院にては稚児練供養手
踊あり。夜に入て火渡りあり。△亦熱田円通寺羽休三尺坊も、全
日は天晴温和の為め近在より田舎漢参詣多く都て下向は大に賑か
にてありき△去る二十六日は碧海郡刈谷に於ては仏教青年会の開
会式を举行し、笠間龍跳、広間隆円の二師を聘し、仏教大演説を
開会せり△昨夜大高仏教会演説、出席土方鞆鞆、水野道秀の二師
にて参聴頗る多く非常の盛会なりき。

仏教青年会〔明治23年12月29日 第三十四号〕

予て当市仏教に奔走せられし高橋仙定、黒田安麿氏等の首唱に係る同会は、爾後伊藤覚典、広間隆円、水野道秀等の諸師も大に賛成せられ、弥其の組織も整頓せし故に、来一月五日を卜して一大懇親会を開き、来陽は一層仏教青年として新運動を試みらるとか云。能仁子は氏等が百敗不撓活潑なる運動せられん事を望むものなり。

愛知仏教会賞典〔明治23年12月29日 第三十四号〕

同会の会員は追々増加し、目下既に一万余に達したりとの事なりしが、亦一月より更に会員を募集せらるゝ由にて、夫々各宗寺院へ入会簿を配付せられしと云。夫に就き、既に会員募集に尽力せられし人々を取調、賞典を行はるゝ事にて日置敬円寺、大津町光円寺、日置法然寺、矢場町法光寺、飯田町禅隆寺、花車町淨信寺、出来町徳源寺等は、何れも一百余名以上会員を募集せられし廉にて賞典を行はれし筈なりと云。之に引替へ当市或宗の寺院方には、最初より一名も募集せず恬として度外視せらるゝ僧侶も下向には廿余ヶ寺もありとの事なるが、俗土すら法の為めに身を碎く時なるに、僧侶にして如斯なるに実に可憎否な気の毒なる事なり。逐々〇〇することあるへしと聞くが俛此れは忠告。……

理事伺候〔明治23年12月29日 第三十四号〕

愛知仏教会理事水野道秀師は、過る廿四日徳川侯爵の御邸を伺候

せられたり。

愛知仏教会講義〔明治23年12月29日 第三十四号〕

中市場町二丁目中村嘉兵衛氏方にて毎月三の日午後七時始
三国仏法伝通縁起

講師 広間隆円師

愛知仏教会講義〔明治23年12月29日 第三十四号〕

門前町大光院内転愚堂に於いて毎月十五日廿七日午後第七時より

羽翼原人論

講師 笠間龍跳師

仏教青年会 大懇親会〔明治23年12月29日 第三十四号〕

来る一月五日午後二時より七ツ寺境内万梅楼に於て開宴す。(会費金廿五銭) 当日持参の事
但し一月四日迄に事務所へ申込あれ

菅原町 仏教青年会事務所
浄教寺内

慈雲尊者の五条衣について

川口 高風

江戸中、後期に活躍した正法律の開祖慈雲尊者（慈雲飲光、一七一八―一八〇四）に「千衣裁製簿」がある。千衣の衣財、種類、色、縫い方、大きさ、裁製した人、助針者、受持者、製作年月日などが記されている。

千衣裁製の発願は長栄寺（東大阪市高井田元町）の護明による序によれば、

禅尼照公從來有信在家也。齋戒淨行出家也。依遵正法。明和三年丙戌正月冬安居竟之日。裁製安陀衣乙襲来。奉現前僧伽曰。此衣為首漸次製千領。奉之如法僧伽。願斯勝上福田。植仏種子。生長覺芽。正法之樹茎幹牢固。枝葉扶疏。普覆法界。一切衆生証二転依妙果。……今也禅尼之発願異世同趣。夫千領正則之衣。奉施千正法僧伽。則千衆徹然以正威儀。維持正法。

とあり、禅尼照公によるという。また、巻末の記によれば、

右一千衣竟

慈雲尊者の五条衣について

慈雲尊者千衣御袈裟御成就之御願心文化二年に成就竟也
とあり、尊者の発願という。

このように両説あるが、両者の発願ともいえ、明和三年（一七六六）正月から文化二年（一八〇五）までの四十年間に製作されたものである。

その中から五条衣をピックアップしてみると、五条、五条衣、安陀衣、安陀会と紹介しており、計一三三点がある。それを若い番号順にとりあげてみると、

第一衣 ヤイヂイイ

木蘭色。安陀衣。帖葉。五条。一長一短。馬齒縫。財体紵布。中量長六尺八寸余。広四尺二寸半余。助鍼慧日式叉尼。助鍼義文求寂尼。明和三年丙戌正月十六日奉施高井田寺現前僧伽。和尚位飲光受持。

第四十一衣 ヲ

木蘭。紵布。五条。帖葉。極小二肘四肘。慧日式叉裁縫。飲光護持。

第五十五衣 ヲ

極小^{光旨}。二四肘。壞色。帖葉。五条。有部非許非遮之制。本朝紵布狭幅。其製五条不^レ得^レ然。故且意為通剋也。安永二年冬十月八日。法与尼裁製。飲光受護。

第六十四衣 糸

古終布。壞色。二四肘。帖葉。五条。義文沙弥尼裁綴。禅照施財。飲光護持。

第八十二衣 不

紵布。木蘭。五条。割截作。中肘極小。長六尺広三尺。馬齒縫。明和九年壬辰十一月十八日成。義文沙弥尼裁製。飲光受持。

第八十四衣 不

古終布。壞色。帖葉。五条衣。二肘四肘極小量。慈眼菴実如沙弥尼裁縫。

第九十七衣 不

麻。木蘭色。帖葉。五条。飲光自肘二四肘極小量。安永二年癸巳五月廿七日神光院慧享裁縫。安永二年九月七日託默堂律師。属之市川無住居士。明日八日。

第一百衣 無名

紵布。木蘭色。五条。極小二四肘。帖葉。鳥足縫。

第一百三衣 不

古終麁布。壞色。五条。帖葉。有部非許非遮之制。飲光自肘極小量。義見裁縫。

第一百五衣 不

紵布。木蘭。帖葉。馬齒縫。飲光自肘極少量。五条。安永三年三月。義影裁縫。二宮御衣。蓮心院殿施与。飲光受持。後属之即信。

第一百九衣 不

紵布。木蘭色。帖葉。飲光自肘小量。二四肘。安陀会。安永三年三月廿九日成。普照尼裁縫并施財。

第一百一十八衣 不

紵布。木蘭。五条。割截。馬齒。小量二四肘。体飲光自以淨財。安永三年四月廿三日成。義見尼裁縫。属蓮心院通子護持。

第一百一十九衣 不

紵布。木蘭。五条。割截。馬齒。小量二四肘。属慧照尼護持。安永三年五月十二日成。義名裁。

第一百二十衣 不

紵布。五条。同上。普照尼護持。安永三年五月廿三日成。慧言尼裁。

第一百二十三衣 不

布。小量。割截。木蘭色。五条。安永三年六月十日成。宗悟尼裁製。属醫縁諦道。

第一百二十四衣 不

紵布。小量。五条。木蘭。馬齒縫。安永三年六月十五日。慧言尼裁。

第一百三十四衣 不

細紵布。五条。木蘭。割截作。小量。安永三年七月十一日成。義影尼裁。

第一百三十五衣 不

細紵布。五条。木蘭。割截作。小量。安永三年七月十三日成。慧享尼裁。

第一百四十五衣 不

細紵布。木蘭色。極小量。安陀会。帖葉。安永四年二月十八日成。

第一百五十四衣 𦵑

紵布。木蘭。五条。馬齒縫。安永五年丙申五月。惠日式叉製。慧享助針。

第一百五十九衣 𦵑

紵布。木蘭。帖葉。五条。馬齒縫。安永五丙申十月。義禎尼裁。伊賀蓮性尼へ与。

第一百六十衣 𦵑

古終布。木蘭。帖葉。五条。小量。安永五丙申十月。智碩裁縫。

第一百六十三衣 遠山 飲光護持。

納衣。安陀会。貼葉。二四肘。安永五年丙申十二月廿五日裁。義禎尼製。つたへては遠山鳥のおろのおの。ながくも法の鏡ともなれ。

第一百六十四衣 𦵑 帝須沙弥護持。

紵布。青色。飲光自肘二四肘。安陀衣。安永六年丁酉正月四日。義見尼裁。

第一百六十五衣 𦵑

紵布。二四肘。割截。五条。青色。安永六年正月六日。法護沙弥護持。

第一百六十七衣 𦵑

紵布。割截。青色。五条。二四肘。馬齒。安永六年二月十五日。慧言裁。

第一百六十八衣 𦵑 飲光護持。

壞色。五条。割截。青色。紵布。馬齒。二四肘。収仏舍利乙粒。

安永六年丁酉二月廿六日。宗悟尼裁製。

第一百七十四衣 𦵑

木蘭。細紵布。五条。馬齒。財体円成居士遺捨。実如沙弥尼裁縫。安永七年戊二月十三日成。付浄光沙弥。

第二百四衣 𦵑

雜碎衲衣。五条。木蘭。割截。飲光護持。安永九年庚子五月廿五日成。宗悟尼裁。

第二百十七衣 𦵑

紵布。青色。帖葉。鳥足。五条。転輪寺真岡自弁財体。自護持。安永五年庚子九月十日転輪寺某尼裁。

第二百十八衣 𦵑 飲光護持。

琉球国布。木蘭。割截。五条。中量。馬齒。近衛前関白太政大臣准后内前公為^ニ其子准后女御維子^ノ以^ニ芳春和尚^ヲ求^メ祝願^ヲ於^ニ予^ニ。以^ニ此財体^ヲ寄^ス芳春真岸^{岩カ}和尚^ニ和^ニ尚付^ス之^ヲ予^ニ。安永九年庚子九月廿四日成。慧日裁。

第二百二十八衣 𦵑

雜碎紵布覆沙。極小量。五条。割截。馬齒。天明改元辛丑六月七日成。大日堂宗悟尼等裁。禪器比丘護持。

第二百三十九衣 𦵑

細紵布。同木蘭。五条。二四肘。馬齒。割截。天明二年丙寅三月十一日成。宗悟尼令^ム宗知尼^ヲ裁^セ。信問長老護持。

第二百四十六衣 𦵑

紵布。木蘭。雜碎。割截。五条。宗悟尼自肘之二肘四肘。宗悟沙

弥尼裁。天明二年丙寅三月二日成。

第二百七十九衣



後 武州下谷金杉安樂寺主通阿師護持。

極小量。五条。紵布。割截。鳥足。天明二年成。尾州津島貞寿寺尼任声裁製。

第二百八十一。二。三。四。五。六。

五条二。七条三。大衣一。開明門院御方護持之分。天明卯四月至八月成。

第三百四衣



青色。割截。五条。紵布。香山式又護持。

第三百八衣



木蘭色。割截。五条。宗珠裁。天明五巳年。道智居士護持。

第三百十三衣



雜碎。五条。割截。馬齒。天明五年。

第三百二十八衣



古終布。壞色。中量。五条。割截。馬齒。天明五年十二月十七日。慧日式又財体寄付。惠淳沙弥尼裁。

第三百三十九衣



紵布。五条。木蘭。小量。割截。宗珠尼裁。寿忍尼護持。天明六年。

第三百八十四衣



古終布。小量。木蘭。五条。天明八年二月成。真行裁縫。

第三百八十五衣

古終布。小量。五条。木蘭。馬齒。天明八年三月。励山尼裁縫。

第三百八十六衣

古終布。小量。五条。木蘭。馬齒。天明八年戊申四月。真行裁縫。

第三百八十八衣



古終布。極小量。五条。割截。木蘭色。天明八年戊申二月成。如月護持。

第三百九十衣



紵布。極小量。五条。木蘭。割截。馬齒。中峰尼裁縫施与。天明八年。

第四百十五衣



紵布。木蘭。極小。五条。割截。惠南沙弥尼。寛政元年己酉二月晦日。

第四百二十六衣



紵布。木蘭。五条。極小量。義憶尼裁。寛政元年己酉三月。

第四百三十五衣



紵布。木蘭。割截。五条。小量。門了尼裁。寛政元年己酉三月。

第四百三十六衣



紵布。割截。五条。財体義充尼供養。寛政元年酉四月。義充尼裁。

第四百三十八衣



紵布。小人自肘。極小量。五条。割截。寛政元年己酉。杉原寿貞尼護持。

第四百三十九衣



古終布。極小量。木蘭。五条。割截。馬齒。寛政元年己酉四月二十九日成。れい山尼裁。

第四百四十三衣

紵布。木蘭。五条。割截。恵学尼裁。寛政元年酉六月晦日。

第四百四十七衣

紵布。木蘭。小量。五条。割截。財体中峰大尼供養。寛政元年酉六月成。

第四百五十二衣

紵布。壞色。小量。五条。割截。馬齒。寛政元年。

第四百六十三衣

古終布。木蘭。五条。割截。馬齒。寛政二年戊正月十三日成。恵上尼裁。

第四百七十二衣

紵布。極小人自肘。小量。五条。壞色。寛政二年戊正月晦日。恵上尼裁。

第四百七十五衣

紵布。木蘭。五条。小量。雜碎衣。寛政二年戊六月十七日成。宗珠裁。

第四百八十二衣

紵布。壞色。五条。小量。馬齒。施主たゝあこ谷妙照尼供養。寛政二戌八月七日成。恵忍尼裁。

第五百三衣

紵布。木蘭。五条。小量。雜碎衣。帖葉。大和上様御護持。宗珠

裁。寛政二戌六月十七日成。

第五百十五衣

古終布。木蘭。五条。極小量。帖葉。馬齒。大和上様御護持。財体宗珠御供養申上る。寛政三年亥十二月十五日成。宗珠裁。

第五百二十二衣

紵布。木蘭。小量。五条。割截。馬齒。小山屋慈海居士護持。寛政四年子後二月二十八日成。宗珠裁。

第五百三十五衣

越後布。青色。五条。割截。小量。馬齒。財体智淨尼施。実堂式又裁縫。寛政四年壬子十月十五日。

第五百四十衣

紵布。五条。木蘭。割截。馬齒。寛政四年壬子十一月二十日成。宗珠裁。淨智居士護持。

第五百四十九衣

古終布。極小安陀会。青色。禰葉。寛政五年丑三月。幻住居士自裁施焉。

第五百五十四衣

紵布。木蘭。小量。五条。割截。馬齒。寛政五年四月二十九日成。御厨屋村義俊尼裁。御厨屋邑淨源護持。

第五百五十八衣

紵布。木蘭。帖葉。五条。もうしやう。馬齒。寛政五年丑六月十七日。真行尼裁。

第五百五十九衣

越後。青色。五条。小量。馬齒。寛政五年丑六月。

第五百六十衣 𦵑

紵布。木蘭。五条。有部也。外より願候に付十八日に是とのへ遣さるゝ也。寛政五年丑六月二十八日。

第五百六十一衣 𦵑

紵布。木蘭。五条。帖襦葉。馬齒。寛政五年丑六月二十九日。義像尼裁。

第五百六十九衣 𦵑

古終布。五条。木蘭。襦葉。馬齒。寛政五年丑九月朔日。宗珠裁。財体槌屋喜兵衛是を供養す。

第五百七十二衣 𦵑

屈襦。五条。木蘭。小量。寛政五年丑^イ八日成。恵日式叉裁。財体恵くわん尼施。

第五百八十一衣 𦵑

紵布。五条。小量。壞色。馬齒。寛政六年寅四月六日成。宗怡尼裁。

第五百八十五衣

紵布。木蘭。五条。割截。馬齒。寛政六年寅五月廿五日成。れい山尼裁。財体秀道律師護持。

第六百二十一衣 𦵑

古終布。木蘭。極小安陀会。馬齒。寛政七年五月二十九日。真行裁。

第六百廿四衣 𦵑

古終布。五条。木蘭。寛政七年。真行尼裁。

第六百三十三衣 𦵑

細紵布。五条。木蘭。小量。馬齒。寛政七年卯十一月。義像尼裁。忍瑞比丘護持。

第六百三十九衣 𦵑

紵布。木蘭。五条。小量。馬齒。寛政七年卯十二月。

第六百四十一衣 𦵑

細紵布。木蘭。五条。小量。寛政八年辰正月廿三日。真学裁。

第六百六十一衣 𦵑

越後。木蘭。割截。馬齒。五条。寛政八年辰六月五日。

第六百七十八衣 𦵑

紵布。木蘭。五条。帖葉。極小量。寛政八辰八月十五日。門了裁。

第六百八十一衣 𦵑

紵布。小量。五条。帖葉。木蘭。馬齒。寛政八年七月二日。女院御所にて御局方御寄合裁。

第七百三十七衣 𦵑

古終布。五条。木蘭。小量。割截。馬齒。寛政十年午正月十一日成。恵元尼裁。

第七百四十三衣 𦵑

越後。五条。極小量。木蘭。馬齒。寛政十年戌午二月三日成。真学尼裁。

第七百六十九衣 𦵑

信州つむぎ木綿。五条。割截。馬齒。寛政十年午八月十七日。財
体倉光□左衛門殿。実堂式又裁。

第七百九十一衣 𑖦

紵布。木蘭。五条。小量。割截。馬齒。寛政十二年庚申正月四
日。真学裁。

第七百九十三衣 𑖦

五条。寛政十二年庚申。京都にて成。

第七百九十四衣 𑖦

五条。寛政十二年庚申。京都にて成。

第八百五衣 𑖦 𑖦 𑖦

紵布。黄木蘭。五条。小量。割截。馬齒。寛政十二庚申五月十五
日成。宗怡尼裁。財体宗珠供養し奉る。

第八百十六衣 𑖦

紵布。木蘭。割截。五条。馬齒。寛政十三酉二月成。宗実尼裁。

第八百十七衣 𑖦

紵布。木蘭。五条。割截。馬齒。寛政十三酉二月成。真学尼裁。

第八百二十七衣 𑖦

紵布。木蘭。五条。割截。馬齒。享和元年酉四月十四日。宗吟
裁。

第八百二十八衣 𑖦

越後。五条。壊色。割截。馬齒。享和元年酉四月十四日。宗実
裁。

第八百四十三衣 𑖦

紵布。木蘭。五条。割截。高井田安置。享和元年酉十月成。恵日
尼裁。

第八百五十五衣 𑖦

紵布。木蘭。五条。割截。馬齒。享和二年戌四月成。宗与尼裁。

第八百五十六衣 𑖦

紵布。木蘭。五条。割截。馬齒。享和二年戌四月成。宗与尼裁。

第八百六十四衣 𑖦

紵布。縵衣。五条。割截。馬齒。享和二年戌四月成。宗実尼裁。

第八百六十六衣 𑖦

紵布。壊色。五条。割截。馬齒。享和二年戌五月成。宗与尼裁。

第八百八十三衣 𑖦

紵布。五条。木蘭。割截。馬齒。享和三亥年三月成。

第八百八十五衣 𑖦

越後。木蘭。五条。割截。馬齒。大和上様御護持。享和三亥年四
月成。宗実沙弥裁。

第八百九十七衣 𑖦

紵布。木蘭。五条。割截。馬齒。享和三亥年七月十四日。真学
裁。

第八百九十八衣 𑖦

紵布。黄木蘭。縵衣。五条。割截。馬齒。享和三年亥七月十六
日。宗怡尼裁。郡山御部屋蘭の方護持。

第八百九十九衣 𑖦

紵布。木蘭。縵衣。五条。割截。馬齒。郡山御部屋蘭の方護持。

享和三年亥七月十六日成。宗怡尼裁。

第九百十五衣

古終布。木蘭。五条。割截。馬齒。財体秀慶尼御供養す。享和三年亥十月六日成。秀慶尼裁。

第九百二十五衣

紵布。木蘭。小量。五条。割截。馬齒。財体お蘭方実母供養。文化元年甲子二月二十五日成。

第九百六十七衣

紵布。木蘭。五条。割截。馬齒。文化二乙丑九月。

第九百六十八衣

紵布。木蘭。五条。割截。馬齒。文化二乙丑九月。

第九百七十衣

紵布。木蘭。五条。割截。馬齒。文化二乙丑年。

第九百七十一衣

紵布。木蘭。五条。割截。馬齒。文化二乙丑年。

第九百七十六衣

木綿。木蘭。五条。割截。馬齒。文化二年。

第九百八十二衣

木綿。木蘭。五条。文化二年。

第九百八十五衣

紵布。青色。五条。文化二年。

第九百九十五衣

紵布。木蘭。五条。割截。文化二年。

となる。色は木蘭七十三、青色九、壊色八、黄木蘭二で、木蘭が最も多い。割截衣が六十一あり、帖葉が十九、襷葉が三帖あり、帖襷葉、屈襷もみえる。縫い方は馬齒縫六十四、鳥足縫三で、馬齒縫が最も多い。衣財は紵布六十六、古終布十八、越後ちりめん五、麻一、布一であり、紵布が最も多い。大きさは縦二肘、横四肘で、極小二肘四肘、中量、小量二肘四肘、極小、欽光自肘極小量などと紹介されている。

製作された数の多い年次は安永三年（一七七四）に九帖が作られて以来、寛政五年（一七九三）、文化二年（一八〇五）に八帖、享和三年（一八〇三）に六帖、天明八年（一七八八）、寛政元年（一七八九）、同二年（一七九〇）に五帖、安永五年（一七七六）、同六年（一七七七）、寛政七年（一七九五）、同八年（一七九六）、同十二年（一八〇〇）、享和二年（一八〇二）に四帖が作られており、晩年に多くの五条衣が作られたことがわかる。

尊者の五条衣は『方服図儀』巻上に、

安陀会 五条。一長一短十隔割截作。或帖葉。或褊葉。新衣一重。故衣二重。若糞掃隨意多重。若二日不_レ成者得_レ罪。

馬齒縫

鳥足縫
丁葉押

伝説鳥足

編葉辺

此中馬齒全依_ニ伝説_ニ。編葉今新図出。鳥足縫準_レ義改作。然文獻不_レ足徵。不_レ免臆説。且録俟_ニ他改正_ニ。

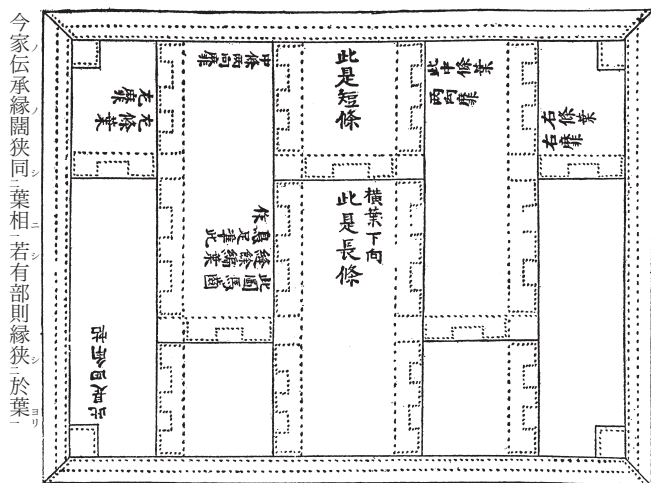
という。隔数、葉、縫い方などが記されているが、大きさは「第五取量準教」に、

局量者。長五肘広三肘上也。長四肘半広二肘半下也。極大長六肘広三肘半。極小安陀会长四広二。若過若減得_レ罪。此肘須_下依_ニ自肘_ニ量_之。

といい、長け五肘、広さ三肘であるが、長け四肘、広さ二肘の極小の安陀会も認めている。しかし、尊者の五条衣は現在、歷住寺

慈雲尊者の五条衣について

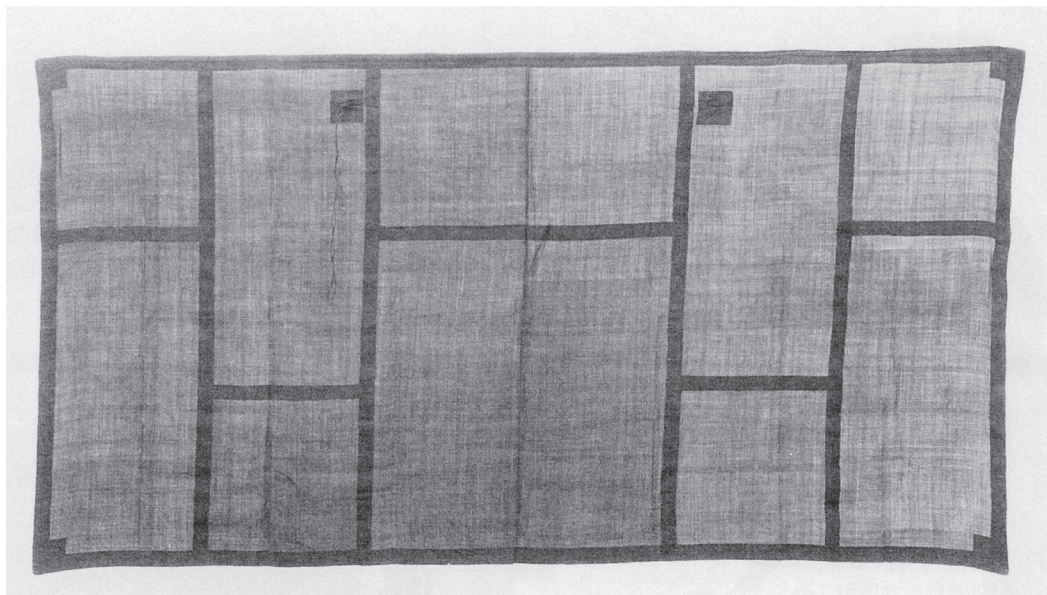
五取量準教



今家伝承縁闊狭同葉相若若部則縁狭於葉

院などに所蔵されていない⁽²⁾。それはなぜであろうか。院内道行作務衣、下衣の五条衣は普段搭けていたものであるため破損が多くあり、処分されたのではなからうか。また、主たる袈裟ではないところから、二十五条衣や糞掃衣などが遺品の中心として残ったのではなからうか。

そこで、尊者の影響を受けた一人の光雲海如⁽³⁾（一八〇三—七七三）の五条衣をみたい。海如は文政十二年（一八一九）に長谷寺



海如の五条衣（縦94センチ、横190センチ）

の敝英について入壇灌頂し、同年尊者を嗣いだ智幢法樹の下で菩薩戒を、天保元年（二八三〇）には具足戒を受けた。天保七年（二八三六）には能満院に入住し律規を制定して山内を肅正し、高貴寺の僧坊寺務七世となり堂舎の修復に努めた。海如も千衣裁製をしており、筆者の入手した五条衣は、安政四年（一八五七）正月に本恭妙耀が蓋裏に

夫袈裟ハ仏々同道ノ章服、三乗ノ賢聖共ニ被奉スル所也。天竺震旦ハ置テ、日本ニハ鹿島ノ神兜ノ中ニ納メ、太神宮八幡宮共ニ尊重シテ名僧ノ袈裟ヲ乞タマヘリ。上宮太子役行者、常ニ身ヲ離チ玉ハス。是ヲ以テ其徳ヲハカリシルベシ。此衣海如律師施行千衣ノ随一ニシテ、衣角ノ中ニ舍利宝篋印陀羅尼ヲ納メ、修法加持シ自ラ年来被奉スル所也。時ニ佐波常照居士、円明姉ノ篤信ヲ感シテ授ケラレタリ。余ハ一切吉凶ノコトニヨラス。常々頂戴供養シ、仏ノ如ク塔ノ如ク敬フヘキ仏制ヲ守ラハ、其獲福量リナカルヘシ。妊者病者臨終人年月厄難一切頂戴尊重シ永世ニ伝ヘテ恭ク家鎮トスヘシ。今箱成テ記ヲ余ニ乞フ。因テ記。

安政四年歲在丁巳正月吉日

本恭妙耀拜誌

と記しているところから、海如の千衣の一帖である。縦九十四センチ、横一九〇センチで縦二肘、横四肘の大きさである。木蘭色に染められた麻で、右隅には朱で小さく梵字が印されている。一長一短の割截衣であるが、葉は馬齒縫になっている。したがって、海如を通して尊者の五条衣が想像でき、掛絡とか守持衣では

なく偏袒右肩に搭ける豎二肘、横四肘の五条衣といえよう。

注

(1) 「千衣裁製簿」は高貴寺に所蔵しているが、『慈雲尊者全集』第十六(大正十五年五月 高貴寺)二十九頁以下に翻刻されているのでそれによった。ここでは第八百九十八衣、第八百九十九衣のように「縵衣。五条」とあるものも採録した。なお、「同」とある場合は、前の衣と同じであるところから該当する項目や年月日などを記した。

(2) 筆者は関係寺院に書簡で五条衣の有無を問合せしたが、高貴寺、長栄寺には所蔵していない旨の返信をいただいた。京都の長福寺、水菓師寺よりは返信がなく未詳である。

(3) 光雲海如については田中海応『海如和上伝』(大正十三年十二月 徳蔵寺)、田中海応『海如和上言行録』(大正十三年十二月 徳蔵寺)があり参考となる。

執 筆 者 紹 介

尾 崎 孝 之 (本学教授…………… フランス語)
OZAKI Takayuki

清 水 義 和 (本学教授…………… 英 語)
SHIMIZU Yoshikazu

小 村 賢 二 (本学教授…………… 統 計 学)
KOMURA Kenji

川 口 高 風 (本学教授…………… 宗 教 学)
KAWAGUCHI Kōhū

教 養 教 育 研 究 会 委 員

(会長) 岡 島 秀 隆 (副会長) 岡 田 千 昭

(会計) 近 藤 浩

伊 豆 原 英 子 糸 井 川 修 河 野 敏 宏

※北 村 伊 都 子 小 林 秀 一 堀 田 敏 幸

※八 谷 芳 樹 ※山 口 均 山 下 秀 康

山 名 賢 治

※本号編集委員

編 集 後 記

『愛知学院大学教養部紀要』第60巻第2号をお届けします。今回は、論文4本、資料1編を掲載することができました。

率直に言いまして、自分の専門分野以外の論文はなかなか読む機会がないことが多いのですが、目次をご覧になっていただければお分かりのように、幅広い教養教育を目的とする「教養部」ならではの、多様で多彩な主題の論文になっています。広くお目通しをいただければ幸いです。(山口記)

平成24年10月25日 印刷
平成24年10月30日 発行

(非売品)

愛知学院大学論叢
教養部紀要第60巻
第2号(通巻第175号)

編集責任者
岡 島 秀 隆

発行者 愛 知 学 院 大 学
教 養 教 育 研 究 会
〒470-0195

愛知県日進市岩崎町阿良池12
電 話 〈0561〉(73) 1111 (代表)

印刷所 株 式 会 社 あ る む
電 話 〈052〉(332) 0861

THE JOURNAL OF AICHI GAKUIN UNIVERSITY

Humanities & Sciences

Vol.60 No.2
(Whole Number 175)

C O N T E N T S

Articles

- Takayuki OZAKI : De l'espoir de la jeunesse au bonheur de la vie
—Le cheminement de l'âme de Chûya Nakahara— (1)
- Yoshikazu SHIMIZU : Thomas Pynchon & Shuji Terayama—Media Picture Theory— (13)
- Kenji KOMURA : Global Warming Forecast with R (47)
- Kôhû KAWAGUCHI : On the Gojyoue Worn by Jiun Sonjya (122)

Materials

- Kôhû KAWAGUCHI : Buddhism in Nagoya as Seen in the *Nounin Simpou* (1) (110)

Published
by

Aichi Gakuin University
Nagoya, Japan
2012